Xiao

東方三界黄龍伝「小龍編・第一部」

文・絵　小龍

目次

序 calling 5
1 陽輝と敖丁 7
2 ブラックリスト 23
3 沙龍と奏欽 36
4 ファーストコンタクト 43
5 水雲宮の晩餐 60
6 うさちゃんの主張 80
7 敖閏の主張 104
8 東極山の混迷 125
9 お茶会 142
10 大将代理の資格 164
11 セカンドアプローチ 176
12 ノーサイド 198
13 四十八時間 215
14 副官たち 228
15 元帥官邸 237
16 魁斗星君 255
17 直接対決 271

主な登場人物

沙龍（甲斐馨）……主人公。水雲宮でのんびりと暮らしている。
碧霞元君……四行マイスターという恐るべき力を持つ、泰山府君の娘。
九雷……天界軍元帥。沙龍の婚約者。
陽輝……西方軍大将。九雷の親友。
景春……東方軍大将。天界一という剣技を持つ。
敖丁……南方軍大将。南海龍王家の若様。天才肌でシスコン。
奏欽……南海龍王。敖丁の妹で、陽輝の妻。
敖閏……西海龍王。ダンディーな中年。
木佐小次郎（真武君）……沙龍の親友。四方将神の一人。
魁星……近衛府の隊長。軽いナンパ男。
小龍……沙龍のペットの幼龍。

序　calling

音はいつも聞こえていた。
紙の触れ合うかすかな音、風に揺れる窓の音、人々の行きかう足音。
覚えているのは誰かの声。
柔らかな水のイメージと共にその声は私の体に刻み込まれている。

「君はね、幸せになるべきだよ」

彼はいつも私に語りかける。
その声はどこか悲しげで、優しくて。ただひたすら優しくて、心地のよいトーン。

「全て忘れろとは言わない。でも、幸せになろうね」

この波長はどこまでも私を三界（さんがい）（注１）に酔わせる。

「あの悪意に満ちた研究も父の所業も全て忘れろとは言わない。仕返したいのならそれもいい。それは僕が甘んじて受けよう。だけど、きっと幸せになろうね」

この人はなにを悲しみ、なにに怒っているのだろう。

夢はいつも唐突に終わるので分からない。

「だから、輝くような名前をつけてあげる。この砂漠のオアシスのような――」

（注１）三界……ここでは「過去・現在・未来」のこと。

1　陽輝と敖丁

火雲宮の西側はほぼ全域が軍事エリアといっていい。四方軍の各本部があり、司令本部がある。

当然、一般市民は立ち入り禁止の場所だが、敷地内には緑が溢れ、軍事施設特有の固いイメージはほとんどない。

沙龍はふとあたりを見渡した。

それがいつもの白昼夢のようなもので、時間にして一秒に満たないと分かっていたが、一体どれくらいのあいだ呆けていたのだろう、と不安になる。

「……」

沙龍の見ている風景には「芝生に入るべからず」の看板と緑色の芝生がある。

その手前の歩道を行き交う濃紺の軍服を来た者たちはみな忙しそうで、私服姿の沙龍のことは気にも留めない。彼らがチラッと視線を向けるのは、綺麗に刈り揃えられた芝生の上でだらしなく寝ている男の方である。ただ、視線を飛ばしな

がらも誰もなにも言わないのは関わり合いになりたくないからだ。
沙龍とて、その死体のような昼寝中の男が誰なのかは分かっていたが、無視して通り過ぎようとした。
しかし、沙龍の肩の上であくびをしていた小龍（シャオロン）は寝ている男に気付くとムッと目付きを鋭くし、
「あ……」
沙龍が止める間もなく、ヒュン、と宙に舞い上がったかと思うと、すぐさま急降下して、その男に頭突きを食らわした。条件反射だろうか。小龍はあのオレンジ色の髪を見るとこういう行動に出る。
しかし、寝ているところをわざわざ攻撃しに行くということは、もしかしたら一パーセントくらいの親愛の情もあるのではないか、とも思う。
沙龍はその様子をしばらく見守っていた。
小動物の悪戯くらいで陽輝（ようき）は起きる気配はないが、髪の毛を引っ張られるのはやはり嫌なようだ。
寝ながらもムンズと伸ばした手で小龍の首根っこを押さえたまま意地でも昼寝

を続けようとしている。
「キュウ!?」
ジタバタと暴れる小龍が必殺技の「噛み付き」をお見舞いすると、やっとのそのそ起き上がった。
「……そんなに俺が好きか」
「ムギュー！」
上着のボタンを全部外し、自宅でくつろぐような格好で昼寝をしていたこの男が一軍の将だなどと誰が信じるだろう。着用義務になっているはずのネクタイもしていない。オレンジ色に染めている髪は一応短めに散髪してあるが、これではせいぜいフリーの傭兵にしか見えないだろう。
陽輝は、腕組みしてこちらを見ている沙龍に気付くと、小龍の小さな体を飼い主の方に放り投げた。
「沙龍、そいつを押さえててくれ。俺は眠い」
そう言ってまた寝転ぶ。
沙龍の肩に戻ってきた小龍は「フン！」と鼻を鳴らしている。「よし、一撃入

れてやったぞ！」と言っているようだ。相変わらず、仲がいいのか悪いのか分からない。
やれやれ、と溜息ついて、沙龍は帰ろうとするのだが、そのとき、にわかに陽輝が起き上がった。
「あ？　なんでお前、ここに居るんだ？」
「散歩」
「はい……？」
「いや、なんとなく通りがかったんで」
「おいおい、なんとなく通りがかるような場所でもねぇと思うが？」
「そんなことより、仕事サボって昼寝する暇があるなら、欽チャンに会いに行ってあげれば？」
話題を変えると陽輝はまた寝転んでしまった。都合が悪くなると聞こえない振りをするのは万国共通である。
沙龍は「芝生に入るべからず」の看板を数秒眺め、さらに、裾も袖も長すぎる自分の豪華な衣装をじっと見回してから、なんとかなるだろうという判断の下、

その看板を電光石火の速さで引っこ抜き、それを裏返しにして、陽輝の頭上にある潅木の根本に差し入れた。
そして、なにごとも無かったかのように陽輝の隣に座る。
「グルル……！」
小龍がまた陽輝に噛み付こうとしたので、胴体ごと捕まえて阻止した。
「コラコラ。どうしてキミはそう陽輝にだけ好戦的かね」
「ウギュ……」
「仮にも長い間お世話になった人でしょ？」
その間の扱いが物凄く酷かったからこそこうして嫌っているのだろうが、最近になってそれだけじゃないのかもしれないと思うようになった。
「この子さー、もしかして、陽輝に欽チャンを取られたと思ってるんじゃないの？」
小龍が奏欽（そうきん）のことを気に入っているのは態度を見れば分かる。陽輝には問答無用で噛み付く小龍が、奏欽にはデレデレの甘々なのである。
だから、小龍が陽輝のことを殊更嫌うのは嫉妬からきているのではないか、と

沙龍は言っているのだ。
しかし、
「だったら一番好きな主人を奪った九雷を一番に嫌うはずだろ？」
寝ているはずの陽輝が微妙な矛盾を指摘する。
「そうなんだよねぇ……」
小龍は時として主人を取り違えてるんじゃないかと思うほどに九雷に懐いているのだ。
それは単純に「自分に餌をくれる人は好き」という意味かもしれないが、小龍をよく知る者たちのあいだでは不思議な現象だった。
敷地を行き交う将校たちは芝生で寛ぐ不届き者が一人から二人に増えたところでやはりなにも言わない。
陽輝が有名人で西方軍大将であることを知っているからなのだ。この無法者の大将に諫言できるのは同格の大将達か、元帥ぐらいである。
「そういえば、なんでこの子はずっと歳取らないの？」
沙龍が聞いた。

「小龍のことか？」
「うん。だって、昔、緑麗が拾ったときからずっとこの幼体なんでしょ？」
「さぁなー。……なんか、特異体質なんじゃねぇか？」
相変わらずいい加減なことしか言わない陽輝だが、小龍のことはどうでもいいのである。
寝ぼけ眼で、なぜ民間人の沙龍がここに居るのかを考えている。答えはすぐに出た。
一般市民は立ち入り禁止のこのエリアに無位無官の沙龍が「それなりの格好」をして居るということは「それなりのこと」があったからだろう。
それがなにかといえば、あの件しかない。
「また天ちゃんに呼ばれたのか」
完全に目が覚めてしまったらしく、陽輝は体を起こして上着のポケットから煙草を探した。
くしゃくしゃになった紙の箱には最後の一本が入っていたがライターがない。
『火行術』の初歩である『掌上発火』をしてもいいのだが、寝起きであれをや

るのは少々しんどい。体中のポケットに手をつっこみながら、ライターかマッチを探した。
「表向きは『お茶会』だったけどね」
その言い方で沙龍があまり説明したくないらしいことは分かる。
「そうかい」
と、苦笑したところへ、
「火をお探し？」
かすかな怒りのにじんだ、高圧的な声が掛かった。
陽輝は途端に頬を引きつらせたが、逃げるなり、防御するなりといった挙動に移る間もなく、
ゴオッ
と、火炎放射器から放たれたような炎が陽輝の上半身を襲った。ネズミなら一瞬で焼け死ぬくらいの熱量だ。
隣に座っていた沙龍に余波がなかったのは、この技を放った人物の配慮かもしれない。が、そうではなく、彼には「標的」だけを焼き尽くす自信があった、と

いうほうが正しいだろう。
「おい……」
煤で真っ黒になった陽輝は三メートル先の歩道で仁王立ちしている敖丁（ごうてい）を睨んだ。
が、多少やりすぎな観はあれど、この状況では敖丁の方に分がある。
「立ち入り禁止の場所で勤務中に昼寝、さらに禁煙エリアで喫煙とくれば、これだけでも三つの規則を犯してるね」
「いつから俺に意見できるほど偉くなった。俺をブタ箱にぶち込みたかったら、おめーの大好きな令状を持ってきな」
行き交うスタッフ達はこの一帯を避けるように歩き始める。当然だろう。誰だってこんな子供の喧嘩のような騒動に巻き込まれたくはない。
「……」
沙龍は諦め半分にこの喧嘩を見守るしかなかった。
軍内部で、いや、帝都中で、この二人の犬猿の仲を知らぬ者は居ない。
ただ顔を会わせて嫌味を言い合うくらいならまだいいのだが、この二人の場

合、周囲に実害が及ぶから大迷惑なのだ。
「月一の報告書くらい期日に上げてくれないと困るんだけど。四方軍は自由でいいですね、とか、特務の連中にさんざん嫌味を言われるんだよ」
その期日を守らない不届き者は滅多に総司令部には顔を出さないので、実際に嫌味を言われるのが他の大将とあっては敖丁の怒りも当然であろう。
「同僚ってのは仕事をしないヤツを歓迎するもんだぜ？　功績上げられちゃ困るだろ？」
「お生憎。僕は肩書きも名誉もこれ以上は要らないよ」
「もともとおめーの名誉なんてそれほどねぇと思うが？」
「……」
プスプスと燻る炎を身にまとった敖丁は、それでも陽輝の隣に沙龍が居るせいか、最初の一撃以降攻撃はしてこない。
しかし、忘れてはならない。敖丁は沙龍のことも嫌っているのだ。この生意気で不遜な元将神は「僕の大事な可愛い欽ちゃんを色々連れ回す馬鹿者」なのである。

そして、沙龍にとってもこの龍王家の若様大将は「自分勝手なシスコン野郎」である。当然いい感情など持っていない。
野郎二人の喧嘩は放っておいて帰ろう、と沙龍が立ち上がりかけたとき、
「だいたい、なんで緑麗がここに居るのさ。君はもう軍部とは無関係な人でしょ」
敖丁の怒りのとばっちりがきた。
部外者はさっさと出て行け、という口調だが、沙龍はここまでは特になんとも思わなかった。取り合わなければいいだけの話である。
「……じゃあ、陽輝。私は帰るから」
沙龍はわざわざ二人の間を裂くようにして、陽輝と敖丁の胸を両手でそれぞれ軽く突いた。大の男二人が、いい加減にしとけよ、と言っているのである。
「……？」
そのとき、沙龍はまたあの白昼夢に陥った。
チャプン、という水の音すら聞こえた気がして、呆然と自分の左手が敖丁の軍装の胸ポケットあたりにあるのを眺めている。

視線をわずかに上げると、高慢な目をした敖丁の顔がある。
この人ではない、というのは直感で分かるのだが、なぜか沙龍の覚えている『声』がどこからか聞こえた。

『幸せになろうね』

冗談じゃない、と思う。
いま、このシチュエーションで、そんなセリフが再生されてしまっては、こんな嫌味で、タイプではない男と『末永く幸せに』という意味にも取れてしまうではないか！
沙龍は脳内で「やめろー！」と叫び、すぐにその場を去ろうとした。
背後では沙龍のいまの行動にもかかわらず、まだののしり合いを続けている二人が居るが、その二人の声が急にストンと落ち……、いや、上がった。
「ウグ……？」
尻餅をついたらしい。

芝生の一本一本が、急に巨大になって目の下にある。
「あー……、敖丁、悪いが一時停戦だ」
陽輝の声がはるか彼方の上空で聞こえて、いやでも理解する。
今月もまたミニ黄龍になってしまったのだ。
月一のこの変化は女性特有のものと大体同じで周期があるはずなのに今月はやけに早い。
おかしいな、と沙龍は小さな短い指を折りながら計算していた。
敖丁は、というと、意外にも素直に停戦を受け入れ、
「とにかく、報告書は今日中に提出しておいてよね！」
と、わめきながら去った。
「……」
なぜ一週間も早くこの姿になってしまったのだろう。
あまり物事を深く考えないこの姿では、すぐにその疑問も忘れた。

陽輝に水雲宮まで送ってもらった沙龍はしばらくこの盟友をこき使っていた。
この姿ではなにをやるにも人の手が要るのだ。
悠花や紗衣にやってもらってもいいのだが、今日は陽輝自身が職場にも家にも戻りたくない事情があったようで、丁度いいからと色々やらせていたのだ。
料理長が作ってくれたミニサイズの春巻きをさらにナイフで細かく切っている――切らされている――陽輝はその理由を、「南海龍王家のいざこざ」と、説明した。
「でも、欽チャンはお父さんと絶縁してるんじゃないの？」
小さな黄色い龍が言う。
「あいつのことだからなー、絶縁って言っても実際には『口もきかない』ってわけじゃなくて、会えばそれなりにシガラミがあんのよ」
「ふーん……、アチチ」
春巻きを一切れ口に放り込んだが、揚げたての中身はまだ相当に熱かった。
「水、水！　いや、ビール！」
缶ビールに折り目のついたストローをさしてもらって、ごくり、とやる。この

姿では食事をするのも一騒動だ。
よく九雷はマメに世話できるもんだ、と陽輝は思う。
一月に二、三日のこととはいえ、飲食の世話はもとより風呂までいれてやっているという。
「ペット感覚なんじゃないの？」
沙龍はそう言う。
「まぁ、でも、赤ん坊ってそんなもんか」
陽輝はもうすぐ産まれる自分の子供のことを言った。
西の空が陽輝の髪と同じオレンジ色に染まっている。陽輝は缶ビールを持ったまま、しばらくその夕焼けに見入っているようだったが、
「なぁ、お前が今日、天ちゃんに呼ばれたのは……」
その話を蒸し返した。
「うん。性懲りもなく『将神になってくれ』って話。断ったけどね」
陽輝は「やっぱりな」という顔をして、
「やりたくない奴にやらせるのは俺も反対だが、もう、そういう段階じゃないの

かもな……」
そんなことを言った。
敖丁が荒れている理由もそのことに少し関係があるのだ、と陽輝は知っている。
沙龍は春巻きを口いっぱいに詰め込みながら言った。
「欽チャンが泣くことになっても、私は迷わないよ？」
「私は」の部分がわずかに強調されていた。
つまり、私は迷わないがお前はどうなのだ、という含みがある。
「お前は強いな。ホント、変わってねぇよ……」
そう言ったが、確かに迷っている場合ではない。
敖明の計画が具体的にならないうちに自分も覚悟を決めなければなるまい、と陽輝は思った。

2　ブラックリスト

いつにも増して気難しい顔で執務室に戻ってきた敖丁の午後一の仕事は、今朝、総司令部で嫌味を言ってきたスタッフの名前を『ブラックリスト』に付け加えることだった。敖丁が常に持ち歩いている手帳の、後半部分を占めているリストのことである。

「五雷（ごらい）、とかいったな。あの無礼者」

小者の名前はすぐに忘れてしまうので、こうして書き記しておくのだ。

どうも、特務のスタッフというのは四方軍を格下に見ている気がする。階級で言えば向こうはたかだか尉官。よくて少佐あたりだろう。本来なら大将の自分とは比ぶべくもないのに。

特務には『元帥直属』という誇りがあって、それが奴らを増長させているのだ、と思っているのはなにも敖丁だけではない。

こういった対立はどこにでもある。

帝都防衛を任されている東方軍と、火雲宮の警護を担当している近衛府の仲が悪いのも、ごく単純なライバル意識からきている。

「機会があれば、すぐにでも抹殺してくれる……、フフフ……」

執務室には他にも副官や在勤のオペレーターが居るのだが、彼らは敖丁の物騒な独り言には慣れているので、「あー、またウチの大将の不興を買った馬鹿が居たか……」くらいにしか思わない。

例の手帳に記されたブラックリストも、彼らにとっては驚くようなものではない。手に取って見たことも何度かある。敖丁が無造作にその手帳を机に置いていたりするからだ。

周囲に見られても、敖丁は、

「あ、これ？　お歳暮送った人のリスト」

などと、バレバレな嘘をつく。

副官の朱子（しゅし）が思うに、敖丁はこのブラックリストをわざとオープンにしているようなところもあった。

なぜ、と言われれば答えられない。上官の奇怪な精神構造は朱子には理解でき

ないからだ。
ただ、こんな恐ろしいリストを作っておきながら、敖丁は特になにをするわけでもない。
先ほど、敖丁は「機会があれば抹殺する」と言っていたが、自らその機会を作っているような様子は全くないのだ。
「つまり、こういうブラックリストを作ってるから、お前ら覚悟しとけよ、っていう脅しに過ぎないんですかね？」
朱子が同僚にこっそり聞くことはあっても、答えは出るはずがない。
もし、敖丁の複雑な心情が分かる人物が居たとしたら、それは九雷だけだろう。
「あれは天才じゃない。純粋な大馬鹿さ」
九雷はそう言ったことがある。敖丁が、南方軍大将になる前のことだ。
馬鹿の思考は分かるはずがない、分かる必要もない、というのが九雷の弁なのだが、確かに敖丁は天才的な頭脳を持っていても、世間的には『大馬鹿』かもしれなかった。

自ら言動を複雑怪奇にしているだけであって、敖丁の行動理由は、九雷の言う通り、常に純粋である。
それは、このブラックリストの一番上に居る男の名前が、千年前からずっと変わっていないことからも分かる。

『陽輝』

あのオレンジ色の髪を見たら条件反射のように攻撃する小龍以上に、敖丁の陽輝に対する嫌悪感はひどかった。
陽輝は陽輝で、奏欽と結婚する前後には敖丁から相当嫌がらせを受けたので、恨みは当然人一倍ある。
〝西と南は隣にするな――〟
宮中イベントなどでの席次表作成の際には、そんな裏マニュアルまで用意されていた。
そして、敖丁は自ら――ブラックリストをわざと放置し、派手な喧嘩をしなが

ら――、この仲の悪さを喧伝しているのである。
不可解と言えば不可解で、朱子が頭を捻るのも当然なのだが、この意味するところはなにか、といえば、
「周囲と自分自身を欺くため」
と、一番の理解者は簡単に答えるだろう。
つまり、敖丁のブラックリストには無記名のナンバー・ゼロが居るのである。
その存在を周囲に悟られてはならない。
自分自身をも欺く必要があるのは、そうでもしなければ実の父を討つことができないからである。
ナンバー・ワンの場所に『敖明（ごうめい）』と書き込んで、毎日それを眺めていられるほど敖丁は雑に出来ていない。
九雷が『純粋』と言ったのは、そういう意味である。
「あの龍王家の若様大将は大事な妹を無法者の大将に盗られて恨み骨髄らしい」
それが世間の常識になっていれば、敖丁は安心してナンバー・ゼロの敵を叩ける。

だからと言って、敖丁のシスコンは演技ではないし、陽輝への恨みも嘘ではない。こっちはこっちで深刻な対立がある。

しかし、敖明を葬るという目的の前には、全てが他愛のないものだ、と敖丁自身は思っていた。

南海龍王家の長子は若年のうちに戦死した。

母親である正夫人は、以来、心身ともに病んで床に臥せったまま、か細く生きていたが、第二夫人が二人の子供を儲けたのを見届けて静かに逝った。

敖丁と奏欽は、この第二夫人の子供である。

嫡出子ではないから、と気楽に生きていた敖丁が、いきなり南海龍王家の後継者になってしまったのは、本人にとっては不幸だったかもしれない。

いままで通っていた大学寮を辞めさせられ、士官学校に放り込まれたのも当初はかなり抵抗した。

わざと問題を起こして退学になろうとしたが、父親の圧力からいつも停学処分

だけで済んでしまい、そんな特別扱いに同級の者達からは反感を買った。
しかし、敖丁は陰湿に苛めてくる同級生を更なる陰湿さで苛め返し、決して負けることはなかった。
勝気だったわけではない。敖丁に言わせれば相手が馬鹿過ぎて「勝負にならなかった」だけだ。
大学寮での成績は飛びぬけて良かったのに、士官学校では父親への反発もあり、定期試験などは全て白紙のまま提出した。
そこで、敖丁に見切りをつけた父親は、奏欽に期待をかける。元々、奏欽の方が五行の潜在能力は高い。南海龍王家はこの娘に任せよう、と敖明は考えた。
しかし、
「龍王家は継ぎます。でも、軍人にはなりません」
末子の奏欽ははっきりとそう言った。
妹が『南方軍大将』を頑なに拒否したその理由を、敖丁は知っている。
二人とも、子供の頃から、南海龍王家の暗部といってもいいあの研究施設で、一体なにが行われているのか、薄々気付いていたからだ。影で囁かれる黒い噂で

もその様子は伺い知ることができる。
それは、非人道的な人体実験、と一言で説明はできてしまうが、敖丁はその説明の仕方に納得はしないだろう。
彼の性格と人生をすっかり変えてしまったものだ。どんな形容詞をつけたところで足りない。
（父も祖父も、正気か？　このような外法でなにが護れ、なにが救えるというんだ――）
南方軍大将となり、父の敖明に初めてラボに連れて行かれた時は、そこで目にしたもの全てを否定した。
ラボの創始者たる初代南海龍王は、ただ一つの目標を目指したという。すなわち『完璧な不老不死の生命を作る』という愚行を。
神仙は完全には『不老不死』ではない。ゆっくりだが徐々に歳は取るし、寿命もある。
それを、あらゆる技術――科学は言うに及ばず、五行術も加え――でもって完璧な不老不死にするというのが、ラボの第一目的だった。

そして、最悪なことに、その目的のために行われる全ての行為が許されたのだ。

「これは我々一族が背負った使命なのだ。お前も南海龍王家の血を持つなら、目を背けてはならん」

敖明は、諭すように言った。

若き敖丁は、その若さ故の情熱で反論する。

「太古の時代、南海の龍族が、神々を地上に住めなくしてしまったということが、それほど罪深きことなのですか？　ではお聞きしますが、父上。死なない命など誰が必要とするのです？　いまの天仙地において、誰がそれを真に望むというのですか。そんなものがあったところで、争いの火種にしかならないでしょう!?」

「愚かなことを。命とはそうしたものよ。命を永らえようとすることが本能なのだ。では、その命の期間を永遠と定めようとするこの努力もまた本能に過ぎない」

「本能？　そんなもので、この無意味な殺戮を正当化するおつもりですか!?」

結局、この議論に決着はついていない。
敖丁はこの父親と訣別し、以後、変人ぶりが酷くなるのだが、その裏では南方軍大将としての地位を最大限に使って、ラボの計画を縮小、やがては中止させるべくありとあらゆる手段を試みた。
が、そのほとんどは、敖明に阻止される。
狡猾な敖明は、龍王と大将の地位は退いても、実際の力はなにひとつ子供達に譲っていない。
敖丁がどんなに頑張ろうとも、経験と人脈では父親に敵うはずがないのだ。
寝所の父親を襲えば悪夢は終わるのではないか、と思ったこともあるが、それを実行するだけの行動力も胆力も、当時の敖丁にはなかった。彼にとって一番大切な妹が悲しむ真似はできなかったのだ。
しかし、いつかはきっとこの悪夢を終わらせてやる、と敖丁は思った。
なにごとにも興味のない素振りで、適当に仕事をこなすだけの、気まぐれで偏屈な若様でいいのだ。あの父親が油断するまで、自分はそれでいい――。
そうして、やがては敖丁の望んだ通りとなった。

あの若様大将は怠惰で無気力かと思うと、急に気性が荒くなったり、あれは二重人格かはたまた天才病か――、と周囲の評価が落ち着き始めた頃、それを黙って観察していた男が居た。九雷である。

士官学校で最低の成績を取り続けた敖丁に、なにか思うところがあったのだろう。

敖丁が大将としての頭角を現し始めた頃、

「元帥の座が欲しいなら、簡単だ。四方軍大将全員で離反しろ」

と、焚きつけた。

そして、冗談の中で自分を煽る九雷の狙いを、敖丁もまた理解した。

「仮に、面白半分に陽輝が賛同してくれたとしても、実直な王霊君をそそのかすのと、小心者の敖坤（ごうこん）に冒険させるのに千年くらいかかりそうですから、割に合いませんね」

敖丁は、わざとメンバーを逆にして言ったのだ。

王霊君をそそのかし、脅迫めいた手段で敖坤を説得できたとしても、陽輝を落とすことは絶対に無理だろう。それを分かった上での戯言だ。

「そうか、なら俺ももう少しのんびりしていられるな」
九雷がこのとき言った『もう少し』というのがどれくらいの期間を指すのか。もしかして、『敖丁が決意するまで』という意味だったかもしれない。
近年、北海龍王敖吉（ごうきつ）のクーデターは、敖丁が帝都を留守にしたタイミングで行われた。それは恐らく偶然ではない。一番邪魔になりそうな敖丁を遠ざけた上での決行だった。
クーデターの首謀者は、表向きは敖吉のみとされているが、実際には敖坤も、敖明も加わっていたはずである。
しかし、限りなくグレーな敖明を、九雷は追求しようとしない。
その理由を、敖丁は直接聞いた。
「父も加担しているはずです。なぜ押さえないんです？」
「理由は二つある。一つには、現実的に押さえられるだけの証拠がない。もう一つは、いまの段階ではラボは天界軍の敵じゃないからだ」
「つまり、元帥の敵じゃないってことですね」
「焦るな、敖丁。ラボのことはもう少し放っておけ。いまは時期じゃない」

「……」

敖丁は唇を噛んだが、いつかは自分の悪夢を終わらせることができると信じた。

老兵はいずれ去る。去らせてみせる。

それができなければ、自分はやはりただの馬鹿なのだ。

（さて、と――）

遺書のファイルを更新して、今日の仕事は終了である。

今夜は久しぶりに奏欽の顔を見に行く予定なので、敖丁も浮かれていた。

先日、お腹の子は二人居る、と医者に告げられた奏欽は、大忙しでもう一人分の産着を作っていることだろう。

しかし、慎重に行動しなければならない。

身重の妹には、なにひとつ心配をさせてはならないのだ。

3　沙龍と奏欽

さて、こちらは陽輝が帰ったあとの水雲宮である。

沙龍の日常はなにも変わっていない。

二年ほど前に西方世界と一悶着があったが、以降はずっとのんびりした日々を送っている。

九雷は変わらずほぼ毎日水雲宮で寝泊りしているし、沙龍への過保護ぶりも健在だ。

沙龍はミニ黄龍に変化したときのことを一通り九雷に説明して、

「敖丁、なんかいつもよりギスギスしてたよ」

最後にそう付け加えた。

九雷があの嫌味な南方軍大将のことを実は陽輝と同じくらい信頼している心情というのは沙龍にもなんとなく分かるのだが、だからといって、自分の敖丁評が変わるわけではない。ここには奏欽も居ないので遠慮なく嫌悪感を滲ませて言っ

た。
「そうか……」
九雷は黙り込み、小龍になにやら使いを頼んで、いつものように就寝した。
明けて翌日、恐らく陽輝に聞いて急いで来たであろう奏欽は、だいぶお腹が大きい。
沙龍は、もうあんまり動かない方がいい、と心配して言ったのだが、奏欽が作って持ってきてくれた中華風茶碗蒸しはありがたくいただいた。
しかし、当然ながら奏欽の訪問理由はリボンのほうである。ミニ黄龍になるたびに、こうして新しいリボンを持ってきてくれるのだ。
今日、沙龍が首に巻いてもらったリボンは淡いピンク色で、ふちに白いレースがついている。ひらひらレース付きは勘弁して欲しい、と思うのだが、奏欽の善意に文句を言うわけにもいかない。
「中華風は具が贅沢だよね！　アワビうまうま！」
沙龍ががっつく間も、奏欽は静かに微笑んでいるだけである。
元から口数が多い方ではないが、今日の奏欽はやけに無口だった。

具合が悪いのかと沙龍は心配したが、体調は母子ともに問題ないという。
「今月は随分早いですよね？」
奏欽がまともに口を開いたのは、沙龍がお腹をさすって満足そうに横になった頃だった。
ミニ黄龍への変身のことである。
「そうなんだよね」
「変化したとき、なにか異変ありました？」
「うーん？　フラッとする感覚はいつもと同じだったけど……」
「もしかして……、誰か傍に居ませんでしたか？」
「え？　うん。陽輝と敖丁が」
と、沙龍が言い終わらないうちに、奏欽は「ああ、やっぱり」という顔をして、額に手を当てた。心当たりがありすぎるほど、ある。
「え？　なになに？」
「実は……。ちょっと回りくどい話をしますが」
そう前置きして、奏欽は昨日あったことを話し出した。

昨日の夜、奏欽の自宅に遊びに来た敖丁は、いつもと変わらぬ様子だったのだが、「ちょっと調べたいことがあるから貸して」と言葉巧みに『南海の至宝』を持っていってしまった、という。

勿論、最初は断ったのだ。『南海の至宝』は南海龍王が代々所持しておかなければならないものだし、奏欽も龍王位を継いでからは片時も我が身から離したことはなかった。しかし、結局敖丁の口八丁に丸め込まれてしまった。

なるほど、そういえば、今日、奏欽の胸元にはいつも帯刀している懐剣がない。

「あ、やっぱりあの懐剣がそうなんだね」

沙龍があっさり言うので、奏欽はギョッとした。

「え……、知ってたんですか？」

至宝は門外不出、というのが原則である。簡単に知られるようでは困るのだ。

「いや、前に欽チャンが至宝の話をしたとき、話しながら懐剣に触ってたから、なんとなくそうかなーって思っただけ。ただの直感」

「そうですか……」

迂闊だった。勘のいい人ならすぐ分かるようなことを無意識でやってしまったらしい。今後は十分気を付けなければ。

「まぁ、私の分に関してはいいんです。嘘か本当か知りませんが、二十四時間以内に返すと言っていたので、今日の夕方まで様子を見ますけど……。ただ、昨日、兄に会ったとき、別の至宝の気配もあったんですよね」

「別のって……？」

「しかも複数。あれは『西海の至宝』と『北海の至宝』じゃないかと思うんです」

「え!?　どういうこと？」

「分かりません……。ただ、私の推測が正しければ、沙龍さんと会ったとき、兄は二つの至宝を持っていたはずなんです。それで、沙龍さんが反応しちゃったんじゃないかって……」

「そういうもんなの？　だって、私、いままで欽チャンと普通に会ってるし、リンリンさんに『東海の至宝』を見せてもらったこともあるけど、別になにもなかったよ？」

「一つだけなら問題ないんだと思います。でも至宝が二つ以上揃うと、引き合うんですよ。元は魂魄（こんぱく）ですから」
「ああ、始祖の魂魄の欠片、だっけ？」
「私も敖閏様と会うとそういう力を感じるんです。あの方も普段持ち歩いてますから」
「ほー……」
沙龍はミニ黄龍の姿なので、あまり事態を深刻に考えていない。
正直言って『四海の至宝』の話がどれほど重要なのかもわからない。
以前、奏欽から四つ集めるとなにやら大変なことが起こる、というニュアンスのことは聞いたが、自分には関係ないと思っているのだ。
「敖丁はなにをしたいんだろ？」
このまま昼寝に突入したい気分をなんとか追い払い、話題を合わせるように言った。本当は敖丁のことはどうでもいいのだが、奏欽にとってはやはり大事な兄なのだろう。
「まぁ、とどのつまりは……」

奏欽が嘆息しながら言った。
「親子喧嘩なんですよ」
奏欽は南海龍王家のドロドロとした内幕を説明してくれたが、特殊な育ちでは沙龍も負けていない。一通り聞いたあと「あ～、どこにでもありそうな話だね」という感想で終わった。
とても「一般家庭に普通にある話」ではないのだが。
「欽チャンは実際のところ、どうしたいの？」
沙龍はストレートに聞いてみた。
「お兄さんとお父さんが喧嘩するとしたら、止めるの？　どっちかを応援するの？」
奏欽はたいして悩まずに言った。
「いえ、無視しますね」
それはもう、何百年も前から決めている、という態度だった。

4　ファーストコンタクト

ミニ黄龍への変身はだいたい一月に二、三日で終わる。今回も、奏欽が訪ねてきた翌日にはもう戻っていた。

起きたら元の百四十五センチの身体がある。沙龍は特に不審に思うこともなく、ブランチのために階下に降りていった。

食事は持ってきてもらうこともあるし、最上階の部屋には台所もあるので、たまにはそこで簡単なものを作ることもあるのだが――主に九雷が――、基本的には一階の食堂で食べることにしている。

厨房と隣接している食堂は無駄に広く、無駄に豪華だった。元は玉帝の離宮であることを思えば、この贅の尽くしようも納得できるだろう。

濃い青緑色をした四隅の柱は、水雲宮の至るところで見られるが、食堂のそれは特に立派で、ツヤツヤに磨かれている。天井には五色の色鮮やかな絵が描かれていた。

普通の人間がすぐに馴染めるような場所ではないのだが、沙龍は元々、上海での贅沢な暮らしが長く、特にそれらを好みはしないが慣れてはいる。
食堂を通り過ぎ、隣の厨房を覗いてみた。
いくら一城の主とはいえ、座れば食事が出てくるというわけでもないので、料理長の建民に朝の挨拶をするのだ。
「おはよー、主厨（※中国語でシェフの意）とその弟子達」
「あ、おはようございます、緑麗様。五分でできますので少々お待ちを」
建民は主人の寝起きの時間を大体把握しており、常に、この時間に出来上がればいい、という計算のもとに下準備をしている。
だから、彼が五分と言えばほぼ正確に五分で料理が出てくる。
コンロに積みあがった蒸籠（せいろ）には、既に包子（パオズ）やちまきが入っていることだろう。
あとは蒸し上げるだけだ。
建民の横には、いま、沙龍が言った「弟子達」が二人居る。本田健一と、飛龍である。健一は正真正銘の弟子であるが、飛龍は「にわか弟子」に過ぎない。
居候の飛龍はたまに居なくなったりするが、水雲宮に滞在している間は、最

近、こうして厨房に居ることが多い。といっても、食べ盛りの少年が摘み食いをしているわけではなく、本当に、建民から料理を習っているのだ。
一体どういう風の吹き回しだ、と沙龍はエプロン姿の飛龍をニヤニヤしながら眺めたものだが、事情を問い詰めるようなことはなかった。なんでも好きにやればいいというのが水雲宮の主のモットーなのである。
常に重火器を持ち歩き、毎日喧嘩と昼寝と食事しかしていないような飛龍が料理をするなど、想像を絶するのだが、卵焼きを作っている姿はそれなりに様になっていた。
「おはようございます」
厨房北側の小部屋から紗衣（さい）が出てきた。従業員達の事務室にもなっている部屋だが、紗衣はここで仕事をしていることが多い。
主人の気配を察知して挨拶だけしにきたのだろう。紗衣はすぐに小部屋に戻っていった。
水雲宮の庶務を全て一人でやっているので、紗衣の仕事には終わりがない。今日は使っていない客室に清掃業者を入れる日なので、いつもより忙しいようだっ

た。
紗衣はほとんど無休で働いている。たまには休むように言っても、帰る実家があるわけでなし、仕事をしている方が好きだと言う。
「仕事ばっかしてると、架空の旦那さんが怒るよ」
沙龍はそう言って冗談めかす。
落ち着いた雰囲気のある紗衣は男性からよくもてる。単に仕事上の出会いが多いからだと本人は謙遜して言っているが、なかには妻帯者が、割り切った関係を求めてくる、という喜ばしくないケースもあり、それらの誘いが色々面倒なので既婚ということにしているのだ。それは水雲宮のスタッフのみの了解事項である。
このスタッフの数は水雲宮の規模を考えれば少なすぎるといっていい。常駐スタッフはいまここに居る人数プラスもう一人しか居ない。その一人とは最年少の悠花（ゆうか）である。主人の身の回りの世話をしている少女で、自称は「緑麗様の着付け係」だが、実際にその仕事はあまり行われていない。沙龍が華美な衣装を嫌っているからだ。

この時間帯は、悠花は洗濯場に居るはずである。
いつもと変わらぬ水雲宮の風景だ。
沙龍は、晴耕雨読、もとい、晴釣雨寝、とでもいう毎日だが、そもそも帝都に雨はほとんど降らない。
よっぽどの旱魃でもない限り、雨も必要ないし、「よっぽどの旱魃」があったとしても、水行を担う北の四方将神が居ればなんとでもなるのが東方天界である。
（あれ……？）
食堂の席についた沙龍は、いつもとは少し違うブランチメニューにすぐ気付いた。
大抵は中華風粥に始まって、それだけでは足らない沙龍のために包子やちまきが用意されるのだが、今日は梅干粥と卵焼きという、和風メニューから始まった。
健一が水雲宮の厨房見習いになってからは、日本食もたまに出てくるのだが、これは明らかに建民が作ったものである。沙龍にはその違いが分かる。

（なるほど、そういうことか……）

少し考えて一人で得心した沙龍は、特になにも言わず、最後にコーヒーを淹れてくれた建民に「ご馳走様、ありがとう」と声を掛けた。

その言い方で、建民にも分かっただろう。

腹ごなしに外に出た。厨房の勝手口を抜けると、雑然とした空間がある。

半分庇（ひさし）に覆われたその場所は倉庫のようになっていて、冷蔵しなくていい食材やちょっとした大工道具などが置かれている。

沙龍は、野菜籠の横、日焼けして色褪せた木の箱から自分の釣り道具一式を取り出すと、見えている桟橋の方に向かった。

幅二メートルにも満たない小さな桟橋である。そこには釣り用の小舟も係留されていた。

沙龍はこの舟を使ったことはない。舟と名の付くものは、極力避けてきた沙龍である。

以前、木佐と一緒に、岡山の祖父の家に滞在したときは死ぬ思いをした。水泳の得意な木佐は、親切にもカナヅチの沙龍に泳ぎを教えてくれようとしたのだ

が、それがとんでもなくスパルタ方式だったのは言うまでもない。
「心配するな。人間の身体は浮くようにできている。溺死寸前になったら引き上げてやるさ」
木佐は鬼の首を取ったような顔で言っていた。
スポーツ・武芸の類は万能のはずの沙龍にも、できないことがあったのか、とほくそ笑んでいたのだ。
「私が育った村には海もプールもなかったんだよ！」
沙龍はそう言ったが、実は、上海でも水泳を習おうとしたことはある。
しかし、董天がどんなに優秀なコーチを連れて来ようと、結局、誰も沙龍に泳ぎを教えることはできなかった。
水が怖いわけではない。
ただ、息継ぎの方法を教えてもらっても、なぜかうまくできないのだ。水中で息をはく、水上で息を吸う、という簡単なことができない。何度やってもできない。それ故、泳ぎはもう諦めたのだ。
周囲は、沙龍が泳げない理由についてあまり深く考えなかった。それは本人も

同じである。
しかし、この世界にきて、あの白昼夢をよく見るようになってからは、もしかして、と思うことがある。
常につきまとう水のイメージ。
あれは、水の中で、誰かの声を聞いているという、緑麗の記憶ではないか、と思う。
その水中の居心地は決してよいものではない。が、常に話しかけてくる誰かの優しい声によって、かろうじて許容できるものになっている。
沙龍はその声の主を知っている気がするのだが、思いあたる人が居なかった。
それは考えてみれば当然で、水の振動の中で聞いた声だからなのだろう。
緑麗は、本人の意思か誰かの決定かは分からないが、なにかと取引をしたのではないか、と沙龍は思った。つまり、この水の中から出るための代償を差し出したのではないか。それが「泳ぐ力」だとしたら、緑麗は泳げなかったに違いない。そして、その負の遺産を沙龍も受け継いでしまったのだろう。
「キューウ」

空中散歩していたらしい小龍が、桟橋の脇に座った沙龍の頭上に降りてきた。
「朝からどこ行ってたの？　もうご飯もらった？」
「ウキュ！」
人語を半分理解している小龍とは、大体の意思疎通はできる。
そういえば、小龍は昨夜、九雷になにかを頼まれていたのだった。一晩かけて、どこかに行って帰って来たのだろうか。
「ヘンなこと聞くけどさ、緑麗って泳げたの？」
「ムゥ？」
「水泳だよ、水泳。君も風呂場で泳いでるでしょ」
犬掻きのような泳ぎ方を真似すると、小龍は合点のいった顔で、湖に飛び込んだ。
そして、はしゃぐように泳ぎ始める。
「あー、そうじゃなくて……。緑麗は泳げたの？　って聞いてるんだってば」
「ウキュウキュ」
水面に顔を出し、主人を見上げる小龍は、頷くように首を振る。

「え？　ホントに？　泳げたの？」
「ウキュウキュ」
小龍の反応は変わらない。
「ウーン……？」
おかしいな、と沙龍は思った。
自分がカナヅチなのは、緑麗もかつてそうだったからだと思ったのだが、どうやら違うらしい。
「まぁ、小龍が誤解してるのかもしれないけど……」
大きめの石を拾ってきて、釣り竿を固定する土台を作った。もとから真面目に釣りをするつもりはない。そこに竿を差し込んで、自分は昼寝するつもりでいる。
運がよければ、夕飯のおかず一品の素材くらいは釣れるだろう。
日差しが少し傾いた。

小龍は水遊びにとっくに飽きて、沙龍のお腹の上で眠っている。
そろそろ健一がお茶と軽食を持ってきてくれるだろうか、と沙龍が思ったとき、上空にバサバサという聞きなれない音がした。
九玄（きゅうげん）の霊獣、青鸞（せいらん）の羽音に似ているが、恐らく違うだろう。
「こんにちは」
湖畔で昼寝中のところに、いきなり現れたのは碧霞元君（へきかげんくん）である。
沙龍は、この少女のことは知らない。
顔の上に乗せている麦わら帽子の網目の隙間から覗いてみたが、よく見えなかった。
「……引いてるよ？」
沙龍の足元に固定された釣竿の先では、巽凛（しゅんりん）お手製の丸い浮きが水面に輪を作っていた。
この引き方からするとかなり小さな魚のようだ。
それが見えたわけではないのだが、
「小者は放っておく主義なんだ」

沙龍は麦わら帽子を動かさずに言った。
「だったら、リリースしてあげなきゃ」
「いま動きたくないんだ。気になるなら勝手にやっちゃって」
「……」
碧霞元君は釣竿を引き上げ、十五センチくらいのフナを湖に戻してやった。
その手つきは慣れている。
「無駄に痛い思いをさせるのはどうかと思うけど？」
その言い方は責めるような口調ではなかった。
「リンリンさん特製の釣り針だから痛くないと思うよ」
「そうなの？」
「うん」
「……」
「……」
しばし沈黙が流れる。
碧霞元君の斜め後ろには大きな鸞（らん）が居る。純白の羽毛にエメラルドグリーンの

尾羽を持った、一見美しい霊獣なのだが、よく見てみると滑稽な目つきのせいで全てが台無しになっていた。この霊獣、名前を『ナンカイ・ホークス君参号』という。珍妙な名前の由来はそのうち語られるが、本人、もとい、本鳥は名前には大してこだわりを持っていなかった。

その霊獣のホークス君は、主人である碧霞元君と、寝たままの沙龍を交互に見て、口を挟もうかどうしようか迷った。険悪でも和やかでもない、微妙な空気である。

「あのね、聞きたいことがあるんだけど」

釣竿を戻した碧霞元君は湖を背にして、沙龍の足元に立った。

「ん……？」

「生まれ変わってよかった？」

「なんのこと？」

沙龍はとぼけているわけではない。普通に反応したつもりである。

ゆっくりと半身を起こし、正面の少女を眩しそうに眺めてみた。丁度、太陽が少女の背後にあって、目を細めるくらいでは足りない。太陽光を遮るために手を

かざす。
なるほど、と沙龍はわけもなく思った。
地上のあらゆるものに祝福された存在――、に見える。
「誰……？」
改めて聞いてみた。突然の訪問者を歓迎してはいない、というのが分かる聞き方だ。
「私は霞藍（シアラン）。はじめましてではないけど、はじめまして」
「ああ……、緑麗の知り合いか」
と、沙龍はうんざりした空気を隠すこともなく言った。
たいていこの世界で出会う「初めまして」の人は、実は「初めまして」ではない。過去に緑麗となんらかの面識がある者達だ。
「念のために三回くらい聞こうと思う。生まれ変わってよかったと思う？」
「……」
この少女は頭がおかしいのではないか、と沙龍は思った。
路地裏のジャンキーも、アル中のマダム達も、ハイになっているときは、皆同

じだ。こちらの都合や感情など無視して喋りかけてくる。
関わり合いになるまい、と沙龍は再び仰向けに寝そべった。麦わら帽子で表情をブロックすることも忘れない。
「私はあなたがなにを言っているのかよく分からないし、分かろうとする気もないので、さようなら。今度から来るときは正面玄関から来て下さい。多分、その調子じゃ、我が宮殿の庶務担当に追い返されるだろうけど」
帽子の下で言い放つ。
碧霞元君は困った顔をしたまましばらく動かなかったが、
「うん、分かった。じゃ、また今度でいいや」
さっぱりと言って、ホークス君に乗り込む。
「お嬢、いいんですかい？」などと囁くホークス君の声が聞こえているが、沙龍はもう動くつもりはなかった。
大きな羽音がして、やがて奇妙なコンビの気配が完全に消えた頃、
「……フゥ」
麦わら帽子の下で短い溜息をついた。

「大物だな、お前……」
沙龍はお腹の上の小龍に言ったのだ。
この小さな龍は碧霞元君の来訪中もずっと目を覚まさなかった。いまだにグデンと長い体を横たえて、死んだように眠っている。昨夜の仕事のせいで疲れているのだろう。
（あれが、四行マイスターの碧霞元君、か……）
沙龍がそれを知っているのは、先の西方世界との一悶着があった後、公務員に調べさせたからである。
東方天界に来て以来、沙龍は様々な災難に見舞われたが、それらがほんの数人の仕業であるということは随分前から気付いていた。その首謀者が東王夫という人物であることも。
面識すらないその老人に対して、沙龍は特になんとも思ってはいなかった。
ただ、自分に刃を向ける以上は『敵』である。一連の実害を受けたのだから、いつか自分がこの手で始末してやる、と思っていたのである。
しかし――。

その東王夫を、なんの因果か、沙龍にとってはまるで無関係と思われる人物が失脚させてしまったというのだ。自力本願な沙龍にしてみれば「横槍を入れられた」と感じるのも当然だろう。

そこで、手足にしている公務員に、碧霞元君という人物のことを調べてこい、と言ったのだ。

その調書によれば、碧霞元君は全く無関係ではないと分かった。彼女もまた、東王夫による暗殺未遂という実害を受けた一人である。

天空山の管理者として碧霞元君は、

『天網恢恢疎にして漏らさず』

まさにこれを実践したということだろう。

しかし、不完全燃焼の沙龍は、

（あいつか……、余計なことをしてくれたのは）

そんな思いがあるのだった。

5　水雲宮の晩餐

昨夜、小龍がお使いに向かった先は玄都（げんと）の八景宮（はっけいきゅう）である。そこには太上老君が住んでいる。

いつもならのんびり道草を食ったりしながら行くのだが、昨夜は九雷が怖い顔で「急用」と言っていたので、なんとか一晩で行って帰ってきたのだ。

太上老君から貰った返事も、朝一で司令部の九雷に渡してきた。

そして、水雲宮に戻ってきた頃には腹ぺこで、健一の姿を探したものの見つからず、仕方なく厨房に居た飛龍にそれとなく催促をしてみると、出てきたのは、犬の餌のような食事であった。

恨めしそうな顔をして見上げる小龍に、エプロン姿の飛龍は毅然と言った。

「お前も龍族のはしくれなら、出されたものは文句を言わずに食え」

それは、飛龍自身が母親に言われてきた言葉でもある。

「ウググ……」

仕方なく食べてみると、見た目ほど不味くはなかった。
健一の作るやや薄味な料理より、むしろ、こちらの方が好みに近い。
一通り平らげてから、上目遣いにぺこりと頭を下げると、飛龍も満足そうに頷いていた。
いまは沙龍のお腹の上で幸せなひとときを過ごしているが、いつまた九雷にお使いを頼まれるか分からない。最近は遠出仕事が多いので、この小さな体では疲労もたまるというものだ。
「クァ～……」
欠伸のような小龍の息遣いがしたのと同時に、沙龍もまどろんでいた体を起こして、釣り糸の様子を確認した。が、浮きは沈黙を守っている。
今日は不調らしい。碧霞元君が来たせいでケチがついたとでも言うのだろうか。
湖面はどこまでも静かである。
空が少し曇ってきたが雨の心配はないはずだ。帝都で雨に降られた記憶はない。

しばらくして蒸篭を抱えた健一がやって来ると、軽く雑談をしながら過ごす。
健一が、緑麗様は毎日休日みたいですね、と言ってから、慌てて付け足した。
「あ、嫌味で言ったんじゃないですよ！　オレなんか、仕事がないと不安な庶民だから」
「小人閑居して不善をなす、というけど、私は小人ではないから大丈夫」
沙龍は大真面目に言っているのだ。謙虚という文字はこの百四十五センチの体のどこを探してもない。
「アハハ、そうですね」
「……」
健一に悪意がないのは分かるが、もしかしたら、本音では、遊び人のような主人に仕えるのは嫌なんだろうか、とも思った。
緑麗の遺産が充分すぎるほどあるとはいえ、沙龍自身は無位無官である。
「夫人」という肩書きすらない。一人で生きていく分にはそれでも構わないが、水雲宮の従業員たちはどうなのだろう、と改めて考えざるを得ない。
木佐にも「たまには仕事したら」と言われている身である。

（しかし、元帥は反対しそうだな……）
そう思った。
特に、軍事職に就くことは猛反対するに決まっている。
沙龍とて、軍人になる気はサラサラないのだが、自分にできることはなにかといえば、実は軍事職くらいしかないのではないか、とも思う。
（いやいや……、だから、将神はご免だっつーの……）
先日、秦帝に呼び出されたことを思い出してげんなりした。その件については食傷気味なのである。
最近は一月に一回は火雲宮に呼びつけられる。毎回「お茶会」だの「音楽会」だのという名目なのだが、秦帝が沙龍を公務に就けようとしているのは明らかだった。
「将神が嫌なら、名ばかりの閑職でもいい」
と、こっそり言われたこともある。
側近の侍る場では滅多に本音を漏らさぬ秦帝だが、このときばかりはいつもの柔和な笑みを消して、真剣な顔をしていた。

ただならぬ様子を察した沙龍だったが、いつものように「考えておきます」とだけ答えておいた。
火雲宮サイドにはなにか事情があるのだ。
それは、九雷や陽輝でも半分くらいしか分かっていない。沙龍はさらにその半分くらいだろうか。だから、いまの段階ではなんともしようがない。
公務に就いていなければ命の保障はできない、とでもいうのなら、沙龍は、
「国家権力の庇護を受ける謂われはない」
と言うだろう。
それはこの世に生まれたときからずっと変わっていない、甲斐馨の、甲斐馨たる所以でもある。
「私も料理習おうかなー……」
と、習う気もないのに言ってみたのは、いま食べている包子がすばらしく美味しかったからである。
健一はギョッとした。ジャスミン茶を淹れていた手が一瞬止まる。
「ど、どーしたんです!?　まさか、オレがいま言ったことを気にして、なんてこ

とはないですよね!?」
「いや、気にしてはいないけど……。これ、料理長お手製？」
沙龍がわざわざ聞いたのは、最近、こういった軽食は健一が担当しているからである。
健一の作る点心も不味くはないし、ここ数年の上達ぶりには目覚しいものがあるのだが、それでもやはり建民の足元には及ばない。
「あ、やっぱり分かりますよね……。今日は、料理長が自分で作るって言いだしたので」
「ふむ……」
「やっぱオレに任せておくのが心許なかったんですかねー」
「いや、違うと思う」
「……？」
健一はなぜ沙龍がそう言い切ったのか分からないという顔をしているが、沙龍も今朝のブランチのときに気付いたのだ。今日がどういう日だったのか、ということに。

だから、今日に限って建民が「緑麗様の食事は全部自分が作る」と言い出した理由も分かる。

五年前と全く同じメニュー、同じ味のブランチを口にして、沙龍は途端に記憶がよみがえった。

それは、水雲宮で初めて取った朝食と同じだったのである。

当時の沙龍は半病人だった。ここに連れて来られた経緯からしても、食欲などあろうはずがない。

なにも要らない、と言ったのに、あのとき、紗衣は黙って梅干粥を出してくれた。

それを作ってくれた料理人とはだいぶ後になって対面したが、あの少食だった半病人が、こんな大食漢になるとはよもや思ってもいなかった、などと笑いながら言われた。

（結構、ロマンチストなんだよなぁ……）

本人でさえ忘れていた日のことを、建民が覚えていたというのは、ちょっとした驚きだった。

五年を一つの節目とするのは、建民なりのけじめかもしれない。
「しかし、緑麗様が料理ってのも……、失礼かもしれませんが、飛龍くん以上にすごいものが……」
「本当に失礼だな。私だってカレーくらいは作れた……はず」
高校生の頃、木佐の指導の下、あの国民食を作ったような気がする。
しかし、いま、沙龍が思い出したのは半壊した台所と、木佐のこの世のものとも思えぬ形相だけで、出来上がったカレーの画像が脳内のどこにもない。
果たして、あの誰にでもできるはずのカレーは完成したのだったか？　もうだいぶ前のことなのでよく覚えていない。
「飛龍は頑張ってるの？　もうオムライスくらいは作れるようになったのかな」
「うーん……」
健一から苦笑しか出ないところを見ると、沙龍と似たりよったりの腕前のようだ。
「飛龍くんは普通の料理より、お菓子を作れるようになりたいみたいです」
「ほほーう……？　誰かに食べさせたいってか？」

やはりそういう色めいた話があるのか、と沙龍は思ったのだが、健一は意外なことを言った。
「お母さん、じゃないですかね？」
「え？」
「飛龍くんのお母さんって、確か、晶都（しょうと）に住んでるんですよね？　水雲宮で作ったものを晶都まで持っていくのは時間がかかる、みたいなこと言ってたし……」
「ふ、ふむ……」
母親とは盲点だった。
父親への敵愾心はよく見聞きするが、母親のことは飛龍の口から一回も聞いたことがない。
そういえば、飛龍はたまに居なくなるが、もしかして母親に会いに行っているのだろうか。
保護者の九玄に今度それとなく聞いてみよう、と沙龍は思った。

その夜、沙龍は並べられた料理を見て、やはり意味深に微笑んだが、九雷は気付かなかった。もしくは、気付いていても、知らぬ振りを通しただけだろう。

五年前、沙龍を水雲宮に拉致したのは九雷本人である。その日のことを思い出したところで、笑い話にはできない性格である。

それに、九雷にとっては、過去の記念日を祝うよりも、これから起こりうることの方が重要なのだ。

今朝、小龍が持ち帰った太上老君の返答には、

『この天地の命運は、天地が決めればよい』

とあった。

天界を揺るがしかねない、あの二つの親子喧嘩をどうお考えか、という九雷の問いに対する返答である。

なぜ九雷が太上老君とのホットラインを持っているのかと言えば、九雷の家庭教師だった庖犧（ほうぎ）と太上老君に親交があったからで、私的な縁故に過ぎない。

さらに、太上老君は隠居の身であり、政治的な決定はなにひとつできないにも関わらず、九雷がこの件についての意見を求めたのは、やはり最高神の一人が欠

けるかもしれないという事態を重く見たからである。
（天地とは具体的になにを指す……？）
太上老君の言葉の真意を、九雷は朝からずっと考えている。
東方天界は『天地開闢（かいびゃく）』という盤古（ばんこ）の偉業により始まり、天には神々が、地には人々が生きることとなった。故に、普通に考えれば、天は神々のもの、地は人々のもの、といえる。
そして、四角四面に考えれば、それぞれの命運はそこに住む人々の多数決で決めればいい、ということになるのだろう。
しかし、太上老君は「多数決で決めよ」とは言っていない。
短い返答には、まだ続きがある。
『全ての歴史を知る者が――』
と。
それが誰のことなのか分からないので、朝からずっと考えているのだ。
太上老君に聞き返すような間抜けな真似はできない。
「……」

自分の思考の中に埋没している九雷に、沙龍は軽く溜息をついた。
九雷もそこで我に返る。
「食事のときくらいは仕事のことは忘れようよ……。二十四時間構ってくれとは言わないからさ」
そう言われて、九雷はようやく微笑を見せる。
「言ってもいいんだぞ？」
「それはやだ。だって私がそう言ったら、元帥は本当に仕事やめちゃうでしょ」
「仕事をしない男は嫌いか？」
「……」
沙龍が一瞬妙な顔をしたのは、昼間の健一との会話を思い出したからだ。
仕事もせずに遊んで暮らしている主人は嫌なんじゃないか――、というのは沙龍の勝手な憶測だが、あながち間違ってはいないはずだ。
「うーん……、人界ではよっぽどの資産家じゃないと遊び人は生きていけないからねー。好き嫌い以前の話なんだけど……」
「資産があればいいのか」

と、九雷が真面目に聞くのがおかしくてしょうがない。
「本当は、ワーカーホリックでも遊び人でも、どっちでもいいよ、私は。元帥が元帥である限り」
「……」
今度は、九雷が思いっきり目を見開いて変な顔をした。子供が不思議なものを見つめるような表情である。
五年間一緒に過ごしてきて、こんな顔を見たことがあっただろうか。沙龍こそ驚いた。
「え……？　え……？　な、なんか変なこと言った？」
「いや……」
と、それっきり黙ってしまった九雷だったが、その沈黙はさっきとはまるで種類が違うのだということは分かった。
五年前の今日、食卓に九雷は居なかったが、九雷の意を含んだ水雲宮の従業員たちは、沙龍の口に合いそうなものを作って色々と並べてくれた。
それと同じメニューがいま沙龍の目の前にある。

梅干粥はブランチと同じだが、他にも上品なサイズの水餃子や、フカヒレと卵とじのスープなど、食べやすくて栄養価のありそうなものが揃っている。
彼らに感謝しつつ、今日は全て食べ切ろうと思った。
沈黙に飽きた頃、二人は同時に口を開いた。
「そういえば――」
言葉を発したのは沙龍だけだったが、九雷もなにか言おうとしていたのを察して、沙龍はどうぞ、と手のひらを上に向けた。
「いや、お前の話を先に聞く。多分、根元は同じだ」
「そうなの？　私の話は、欽チャンがあれから連絡ないんだけど、どうしたのかなーってことだよ」
「奏欽殿はいま晶都に居るはずだ」
「晶都？　なんで？」
「宇佐殿を訪ねに、ということだが……」
「ウサ？　誰？」
「敖閏殿のご正室だ」

「西海龍王の奥さん……？　あ、飛龍のお母さんか！」
沙龍はまだ会ったことはない。
やんごとなき龍王妃のはずだが、あの多情な敖閏を夫にしているというだけでも尊敬に値する。
さらに、噂では『龍族ミス・チャンプ』という輝かしいタイトルを持ち、幼い飛龍に武芸を仕込んだ猛者ともいわれている。恐らく並大抵の人物ではないだろう。
「つまり？　至宝の件でなんか相談にでも行ったの？」
身重の体で、半日かかる旅程を急遽行ったということはよっぽどのことだろうと沙龍は思ったが、九雷の言によれば奏欽の晶都行きは予め決まっていたらしい。
九雷はそれを敖丁から聞いたのだ。
「姉同然の宇佐殿のところで出産を、と考えているんだろう」
奏欽は実家と縁を切っている。実母ももう居ない。
となれば、同じ龍族の幼馴染みを頼って初産を迎えようというのは不思議なこ

とではない。
「そうなんだ。至宝はどうなったんだろう。敖丁から返してもらったのかな」
「……」
九雷は難しい顔をしている。
また仕事の沈黙になってしまったか、と沙龍は軽く後悔した。
しかし、九雷はしばらく黙々と老酒を飲んでいたものの、急に堰を切ったように話し出した。
この饒舌な九雷に対しては、沙龍にもある種の緊張感が必要だ。
「俺が話そうとしたのはその件だ。沙龍。いま『四海の至宝』を集めたがっている者が三人居る。それが誰かは分かるか？」
「うん。秦ちゃん陛下と、敖明と、敖丁でしょ」
「では、その三人のうち一番厄介なのは誰だと思っている？」
「敖明に決まってる。陛下と敖丁はそれを阻止するために動いてるだけでしょ」
「間違ってはいないが、陛下と敖丁の阻止の理由はそれぞれ違うだろう」
「……？」

「陛下は善良な統治者としての判断と、多少の下心のために、お前を敖明から救済しようとしているだけだ。将神位に就けようとしているのは龍王家に対抗するためのバックボーンとして必要だからだ」

ただの一般人を、火雲宮が特別に保護するには大義名分が必要である。

しかし、官職にある者（それが要職であればあるだけ）なら問題はない。

そういうロジックである。

龍王には第一位の官位が授けられている。先代龍王である敖明も、その官位は返上していない。刑吏府も迂闊に手出しのできない領域である。

つまり、沙龍が一般人のままであれば、先代龍王がなにをしようと、世間的には不問にされてしまう、ということなのだ。

「それはなんとなく分かるけど。『下心』ってのはちょっと言いすぎな気も……」

「だから『多少』とつけただろう」

「……」

秦帝の淡い想いについて、九雷は当然快く思っていないはずだが、実際には優

越感を感じているに違いない。
しかし、沙龍はというと、あれは少年特有の一過性だろうと思っている。
「じゃあ、問題なのは敖丁なの？」
「そうかもしれん」
「……？　でも元帥は敖丁のこと信頼してるんでしょ」
「そう見えるか？」
「うん」
九雷は力強く頷いた沙龍に苦笑するしかなかった。
四方軍の大将達と強固な信頼関係を築くにはそれなりに骨を折った。
諜報部上がりの自分が元帥位に抜擢されたときは周囲の反感も大きかったので、九雷はまず大将達を完全に味方につけることを考えた。
能力を示せばついてきてくれるというものではないし、コミュニケーションに長けていればいいという世界でもない。
旧友である陽輝ですら――いや、旧友であるからこそなのか――、最初は九雷が上に立つことに反発を見せた。

それを、言葉は悪いが策を弄し、ときにじっくり時間をかけ、失敗もしながら徐々に信頼を勝ち得てきたのである。

特に、敖丁には一番手がかかった。そのぶん愛着のようなものはある。

「あいつの目的は『黄龍の保護』でも『保持者の保護』でもない。もっと単純に敖明一人を打ちのめしたいだけだ」

「でも、だとしても結果は同じだよね？　敖丁は至宝を集めてなにかをしようってわけじゃないんでしょ？」

「……だといいんだが」

九雷の杞憂は、まだ杞憂の域を出ていない。

しかし、敖丁が素直に『南海の至宝』を奏欽に返却していないとしたら、彼は既に三つの至宝を持っているはずである。

東極山に安置されているはずの『東海の至宝』を、敖丁が無理矢理奪取するようなことになったら、九雷もこのまま静観しているわけにはいくまい。

「『四海の至宝』は四つ集めれば即なにかが起こるというわけじゃない。元の魂魄に戻すにはおそらくラボの連中しか知らない秘術があるはずなんだが……」

「なんかスッキリしないな。だいたい西海龍王はなんであっさり敖丁に自分の至宝を渡したんだろう？」
「それは、俺も引っ掛かっている」
「直接聞いちゃおうか？」
「……なんだって？」
「人を介すると、真実は見えにくくなるもんだよ。ちょっと本人に聞いてくる」
と、食卓を見渡して、沙龍は立ち上がった。
全ての皿は空になっているので建民が悲しむことはないだろう。
「ちょっと待て、沙龍！」
九雷が慌てて追いかけたのは言うまでもない。

6　うさちゃんの主張

紫紺の夜空を駆る黒焔虎（こくえんこ）は暗い色の中に溶け込んでいて、地上からその姿を認識するのは難しい。

しかし、その大きな背に乗る沙龍には黒焔虎の身体のラインがはっきり見えていた。

日の出を迎える山の稜線のように、そのラインが微かに光っているのは、半月から放たれる月光を反射しているせいである。

「別に着いて来なくてもよかったのに」

沙龍は背後の九雷に言った。

その過保護ぶりを非難したわけではなく、単にサラリーマンは朝が早いから、という意味である。

「黒焔ならそんなに時間も掛らないし」

「俺は半分呆れているんだぞ」

九雷こそ、多少非難がましく言った。
が、沙龍の心遣いも分かってはいる。
ただ、言わずにはいられないのだ。
「非常識な時間に、思いつきで行動するなって言うんでしょ？」
それは昔から木佐にも口やかましく言われていることだ。もっと考えてから行動しろ、と。
しかし、沙龍の場合じっくり考えたところで最初の直感通りに動くことは変わらないのだ。
「分かっているなら日を改めてでも――」
「それじゃ遅いよ」
「なぜ断言できる？」
「うーん……」
うまく説明はできない。
ただこの直感は正しいという、沙龍には沙龍の行動原理や経験則というものがあるのだ。

「……呆れてはいるんだがな」
「ん？」
「あとの半分は感心してもいる」
九雷は密着していた沙龍の身体を不必要に抱き寄せて耳打ちした。
その囁きは牀（しょう）で交わすものと同じである。
緑麗はこういうとき面白いくらいに赤面して狼狽するので九雷はわざとやったものだ。
だが、沙龍の反応は百八十度違う。「ふふん」と勝ち誇るように笑って、さらに背中を押し付けてくる。
こういった両者の違いは九雷にしか分からないだろう。
「褒めるのは結果が出てからでもいいよ？」
自信満々に笑ってみせる。
西海龍王がどういうつもりなのかは分からない。が、今回の件で要となるのは、敖丁ではなく敖閏なのだ、と沙龍はなぜか確信している。
だから、敖閏に直談判するのは沙龍としては一番「スッキリ」するのである。

「しかし、敖閏殿の居場所を突き止めた俺にも賛辞があっていいと思うがな」
「はい、大変感謝してますー。すごいですー。さすが元帥閣下ですー」
「……」
敖閏は各地に愛人が居るのでなかなか所在は掴めない。
任地の晶都に居るのか、それとも本拠地である琥珀宮（こはくきゅう）に居るのかも公表していないので、思い立ってすぐ会えるような人物ではないのだ。
それを九雷が自分の情報網を総動員して突き止めたのはひとえに沙龍のためであるが、男としてのプライドもあった。要するにいい格好をしてみせたかっただけである。
なのにそんな棒読みで感謝されては面白くない。
「帰ったら覚えてろ。一晩中泣かせてやる」
「今日中に帰れたらいいけどね～」
「……」
黒焔虎は背上の痴話喧嘩のようなじゃれ合いには我関せずで、高速で夜空を駆けている。

行く先は晶都である。闇夜だろうと間違うはずはない。
わずかな月明かりと星の位置で方角は分かる。
一時間ほどで街の灯りが見えてきた。
時間は夜の十時前である。
知人宅を訪問する時間ではないのだが敖閏なら許してくれるだろう。しかも、今日は珍しく公務で、先程まで教育委員会の面子と会食をしていたはずである。
学園都市であり自治都市でもある晶都には、様々な組織・団体があり、太守（※市長のようなもの）としての敖閏は、それらのグループと上手く付き合っていかなければならない。
普段、事務的な仕事は全て部下達に任せているのだが、そういった会食にはたまに顔を出して内外にアピールしているのだ。
しかし、今日、敖閏が会食に出席したのは「たまには仕事をしないと旗色が悪くなるから」ではない。
教育委員会のメンバーに珍しく妙齢の美女が居たからである。
小難しい話をする老人たちを余所に敖閏は美女を口説くことに心血を注いだ。

反応は悪くはなかったはずである。
しかし、即日お持ち帰りなどという野暮なことはしない。焦らずとも時間はあるのだ。
次に仕事抜きであの美女と会うためには少々ドラマチックな演出をしようか、それとも、向こうからの連絡を待ってみるか――、などとあれこれ思いを馳せて黒塗りリムジンから降りた敖閏は、一瞬、我が目を疑った。
かつて美女だった、いまは見た目はごく普通の少女が目の前に居る。
パーカーに短パンという少年のような格好で、洒落た西洋風の門扉に身体を預けている少女は敖閏を見るとニパッと笑った。
「晩上好、待ち伏せとは嬉しいね」
もし沙龍が一人だったら、このまま夜のドライブに誘ったところだ。
「九雷君が居なければ、の話だけど」
門扉の脇には、私服姿の九雷が黒焔虎を伴って立っていた。
「こんな時間に申し訳ありません。我が婚約者殿がどうしても貴方に会いたいと言うので」

慇懃な九雷の芝居がかった口調に、敖閏はくるっと視線を動かした。やれやれ、と言っているようだ。
「まぁ、君達が来た理由に察しはつくけどね。さて、どこで話を？　このまま屋敷に招いてもいいけど、うさチャンと欽チャンが居るよ？　どうする？」
敖閏ならではの物言いである。できれば、物騒な話は妻や奏欽の耳には入れたくない、ということだろう。
傍らでは、さきほど敖閏がリムジンから降りる際にドアを開けた男がそわそわしている。
その挙動に気付いた沙龍が声を掛けた。
「あ、趙作（チョーサク）？」
「は、はい！　お久しぶりです、緑麗様！」
かつて緑麗の舎弟、いや、部下だった三人組のうちの一人である。
彼らは似たり寄ったりの背格好をしているので、帽子を目深に被っていると区別がつかないのだが、この趙作は海苔を張ったような眉毛が特徴的である。
「えっ？　緑麗様がいらっしゃるのかー!?」

リムジンの運転手をしていたらしい男が慌てて降りてきた。
蒋爾（ショージ）である。三人の中ではやや影が薄いのだが、シュレッダーにかけられた書類を再生する技では誰にも負けないと普段から豪語している男である。その存在はコメディーでしかない。
「ああ、本物だ！　お懐かしゅうございますー！　お変わりありませんか!?」
「う、うん」
「なに!?　緑麗様だと!?　待て、お前ら、抜け駆けするなー！」
どこからともなく、三人組の最後の一人、杜順（とじゅん）がすっ飛んでくる。三人の中では一番まともなのだが、基本的には会社員の方が似合いそうな中年だ。
途端に門前での同窓会になってしまった。
沙龍はこの三人組とは面識がある程度なのだが、一方的に慕われている。
彼らは緑麗が北方軍大将をしていた時代からの部下だそうで、いまはこうして敖閏の側近のような仕事をしているが、肩書きはれっきとした天界軍将校のままである。
沙龍を取り囲んだ三人組は口々に、

「ちゃんとご飯食べてます？　お酒ばかり飲んでちゃダメですよ！」
などと言っている。
九雷と敖閏はその様子をしばし見守っていたのだが、そのとき、ふと、屋敷の方からざわめくような気配がした。
「……!?」
月光に煌いたものが鋭利な金属であることは九雷には分かった。
「コンの、鬼畜属吏どもがあああっ！　一昨日来いやあああっ！」
そんな叫び声と共に、鉄製の黒い門扉が綺麗に斜めに切り裂かれた。
傍に居た沙龍は頭を下げただけだったが、三人組は腰を抜かして尻餅をつき、あやうく、巨大な薙刀に身体を真っ二つにされるところだった。
「ひ、ひえええっ!?」
趙作は、海苔のような眉が半分剃り落とされていた。
しかし、危難はそれだけでは終わらない。
大薙刀を振るう人物は、軽やかに二撃目を繰り出し、その刃が派手にコンクリートの地面を割く。

「ぬおおおっ!?」
おたおたとリムジンの影に隠れようとした蒋爾に、薙刀の三撃目が襲う！
「あの、えーと……」
敖閏がなにかを言いかけたが、この猛攻を止めたのは九雷だった。
「そこまで！」
その一喝と九雷の行動で、いままでの騒ぎが嘘のように辺りが静まり返った。
巨大な薙刀は斜めに天を刺すように停止している。
九雷が素手で薙刀の名手の手元を抑えているのだ。
見ればその名手は妙齢を少し過ぎたような、それでも充分に美しい容姿を持っていた。
艶やかな黒髪は、高い位置で二つに結わえられており、兎の耳のようになっている。その髪型のせいでさらに若く見えるのかもしれない。
月明かりに透けるような白い肌といい、群青色の瞳といい、典型的な龍族の女性である。
沙龍は小さい声で「ほぅー」と唸った。

着飾った装束には金糸銀糸がふんだんに使われており、一目で高貴な身分であることが分かる。
その存在感からしても、彼女こそが「西海龍王第一夫人」なのだろう。
「宇佐殿、なにを勘違いされたのかは知りませんが、賊も俗吏もここにはおりません」
「あれ……っ？　九雷くんやんかー」
発した声はややハスキーで、妙なイントネーションを持っていた。彼女の育った地方の言葉である。
帝都でこの言葉をほとんど耳にしないのは、この地方出身者が帝都に住むことを嫌うからである。
曰く「あそこはすかした奴らが多くて嫌やねん」ということらしい。
薙刀を引いた宇佐は、ニコニコしながら言った。
「堪忍してやー、暗闇で間違えちゃってー」
「いや、うさチャン、わざとでしょ」
ボソッと零した敖閏には目もくれず、トン、と薙刀の柄を地面につけて、宇佐

は改めて周囲を見渡した。
腰を抜かしてヨロヨロしている三人は、よく見れば夫の家来である。
さらに、正面の背の高い男も少し離れて鎮座している黒焔虎も小さい頃からよく知っている。
「堪忍、堪忍～。最近、火雲宮のお使いさんがしつこくて～」
「いや、だから、わざとでしょ」
と、零す敖閏のことは完全に無視しているようだ。
沙龍は、そそっと敖閏のそばに来て聞いてみた。
「どういうことなんです？」
「うさチャン、昔から強い奴が大好きでね～」
「つまり、喧嘩したかっただけ……？」
「本当は緑麗チャンに腕試しを仕掛けようとしたんだよ。まぁ、九雷君に止められるのも分かってただろうけど」
「あー……、そうですか……」
自分より弱い男は男として認めない、というあのタイプか、と沙龍は思った。

おそらく敖閏と結婚したのも単純明快な理由なのだろう。
意外にも、沙龍にはその基準はない。人界に居た頃は、それを言ってしまうと男は誰も居なくなったからである。
「うさチャンにもバレちゃったことだし、欽チャンも交えて、君達の話を聞こうか？」
敖閏がそう言って、沙龍の肩に手を掛けたところ、
「その手を離しやがれ、このクソ親父いいいっ！」
という、宇佐のさっきの怒号とほとんど同じ調子で、ジャキン、と上空から迫り来るものがあった。
夜空に、風火輪の二つの灯りが見える。
そこから、グレネード・ランチャーが発射されたのは見なくても分かった。
敖閏は懐から扇子を取り出して、ヒョイ、と一扇ぎする。すると、人の頭ほどもある弾が簡単に跳ね返って、それは発射した本人に向かっていった。夜空にチュドーン、と花火が咲く。
「ごめんねー、騒がしくて」

ニコニコしたまま、敖閏は沙龍を伴って屋敷へ入ろうとするのだが、不屈の飛龍は黒い塊となって門扉に突進してきた。
しかし、煤だらけの飛龍は、そこに宇佐の姿を見つけると、にわかに風火輪を停止させ、地表に降りてくる。
「もう、騒々しくてかなわんわー」
と、自分が張本人であるにも関わらず、宇佐はさっさと屋敷に戻ろうとしていた。
「九雷くんも、はよ入りー。お茶だすわ」
「は、母上！　これ食べてくれ！　俺が作ったアップルパイだ！」
飛龍は小脇に抱えていた包みを、恭しく宇佐に差し出した。
「いまのでちょっと焦げたかもしれないが、味は保証する！」
いつになく必死な飛龍に、宇佐は微笑んだ。
奏欽が出産のために晶都に来る、ということが決まったとき、宇佐は喜んで「うちも娘と一緒にお菓子作ったりしてみたかったんよ～」と言っていた。
それを聞いた飛龍が少々曲解してお菓子作りの修行を始めたのだのだろう。

「丁度いいわ。皆で頂こうやないの。でも、まずは顔を洗っといで、敖開」
煤まみれの顔を、真っ白なハンカチで拭いてやった。
この健気な息子は誰に似たのだろう、と宇佐はつくづく思う。
自分の気性は間違いなく受け継いでいると思うのだが、浮気性で八方美人な夫にはちっとも似ていないではないか。

晶都のこの太守官邸は、敖閏の仮屋敷のようなものである。
西海龍王としての本拠地は琥珀宮であり、本来なら、正妃である宇佐もそこに住むのが普通である。
しかし、夫のあまりの女癖の悪さに、宇佐はひとつの提案をした。
「龍王ともあろうもんが、こそこそ女のもとに通うのはおかしいわ。あんたが向こうさんを自分ちに呼びつけたらええねん」
そのぶっ飛んだ発言には、彼女の「龍王はかくあるべし」というポリシーがある。

「ただ、そうすると、女は気兼ねするやろ。せやから、うちが官邸の方に行くわ。周囲には『奥さん怒って出ていっちゃった』と思わしとき」
世間は気にしない。それが宇佐クオリティーである。
宇佐のこういった姿勢は、絶対の自信からきている。決して「浮気相手に譲った」のではなく、むしろ正反対で「慈悲かけたるわ」という姿勢である。
夕食後、部屋で休んでいた奏欽を呼んで、デザートタイムとなった。
改めて、宇佐に紹介された沙龍は、いつものように、
「初めましてではないかもしれないですが、初めまして」
と挨拶をした。
宇佐は豪快に笑っていた。
「いや、初めましてで正解や。うちは緑麗には会ってないねん」
侍女たちがテーブルの用意をする間、珍しく飛龍と敖閏が普通に話をしている。
さっきは重火器まで持ち出しての（一方的な）喧嘩をしていたのに、お互い、そんなことは忘れた顔をしている。

「たまには帰ってあげてよ。ああ見えても、うさチャン、僕ちゃんに会うの、楽しみにしてるんだから」
「そのセリフは、そっくりそのまま親父に返すぞ」
「いや、ホラ、僕には色々仕事上の付き合いってのがあるからさ」
「仕事、してないだろ」
「……」
「……」
一方、奏欽は部屋の片隅で沙龍とひっそり話をしている。
「で、『南海の至宝』は返してもらったの？」
「ええ、一応、ここに……」
と、奏欽は帯に挟んでいた懐剣を抜き取って見せた。
「本物？」
沙龍は思わずそう聞いた。
外観はいつも奏欽が持っていたものと変わらないが、あの敖丁が素直に返すだろうか？

「私も怪しんだんです。なんだか違和感もあるし……。ただ『至宝』の気配も確かにあるんです。もしこれが偽物だとしたら、我が兄ながら天才ですよ」
「うーん……。まぁ、そこらへんのことも含めて、西海龍王には色々話してもらわないとね」
準備のできた丸テーブルに、沙龍と九雷、西海龍王親子三人、そして奏欽が席についた。
飛龍が持参したアップルパイと、昼間、宇佐と奏欽が作ったお菓子が山のように盛り付けられている。
アップルパイは確かに見た目が少し残念なことになっているが、アップルパイだと分かるだけ大したもんだと沙龍は思う。
大昔、自分が作ったホットケーキは、わらじにしか見えなかったし、カレーに至ってはじゃがいもや人参の元素すら見当たらなかった。
「うん。ちょっと焦げてるけど、美味しいよ」
沙龍はそう言ってやった。
元々、甘いものはほとんど食べないのでよく分からないのだが、宇佐も普通に

食べているところを見ると、普通の味はするようだ。
「で、緑麗チャン、僕に聞きたいことってのは？」
敖閏は和やかに場を支配している。
やはりこの屋敷の主である。
「二つだけです。一つは、なぜ、敖丁に『西海の至宝』を渡してしまったのかということ。もう一つは……」
「なんやて!?」
沙龍の言葉が終わらないうちに、宇佐がいきなり大声を出して立ち上がった。
飛龍も奏欽も、九雷さえも、慣れているのか、特に反応を見せない。
「『西海の至宝』をあのボンクラに渡したって、どういうことやねん!?」
宇佐は知らなかったようだ。
当然である。
敖閏はそれを誰にも言っていないのだ。
沙龍が言っているのも、一週間も早くミニ黄龍になってしまったという実体験に基づく、奏欽の推測でしかない。

「ばれちゃうもんだねー。内緒でやったのに」
ひとまず、敖閏はその事実は認めた。
「『至宝』は龍王の象徴やろ！　『至宝』を持ってない龍王なんて龍王ちゃうわ！」
「……」
奏欽は、アップルパイを黙々と食べながら、内心、頭でも掻きたい気分だろう。
相手は兄とはいえ、さらに一時的とはいえ、『南海の至宝』を手放してしまったのだから。
敖閏は優雅な手つきで紅茶にブランデーを数滴落とし、
「緑麗チャンの問いに対する模範解答としてはね、至宝を集めようとしている者を攪乱するため、と言っておきたいところなんだけど……」
と、九雷を見た。
「それじゃ、説得力はないかな？」
九雷は苦笑して、敖閏から受けた視線を沙龍に流した。

貴方に質問しているのは沙龍なのだから、沙龍に答えて下さい、とでも言いたげだ。
「……」
沙龍は沈思している。
「相手が相手だけに、ね。慎重を要するんだよ。実は『北海の至宝』を陛下が没収してから、しばらくして僕のところに打診があった。『西海の至宝』を火雲宮に返却してくれないかってね。多分、欽チャンのところにもあったんじゃないかな」
「私には直接そういった話はなかったんですが、『東海の至宝』については、思い当たることがありますね」
沙龍もその話は奏欽から聞いた。
まだ巽凛が東海龍王になる前のことだ。
当時、行方の分からなかった『東海の至宝』を、火雲宮に返上するなら龍族の助命をする、という話だったように思う。
「飽きれたわ！　一度あげたもんを返せだなんて、了見が狭すぎやろ！」

「まぁまぁ、落ち着いてよ、うさチャン。至宝の件はさ、陛下の意向があるから、僕らも勝手にどうこうできないんだよね」
「龍王は天帝様にへつらう必要なんかないねんやろが！　お上なんてクソッタレや！」
夫人の怒声の下で、飛龍が言った。
「やはり、母上の作った胡麻団子は美味いな」
「……」
一瞬、場が静まり、沙龍は声に出さずに笑った。
西海龍王家の風景というものが垣間見えた気がする。
鎮まった怒気の中で、宇佐はそれでもまだ文句を言っていた。
「そもそも最初に龍王家のご機嫌取りに至宝をくれたのは天帝様やろ」
宇佐は皇家にあまりいいイメージを持っていない。龍王家を利用し、さんざん外敵と戦わせて、自分達は内地で悠々としている、と思っているのだ。
その認識は間違ってはいないが、そのぶん龍王家は優遇されてもいる。
西の都で育ち、また、火雲宮とは少し距離を置いている西海龍王に嫁いだ宇佐

には、その優遇ぶりが実感できない、というのはあるだろう。
「それを、国家の一大事だから返せといわれて、はいそうですか、なんて龍王家の面子が立たんわ」
「僕だって大人しく返すつもりはないよ。だから、敖丁君に預けたんだってば」
「だったら、ちゃんと官邸のこともフォローしとき！　毎日毎日お役人がぞろぞろやってきて、夫君はどこですか、と聞かれるうちの身にもなってみぃ！」
「いや、だって彼らと遊ぶの楽しんでるでしょ、うさチャン」
「……」
宇佐は黙った。図星である。
官吏たちを撃退するのは、いいストレス発散になっているのだ。
「そやかて……」
怯んだ宇佐に、絶妙のタイミングで飛龍が声を掛けた。
「ところで、母上」
「なんや」
「今日の髪型は似合ってると思うぞ。百歳は若く見える」

「……」

実は『うさチャン』の操縦法を、飛龍は敖閏よりも知っているのかもしれない。

7　敖閏の主張

沙龍が敖閏に聞きたかったことはもうひとつあったのだが、結局、いつもの調子ではぐらかされてしまった。

やはりこれは二人きりでじっくり聞き出さなければと、夜も更けてきた頃、帰る振りをして敖閏にそっと告げた。

「いまから二人で夜のドライブでもしませんか？」

沙龍の意図を分からぬ敖閏ではないが、敢えて言葉通り受け取った。

宇佐と奏欽には「二人を見送ってくる」と言って、敖閏はちゃっかりと車のキーを持って行く。

九雷には先に水雲宮に戻ってもらった。

当然いい顔をしなかったが、「あの人はお父さんみたいなもんだよ」と言った沙龍の言葉に、なぜか驚いた様子を見せ、なぜかその言葉で納得したらしかった。

話が済めば戻ると約束したが、『本日の稼働時間』をとっくに超えてしまっている沙龍には、いまからドライブに出掛けて、眠らずに水雲宮に戻れる自信はなかった。

「やっと僕のお誘いを受けてくれる気になった？」

運転手付きの黒塗りリムジンではなく、敖閏の運転するクーペで晶都の街並みを眺めることになった。

控えめな民家の灯りが車窓をゆっくりと流れていく。

「え？」

「前に、ドライブに誘ったでしょ。覚えてない？」

敖閏の横顔には少し疲労の翳りが見えるが、それが彼の色気にもなっているのだと沙龍は気付いた。

多くの女性と浮名を流すには紳士なだけでは足りないのだろう。

「覚えてますよ。最初に蟠桃会で会ったときのことですよね」

沙龍はなぜか敖閏相手だとすらすら敬語が出てくる。

この口調は自分でも不思議だと思う。なぜだろう。「傲岸不遜」と言われ、初

対面の大人たちを常に見下してきた自分が、である。
「静かですね」
ネオンの煌きはどこにも見つけられない。
敖閏がそういう道を避けているのか、それとも、伝統的な学園都市に歓楽街はそもそもないのかもしれない。
「ここは帝都の一区画分くらいしかないからね」
「……」
このまま静かな闇夜の中に引きずり込まれるのではないかと沙龍は思った。
それでもいいや、と誰かが言っている。
誰だろう。
自分であって自分でない存在――。
「さっき言ってたことだけど」
艶めく声が急に耳に響いた。
「はい……？」
「緑麗チャンが僕に聞きたいこと。二つあるって言ってたでしょう？　もう一つ

を聞きそびれたよ」
「ああ……」
なんだったっけ？　と、沙龍はボーッと考えた。
敖閏にずっと聞きたかったことだ。
いつも聞こうと思っていて、でも、そんなことを聞いてもしょうがない、と半ば諦めていたことだ。
はっきりと言葉にはできない。そのもどかしさを感じたくないので、沙龍は考えることを放棄した。
敖閏はそれ以上なにも言わず、しばらくクーペを走らせていた。どこか目的地があるのだろうか。その運転には迷いがない。
街の外れに来たのだろう、ということは分かった。
「あ……」
と、沙龍が小さく漏らしたのは、見覚えのある風景だったからだ。
石畳の先に見える小さな竹林は恐らく人工だろうが、安宿がぽつぽつと点在したこの地域は、貧乏学生達が論文を書きに来るような場所かもしれない。もしく

は、身を伏せたい旅行者が潜伏するような。
「もう少し行ったところに僕の隠れ家があるんだ」
「いいんですか？　『男の隠れ家』をばらしちゃって」
「君こそいいの？　僕みたいな男に人気のないところに連れ込まれようとしているのに。いま、君を守ってくれるナイトはいないよ？」
「別に構いませんよ……」
沙龍はどうなってもいいと自棄になっているわけではない。いま自棄になるような理由はどこにもない。
では、豹変した敖閏をねじ伏せられる自信があるのかというと全くない。人界の普通の男なら立場は逆転するが、敖閏が相手なら自分は赤子のように好きにされてしまうだろう。
（なんでかな。自分でも分からない）
危機感が全くないのが不思議だった。
しかし、やはり、九雷に言った言葉が正解なのだろう、と思う。
沙龍は父親を知らない。育ててくれた養父は居たが血縁はなかった。

だから、もし血縁が居るとしたら――、
（あ、そうか。この感じは、岡山の祖父ちゃんだ）
沙龍は、所在なげな自分を見て微笑む敖閏の表情に、祖父の神谷藤四郎を思い出した。
十八歳になるまで、その存在すら知らなかった祖父である。
日本の高校を卒業した沙龍は、ある日、見知らぬ弁護士から連絡を受けて、岡山まで赴くことになった。そこで初めて血のつながった祖父というものに対面した。
沙龍には、生まれ育った村に風林という『爺々』が居た。祖父同然ではあったが、実際の血のつながりはなかったので、両親の顔を知らない沙龍にとって、神谷藤四郎は初めて出会った直系尊属ということになる。
二十数年前の神谷藤四郎は早くに連れ合いを亡くし、一人娘と共に洒落た城下町の一角に暮らしていた。
先祖を遡れば岡山藩主の剣術指南をしていた家柄だという。立派な家屋敷を持っていた。敷地内にある居合道場も数百年そこにあるような構えだ。

その道場主をつとめ、界隈では「先生」と呼ばれ、慕われていた藤四郎ではあったが、一人娘に居合術を伝授することはなかった。

重い日本刀は普通の女性に扱えるものではないと思っていたし、道場は弟子の誰かが継いでくれればいいと思っていたのだ。ただ、できれば、その弟子が娘婿になってくれればいいと思っていた。

藤四郎は、ごく普通の父親として、娘を大切にしていた。

だから、その大事な一人娘が、どこの馬の骨とも分からぬような男と外国に駆け落ちしたという大事件は、藤四郎を大いに怒らせ、悲しませた。

年月が経つにつれ、やがて怒りもおさまり、そんな娘など居なかったのだ、と思うことにしても、寄る年波の孤独と、娘の選んだ人生を認めてやれなかったという後悔は拭えない。

大陸に渡った娘は、子供を産んで亡くなったという。

ならば、その孫を探しだし、なにも言わずに自分の遺産を託そう、と藤四郎は思った。

普通に考えれば、両親と死に別れた十八歳の少女にとって、それは降って湧い

たような幸運だっただろう。しかし、なんの因果か、沙龍は普通ではない人生を送ってきており、そのせいでお金にはまったく不自由していなかったし、亡き母を求める心も薄かった。

藤四郎は、沙龍と対面してそれを理解したし、沙龍もまた、藤四郎の心情を理解した。

そうして、昭和の激動を生きてきた大和男児の祖父と、中国育ちのドライな孫の奇妙な一夏の生活は、奇妙なままに終わった。

（そういえば、祖父ちゃん、元気かな）

いま、隣に居る、洗練された佇まいを持つ敖閏が、あの頑固一徹な祖父に似ているわけではない。

ただ、自分を見る目が同じだ、と沙龍は思い出したのだ。

「あなたの目的はなんですか？」

車が完全に停止するのを待って、沙龍は聞いた。

「……？」

「私が聞きたかった、もう一つのことです」

沙龍が知りたいのは、結局、それなのだ。敖閏の行動原理といえばいいだろうか。
自己満足なのか、使命なのか、なぜ要所要所で自分を助けてくれるのか、そして、なぜ、いつもそれをはぐらかすのか――。
「そうか……。君が引っ掛かっているのはそこか……」
敖閏はヘッドレストに頭を預けて、大きく嘆息した。
「過去の記憶を持たない君に、分かろうはずはない。迂闊だったよ。いや、分からなくてもいい、と思っていた僕が少し傲慢だった」
「……？　どういう意味ですか？」
「水雲宮に戻る頃には分かるだろう。……さ、秘密の隠れ家にご招待しましょう。おいで」
敖閏は車を降りると、自然な歩調でその周囲を半周し、助手席のドアを開けた。
沙龍が降りずに待っていたのは、それを予測していたからである。
その『隠れ家』はごく普通の洒落た民家に見えた。

部屋数はそんなに多くないだろう。４ＬＤＫといったところか。
家具類に埃はなく、黴の匂いもしなかったので、たまには立ち寄っているのかもしれない。
伝統的な丸窓や長窓が、開放感に満ちた空間を作っていた。
適当に寛ぐように言われて、木製の長椅子に腰掛けてみた。そこだけ、月光が差して明るかったからだ。
窓を開け、部屋に風を入れる頃には、敖閏が冷えた缶ビールとグラスを持ってきてくれた。電気は通っているようだったが、敖閏はそれを使わず、行灯に火を入れていた。
優しい灯りが風に吹かれ、部屋の影を揺らす。
静かだった。
敖閏は傍らに置いてあった二胡を膝に乗せて、調律を始める。
弦の音が聞こえても、尚、静かだった。
「昔ね」
敖閏が調弦をしながら言う。

「君が金髪だった頃、そして、まだほんの子供だった頃、僕の父が君を引き取ったのは知ってる？」
軽く頷いてみせた。
その話は以前、赤帝君に聞いたことがある。緑麗は白帝君とともに砂漠に捨てられていたという。
西方神界の実験体だったという話も聞いた。
「君はひどい怪我を負っていた。その外傷を治すためとはいえ、僕の父は少し罪なことをしてしまった。遺伝子をね、部分的に作りかえてしまったんだ。自分の母親――僕の祖母だけど――の凍結していた細胞を埋め込んで」
調弦の終わった二胡が単音を奏でる。
それは曲になっていない、ただの『音』だった。
「僕の祖母は、龍族一の美姫と言われていたらしいよ。欽チャンとはタイプがちょっと違うけどね。そして、君は、本来持っていたはずの姿を失い、その美姫の姿で生きることになってしまった。幸か不幸かは本人が決めることだけど、少なくとも、僕は、父のしたことはエゴでしかないと思ってる。そんなことをしな

くたって、当時の医療技術だけで君を助けることはできたんだ」
「……」
「酷い話でしょう？　なのに、君はちっとも怒ったり、悲しんだり、まして父を憎んだりはしなかったんだよ。いつも楽しそうで、負の感情など知らないように、この世にそんなものはないとでもいうように生きていた。
でもね、本当は怒っていたんじゃないかと僕は思う。人形のように『整形』されてしまったことを。
年頃になって、自分の容姿しか見ていない男たちに、なにも思わなかったと思うかい？　修行と称して目隠しをしたまま何年も過ごしていたのは、自分の容姿を見たくなかった、と言っていたけど、なぜ見たくなかったんだろうね？　いま、君が、その姿でここに居ることが、なによりの答えだと僕は思うんだ」
「……」
敖閏はいったんそこで話をやめ、二胡に集中した。短調のゆっくりした曲が部屋を満たし、窓外に流れていく。
緑麗は自分の人生をどう思っていたのだろう。

彼女は決して元から脳天気だったわけではない。そうなろうとしてなったのではないか、と沙龍は思っている。恐らく、血の滲むような想いで。

沙龍は眠気を感じていたが、夢と現（うつつ）の境目のようなこの時間にもう少し居たい、と思った。

心地のよい二胡の旋律と、敖閏の声の波長をもっと聞いていたい。

「君が、軍人になる、と言ったとき、父も僕も反対した。西海龍王家の娘として、どこかに嫁いで幸せになってくれればいい、と僕達は思っていたから。でも、君は言ったんだ」

「なんて……？」

「自分は戦うことしかできないから、って――。それを取ったら、自分が自分でなくなる、とね」

負の感情を知らぬように振舞っていた緑麗が将神になったのは、結局、そういうことだろう、と沙龍は思う。

緑麗は自覚していたはずである。見ないようにして、忘れた振りをして、それでもどこかに残ってしまった、自分のドロドロとした感情を。

それらを発散させるために、例えば『殺戮』が許される場所に自ら赴いたのだ、と――。
仙道にも『殺劫（さっこう）』と呼ばれる殺人衝動がある。
破壊と創造。
仙人も神も、そうしたバランスの中で生きているのだ。
「そして、戦う場所を得て、君はさらに決定的な力を得てしまった。黄龍という、無敵の力を。僕はそれを偶然だとは思わない。
龍族の遺伝子を持って戦場に立った君が、黄龍と出会い、保持者になったのは避雷針の元に雷が落ちたのと同じように感じるよ。
ただ、君は力を求めていたわけではなかった。望んで得た力でないことは確かだろうけどね。容姿と同じく」
「……」
「そろそろ分かったんじゃないかな。君の知りたいことも」
「……」
夢の入り口でまどろむ沙龍は、敖閏のこれを贖罪と理解した。彼自身の罪では

なく、先代の西海龍王の業なのだろうが、一族の罪を背負おうとするのは奏欽も同じである。
ひょっとすると、敖丁もそうなのかもしれない、とチラっと思った。
「この前、碧霞元君が水雲宮に来ました」
沙龍がふと口にしたその名は、敖閏の手慰みの演奏を止めるくらいの力はあった。
「碧霞チャンが？」
「彼女は……なにがしたいんでしょうね？」
「……」
敖閏は「それ」を知っているようで知らないが、考えられることはひとつしかなかった。
「碧霞チャンね……、お父さんの泰山府君と仲が悪いのは知ってる？」
「はい。『仲が悪い』っていう表現では済まされないレベルだってことは」
「そうか……」
「敖丁も、碧霞元君も、ハタ迷惑な親子喧嘩ならよそでやればいいのに……。な

にがそんなに気に入らないんだか……」
「……」
敖閏は眠ってしまったような沙龍に毛布をかけてやった。

深夜、敖閏は真っ白な龍に乗って水雲宮に現れた。西海龍王配下の霊獣である。
九匹居るうちの一匹で、彼らは「竜生九子（りゅうせいきゅうし）」と呼ばれている。兄弟達なのだが、それぞれ違った姿をしており、この白い龍は「蒲牢（ホロウ）」という。
他の兄弟達は気性が荒くて騎乗には向かないのだが、この蒲牢は比較的従順で、敖閏が好んでよく使っていた。黒焔虎には劣るものの高速移動を誇っている霊獣でもある。
寝ずに待っていた九雷は、毛布にくるまった沙龍を受け取ると、複雑な顔をしつつ、
「お手数をおかけしました」

慇懃に礼を言う。
口を開けたまま眠っている沙龍は、起きる気配も見せない。完全に熟睡しているのだ。これは沙龍にしては珍しいといえる。
九雷や木佐が側に居るならまだしも、水雲宮以外の場所でこんな子供のように眠ってしまうとは。
「九雷君も僕に聞きたいことがあったんじゃないの？」
敖閏が言った。その言い方には多少の緊張感がある。
いまなら答えてくれるだろうか。九雷は同じ緊張感の中で聞いた。
「貴方は、西海の至宝を敖丁に渡したのは『陛下の追跡の手から逃れるため』と仰いましたが……、それは本心ですか？」
「あれは、うさチャンの手前、そういうことにしておかないとね。注意すべきは敖明で、陛下は本当のところは至宝を取り上げるつもりはないんだよ、なんて言ったら、ウサちゃんのストレス発散がなくなっちゃうし」
思わず納得したくなるような返答だが、九雷は納得していない。
「では『敖明を攪乱するため』というのが建前として、宇佐殿も仰っていました

が、龍王の象徴とも言える『至宝』を、なぜ、敖丁に？」
「建前って……。一応、本音なんだけど」
「いえ、残念ながら違うでしょう。仮に、敖丁に渡したものが『偽物』だとすれば、納得もしますが」
「……」
敖閏は分からない程度に眉を寄せたが、九雷には看破された。
そこで、追い討ちをかける。
「敖丁に渡した至宝は『本物』なんですか？」
「僕が持っていたのが『本物』だという証拠もないよ」
「なるほど……」
あっさりとはぐらかされる。
龍王本人なら『本物』と『偽物』の区別くらいつきそうなものだが、実は、敖閏の言っていることも嘘ではない。大昔に天帝から拝された『四海の至宝』は、盤古の魂魄の欠片と「言われている」だけなのである。
それが真実盤古の魂魄の欠片なのか、分かる者は居ないし、証明できる者も居

ない。
もし証明する方法があるとしたら、それは敖明と敖丁しか知らない。即ち『四海の至宝』を全て集めて、その魂魄の主を『再生』する、という方法でしか証明できない。
「始祖は盤古だけじゃない。もし盤古の魂魄の欠片のみを『本物』とするなら、別の始祖の魂魄の欠片、つまり『本物に近い偽物』があってもおかしくはないでしょ？」
確かにおかしくはない。
しかし、詳しいことはなにも分かっていないのだ。
全員が五行行使者だったという始祖たちが正確には何人居たのか、他の始祖たちの力の程度はどれほどのものだったのか。
盤古の逸話だけが一人歩きしている状態では、迂闊に判断はできない。
「至宝の争奪レースよりも、僕は碧霞チャンの方が気になるけどね」
「碧霞元君ですか……」
その件については、いまは泰山府君の警護くらいしかすることがない。

それとて泰山府君本人が「いかなる干渉も不要」と言っているので、制服組は使えず、諜報部の工作員を遠巻きに配置しているだけだ。
果たして、老齢の泰山府君に、四行マイスターの碧霞元君を下す力があるのかどうかは不明だが、最悪の場合が起こっても大人しく殺されるような泰山府君ではあるまい、と九雷は思っていた。
「ところで、九雷君、僕も君に聞きたいことがあったんだけど、答えてくれるかな？」
敖閏がそんなことを言い出すので、九雷はさらに身構えた。
「なんでしょう？」
「天地開闢のとき、盤古は混沌を制し、始祖となったよね。なら、混沌はどこへ行ってしまったんだろう？　かつて、君はそれを調べてたよね？」
「……ええ、確かに」
大昔の話だ。西方軍大将だった敖閏がそのことを知っていてもおかしくはないが、なぜいまさら――。
「あの仕事は、西方神界の邪魔も入り、続行不能になりました。私の唯一の黒星

です」
それは本当のことだ。そのときにルシファーと出会い、反目し、一時は共闘もしたが、結局、公式に判明したことはなにもなかった。
「そう……」
「ですが、ひとつ答えられることがあるとすれば……、おそらく貴方の推測通りかと」
「……」
なにか、二人にしか分からない話があるようだ。敖閏は二、三度頷くと、
「まぁ、なんとかなるでしょ」
そんな軽い言葉を残していった。

8　東極山の混迷

火雲宮、北東エリアである。

ここには一階建ての平屋があるだけで、それも使われていないオフィスのように見える。看板もなければ人の気配もしないのだ。

しかし、公式にはそこが『泰山府本部』となっており、行政に携わる者なら、火雲宮マップを確認すれば分かることである。

平屋の周囲はちょっとした広場になっており、万国博覧会のように色んな国籍の屋台が並んでいる。

この広場は泰山府職員よりも界隈の建物で働く外交府や工部府のスタッフたちの憩いの場になっているのだが、彼らはその足下に広大な泰山府の敷地があることはたいして気にしていない。さらに、その奥深くには『次元回廊』があり、その先に『冥府』という別世界が広がっていることもふだん意識することはない。

なぜなら泰山府という役所は他の府とのつながりが全くないからだ。全ての行

政から切り離された組織なのである。
いまは昼休みが終わる時間で、屋台の賑わいもだいぶ落ち着いてきた頃合だ。
広場の木陰にホークス君の薄いエメラルドグリーン色の体が舞い降りてくる。
屋台の店員も、まだ広場に残って寛いでいる者も、ホークス君の美しい姿――顔はともかくとして――にいちいち反応することはない。霊獣など、ハトやカラスと同じくらい、見慣れている存在だ。
ホークス君はそのまま二足歩行で平屋の建物にスルッと入っていく。内部は閑散としていて、確かに人の気配はないが、奥には地下へのエレベーターと階段があって、どちらも泰山府のＩＤカードがなければ降りられない仕組みになっていた。ホークス君はＩＤカードは持って居ないが、泰山府君発行の特別許可証を持っている。効力は同じだ。
エレベーターで地階まで降りると、そこは大きな空洞のようになっているのが分かる。ちょっとした地下都市である。
本部建物――これは、地上に顔を出している平屋の下の部分である――があり、コンクリートの道路があり、コンビニや生協まである。

この一帯は全て泰山府の敷地であり、どこもかしこも、とにかく暗い。電気代をケチっているというより、職員達が煌々とした灯りを嫌っているのである。

泰山府の長官室は本部建物の地下四十四階にあった。

エレベーターを降り、暗く、狭い廊下を進んだ先にある、倉庫のような部屋のことである。

ホークス君がここにやって来るのは、碧霞元君が長風呂したり、ゲームに熱中しているときに限る。

もし、こんな会合が「お嬢」に知られてしまったら、しばらくは口を聞いてもらえないだろうし、最悪の場合、焼き鳥にされるかもしれない。

それでも、ホークス君は、かつての主人といまの主人の橋渡しをできるのは自分しか居ない、という使命の下に動いている。

「あー、もう、またこんなに散らかして」

泰山府君は怪しげな実験器具に囲まれて、というよりも、ガラクタに埋もれた状態で、壁一面のモニターを見つめていた。

モニターは数十もあり、ひとつの画面には十八禁の動画が流れ、別の画面には

難しい計算式が並んでいる、といった具合である。
手元のキーボードひとつでそれらを操作しているのだが、いま、泰山府君が食い入るように見ているのは、正面のモニターが流している午後一のメロドラマであった。
「お嬢は本気ですぜ、オヤッサン」
「ウム……」
「一体どうなさるおつもりなんで？　緑麗様がゴーサイン出しちまったら、お嬢は文字通り怖いモンなしになっちまいませんか？」
「ウム……」
「真武君（しんぶくん）も特に諌めるようなことは言ってなかったし。あ、それに、東方軍大将なんですがね、ちょっと気になることが……って、あっしの勘違いかもしれねぇんですが」
「ウム……」
泰山府君は、メロドラマのボリュームをこれみよがしに上げて、ホークス君の話を聞こうとしない。

ダメだこりゃ、とホークス君が無い肩をすくめる。そのとき、モニターのひとつが目の端に入った。
それもドラマのように見えるが、右上に小さく「LIVE」と出ているのでどこかの生中継の映像だろう。望遠で拡大された映像のようで、画質はあまりよくない。
紺色の軍装の男が曇った空の下で、やはり同じ軍装の男を相手になにやら息巻いている。一触即発な雰囲気だ。音声は聞こえない。
怒っているのはややがっしりした筋骨を持った男で、大きな刀を下げている。
（ん？　東方軍大将か）
ついこの間会ったばかりなので間違えるはずはない。
対するのはやや細身の男で、こちらはなにも持っていない。嫌味なほどに真っ赤なマントを羽織っていて、超然と腕組みをしている。
この天界軍の共通軍服にマントを装着することが許されているのは確か大将以上の将官だったはずだ。
マントの色はそれぞれの属性の色を表す。

すなわち、東方軍なら青、西方軍なら白、といった具合である。
「……」
ホークス君はしばらくそのライブ映像を眺めていたが、やがて登場人物が三人になったところで興味も失せた。
男三人の喧嘩など、暑苦しくて見るに値しない。せめて北の四方将神くらいの美形が居れば花もあろうというのに。
「恐ろしきは物の怪にあらず」
泰山府君が呟く。
こちらでは丁度メロドラマのヒロインが宿命のライバルである「お義母様」に、毒入り紅茶を飲ませようとしているところだった。
姑に苛められる日々に嫁がぶち切れたという展開である。
ライブ映像の方は、三人目の男が銃を抜いて、大刀を持った男を脅しているという、これまた物騒な展開になっており、泰山府君が「どちら」のことを言ったのか、ホークス君には分からない。
が、見ていないようでモニターは全て見ている泰山府君のことだ。

やはりいまの呟きはフィクションよりノンフィクションについての感想なのではないだろうか、とホークス君は思った。
「あっしが一番恐ろしいのは、消費期限の切れた乳製品を開ける瞬間でさぁ」
わざと軽く言ったのだが、泰山府君は真面目に頷いた。
「ウム、形あるものは須らくその姿を変える。怖いのう。この『お義母様』だって、昔は清純派アイドルだったんじゃが、いまは妖怪にしか見えん」
「それは演出ってやつじゃねぇんですかい？」
「……お？」
泰山府君は、メロドラマの展開に興味津々、乗り出した。
姑が紅茶のカップに口をつけたまさにそのとき、東南アジアに行っていたはずの夫が息を切らして戻ってきたのだ。
ヒロインはここからしばし傍観者になる。
夫が手にしていた週刊誌を姑の前に広げ、声を荒げた。
『お母さん、これはどういうことなんです!?　うちの不動産がいくつか、仇敵ともいえるキヨミズ建設の名義になっているそうじゃありませんか！』

『あら、達彦さん、カンボジアの工場に行ってらしたはずでは？』
『そんなことはどうでもいいんです！　この週刊誌の記事は本当なんですか!?
キヨミズ建設の専務と共謀して、我が大川グループのスキャンダルを業界に流し、父さんを心労で入院させたのは他ならぬ社長夫人だ、とはっきり書かれているんですよ！』
『まぁ、そんなでたらめな三文記事を鵜呑みにするなんて、達彦さんらしくないわ』
毒殺はこのまま未遂になりそうな雰囲気だが、姑の悪事を雑誌記者に漏らしたのはなにを隠そう、このヒロインである。
夫はそれを知らないが、姑の方は薄々感付いている。
ヒロインの複雑な表情がアップにされ、大袈裟な効果音と共に「つづく」のテロップが入り、メロドラマはそこで終わった。
ライブ映像の方も、目を離した隙に登場人物たちが消えており、いまは暗い海と空しか映っていない。
「……」

ホークス君は壁一面のモニターと、伸びをしている泰山府君を交互に見て、元主人のなんらかのリアクションを待った。
「……よし」
と、泰山府君が立ち上がったので、ホークス君も背筋を伸ばした。
「ホークス君、お主、ちょっと玄都に行って参れ」
「玄都？　八景宮ですかい？」
「ウム。あの老いぼれが『覇王』を隠し持っているはずじゃ。それを貰って来てくれ」
「は、はい？　『覇王』ってぇと、確か、幻の銘酒と言われている……？」
「ウム。一万年に一本しか醸造できない貴重な酒じゃ。もし、太上老君がごねて渡さないようだったら、『例の件をばらすぞ』とでも言ってやれ」
「え～と、オヤッサン？　その銘酒を一体どうなさるおつもりで？」
「飲むに決まっておろう。酒は飲むためにあるのじゃ」
「……」
なにがなんだか分からないホークス君だったが、壁の時計をチラッと見て、あ

れこれを計算した。
「ちょいと散歩に行ってきやす」と黄花洞(こうかどう)を出て来たとき、碧霞元君は携帯ゲームをしながら上の空で返事をしていたので、六時間はあのままだろう。
そして、ゲームに疲れて寝るのがいつものことなので、そこからさらに六時間。つまり、いまから十二時間は自由に行動できるということだ。
「『覇王』を貰ってくればいいんですね？　じゃあ、ひとっ飛びしてきまさぁー」

『東海の至宝』のせいで常に嵐が吹き荒れているはずの東極山だったが、今日は風のひとつもない。
この無風が妙な様相を作っていた。
海岸線の見える神殿の入り口で景春は倒れ、敖丁と陽輝はそれを見下ろしている。
曇った空の下、そこには不気味な静けさだけがあった。

「ここに転がしておいていいのか？」
「心配ならトドメ差しておいてよ」
「こいつにマグナム撃ち込むのはもう勘弁してくれよ。これでも大事なダチなんだぜ」
なぜ犬猿の仲のはずの二人が結託しているのか、銃床で後頭部を打たれて意識朦朧としている景春には分からない。
神殿に部外者が現れたことは予想通りだった。ただ、それが敖丁だったことは予想外というしかない。さらにその直後に陽輝が登場し、自分を殴り倒すなどとは考えもしなかった。
相手が敖丁一人なら負けない自信はあったが、陽輝が敖丁に味方してしまっては、いくら天界一といわれる剣技を持っている景春でもさすがに分が悪い。
（陽輝め、一体、どういうつもりなんだ……？）
景春は冷たい石畳に頬をこすりつけたままの姿勢である。
この東端の地に四方軍大将の三人が揃ったのは、『東海の至宝』を巡ってのことである。

景春は碧霞元君の助言によって『東海の至宝』の警備強化のために、敖丁はおそらく敖明より先に『東海の至宝』を奪取するために、そして、陽輝はその敖丁を助けるために。

ただ、敖丁の目的は景春にはよく分からない。碧霞元君は、敖丁のことについてはなにも言っていなかった。

（生きてたら覚えてろ、二人とも……）

徐々に痛みが怒りに摩り替わっていく。

裏切り行為に等しいことをやらかした二人には、さんざん殴った上で事情を問い詰めたいところだが、いまはしばらく動けないだろう。

近くで足音がしているのだけは分かった。

「まぁ、景春はどうでもいいよ。問題はこれが本物かどうか、だね」

敖丁はさきほど神殿から持ってきた『東海の至宝』を掲げて見ていた。

直系十センチそこそこの、紺碧の玉である。

「見ただけじゃ分かんねぇのかよ」

「龍王ですらレプリカに騙されるんだよ？　ラボに戻って調べないと分からない

ね」

そう言ったが『東海の至宝』に関しては本物だからこそ『巽風』を起こせるのである。これが偽物であるとは考えにくかった。

敖丁は『東海の至宝』を懐に仕舞って、そのままさっさと船着場に向かう。

陽輝はというと、景春を見下ろし、二言三言、声を掛けたようだった。景春には半分も聞こえなかっただろう。

東極山は、天界東端の小島にしては立派な桟橋が建設されている。元々は東海龍王家の私有地であり、ここに神殿があるのも極東世界との境界を監視するためであった。

巽凛がかつて人界の『斉（せい）』という国の后であったとき、この島の存在を思い出したのは、兄の敖広から聞いたことがあったからである。以来、巽凛の眠りを守るように、この島は外界との接触を絶っていた。『東海の至宝』が巻き起こす嵐と共に。

敖丁がなんの苦労もなくこの島に辿り着けたのは、その嵐を鎮める術を知っていたからである。

彼が龍族であることはそれほど関係ない。五行術で気象をここまで制御できるところが敖丁の恐るべき才能なのである。
「嵐の結界をどうやって破ったんだ？」
甲板上で曇り空を振りあおぎ、陽輝が言った。
それは、行きの旅程でも聞いたことだが、そのときには説明してもらえなかった。
先に到着していた景春も、普段駐屯している東方軍の部隊も、東海龍王たる巽凛から『委任状』を預かっているのである。無論、ただの紙片ではない。
『東海龍王家縁の者と看做す』という、龍王の許可をしたためた護符である。
しかし、敖丁はそれを持っていない。
ではどうやったのかというと――、
「馬鹿にでも分かるように説明すると、風を防ぐには二つの方法がある」
敖丁は不機嫌な表情を貼り付けたまま、多少演技がかった仕草で、甲板にある自分専用のリクライニング・チェアーに腰を降ろした。
このクルーザーは敖丁の私物である。軍用艦ではない。

乗船している龍族のスタッフも、ベテランの航海士から新米の給仕係まで、様々である。
「一つは、目的物の周囲に『壁』を作って跳ね除ける方法。しかし、東極山の嵐は生半可な壁じゃ逆に吹き飛ばされる。金行マイスターの生成する鋼鉄くらいの『壁』が必要なわけだけど、そんな強力な『壁』と一緒に移動するのは不可能だね」
「……で？」
「もう一つは、嵐そのものを消滅させる方法。風力ってのは実は無害でね。同じ力をぶつければ消えてくれるのさ。まぁ、馬鹿には教えたところで理解も真似もできないだろうけど」
「……」
陽輝は甲板の手すりにもたれて、フンと鼻をならした。
ここで毒舌合戦を始めるつもりはない。しばらく一緒に行動しなければならないのだ。
「ところで――、腕章してないのは『そういうこと』なの？」

陽輝の私服はいつものことだが、左腕にいつもしているはずの天界軍将官の証である真紅の腕章がない。ドッグタグも今日は外しているのだろう。
「辞表は祥倫に預けてきた」
「別に辞める必要はないのに。全くなにをかっこつけてんのさ」
「あぁ？　俺がお尋ね者になると奏が困るから、協力するならそれなりの準備をしておけって言ったのはお前だろうが」
「僕が言ったのはそういう意味じゃないよ。相変わらず馬鹿だね。殉死なら世間も納得するだろうって話さ」
つまり、敖丁は『死ぬなら大将のまま死ね』と言っているのだ。
自分は、というと、それを貫くつもりか、パリッとしたいつもの軍装である。
ご丁寧に赤いマントまでつけている。
「そうかい。だけど、あいにくだが、腕章を外してきたのはお前に言われたからじゃねぇよ」
「フーン？」
曇り空の下、洒落た甲板で、不似合いなトロピカルフルーツのジュースを飲む

敖丁は、陽輝の進退など知ったことではないのだった。

9　お茶会

景春が大きなたんこぶを作って水晶宮に戻ってきた数日後、東方天界では不可解な事件が幾つかあった。

まず、西海龍王敖閏の突然の失踪である。

任地である晶都からも、本拠地である琥珀宮からも忽然と消えてしまったのだ。

敖閏に関しては、公の場から姿を消しても、実は三日間妓楼に居たとか、とある高家の未亡人宅に滞在していた、などという前例は数え切れないほどあるので、宇佐を初めとする関係者達はあまり気にしていない。

しかし、その行方を注意深く追っていた九雷の情報網のどこにも引っ掛からなくなってしまった、というのは留意すべきことである。

沙龍は、

「ほら、あのとき訪問しておいてよかったでしょ」

と、勝ち誇ったように言ったが、
「そうじゃなくて、お前がなにかを問い詰めたから失踪したんじゃないのか？」
九雷はそう言った。
「えー、私のせい？　そんな厳しいこと言った覚えはないんだけど……。結局、至宝の件ははぐらかされちゃったし……」
今朝の朝食は珍しく二人揃って席についている。
目玉焼きにたっぷりのベーコン、ソーセージ、サラダ、スコーンにロールパン、という典型的なイングリッシュ・ブレックファストのメニューを、沙龍は満足そうに眺めた。
これらは「たまには欧米風にしましょうか？」という建民の提案に対して、沙龍がリクエストしたものである。
まずは絞りたてのオレンジジュースを口にした。酸味がほどよく口に広がる。
一方、九雷の前には、ごく簡素なコンチネンタル・ブレックファストが配膳されている。これも本人の希望で、朝は食欲があまりないという理由もあるのだが、元々、燃費のいい身体を持つ天界住民達はそれほどカロリーを必要としない

のである。
「早朝の電話はなんだったの？」
その電話があったから、沙龍も目が覚めてしまったのだ。
九雷が朝食の席でまず敖閏の話をしたのは、その電話の件を聞かれたくないからだと分かったが、沙龍は敢えて聞いた。
「……」
案の定、沈黙である。
（ま、いいけど）
気にせずにトマトサラダをつつく。
どうせ、仕事上のトラブルだろう。
自分には関係ないことだし、必要なら話してくれるはずだ。
が、いままでの二人の関係からして、九雷が「必要だから話した」ことがあっただろうか？
「今日は遅くなるかもしれない」
と言って、そのまま出勤した恋人と入れ替わるように、火雲宮からの使者が来

た。
紗衣からそれを聞いたとき、いつも秦帝の招待状を持ってくる近衛府の士官だろうと思ったのだが、今日は近衛府の隊長自らが仰々しい正装でやって来た。
魁星（かいせい）である。
やや茶色がかった短髪と清潔そうな顔立ちは好青年に見えなくもないが、沙龍にとってこの顔はあまりいいイメージがない。
「緑麗ちゃん、おひさしー！」
堅苦しい真っ白な衣装に反比例した口調である。
沙龍は、一瞬、口を歪めたものの、傲然と腕を組んで、
「帰れ」
端的に言い放った。
普通なら、秦帝の意向を伝えにきた、勅使に等しい者を追い返すなど論外である。
しかし、沙龍はかつてこの脳天気男にはさんざん迷惑をかけられたし、個人的な関係で言えば、これくらい言っても許されるはずだ。

「イヤーン。このまま帰ったら、僕、陛下に怒られちゃうー」
「なんなの。だいたい、なんで魁星さんがここに居るの」
「だって、僕、いま、近衛府の隊長だもん」
「秦ちゃん陛下は自棄なの？　こんな『頼りになりそうにない男ナンバーワン』みたいな魁星さんに命を預けるとか、もう、捨て身のギャグなの？」
「酷いわー。そりゃ、僕は緑麗ちゃんにはちょびっとくらい恨まれてもしょうがないことをしたけど、実はあのあと九雷にはさんざんな目に……」
「なんのこと？」
かつて魁星に『夢封じ』を仕掛けられたときのことだ。
沙龍は、その前後のことはしっかり覚えているのだが、肝心の夢世界の中での出来事についてはなにも覚えていない。
それは、夢世界の中に沙龍を探しに行った九雷も同じで、二人のそのときの言動については『獏使い』たる魁星しか知らないのだ。
「まぁ、想像はつくと思うけど。要するに、僕は自分のやったことに対する制裁はちゃんと受けたんだよって話。……それじゃダメ？」

「ダメもなにも、あれは秦ちゃん陛下の密命だったんでしょ？」
「まぁ、そうだけど」
「だったら、それはそれで仕方ないとして、制裁を受けたというのも、まぁ、分かったよ、と言っておくとして――」
「う、うん」
「私の脳内嫌悪感が消えるわけじゃないんだ。帰れ、この好色十代男」
「イヤーン」
これでは埒が明かない。
魁星はわざとらしくお飾りのような懐中時計を取り出して、「時間がない」というのをアピールするや、ビシッと敬礼した。
「緑麗様にも数々の事情がおありと存じますが、ここは何卒、穏便に」
「……ハァ」
沙龍も沙龍でわざとらしく溜息をつく。
「本日は陛下のご機嫌麗しく、お忙しい政務の合間を縫って、親しい者だけで会席を設けたいとご所望であらせられます故、自分が緑麗様のお迎えに参りまし

た」
「……つまり、いつもの『お茶会』じゃん」
「それ言っちゃ駄目よー」
「で、なんで今日に限って魁星さんなのよ」
「さあ？　人手不足なんじゃ？」
と、脳天気に言う魁星だが、今朝の九雷の様子といい、なにかあるな、と沙龍は思った。

秦帝主催のお茶会は、それ自体は大したストレスにはならない。
沙龍だけでは気後れするかもしれない、と秦帝が無駄な気を回してくれて、巽凛や奏欽を呼んでくれることもあるし、出されるお茶菓子は甘いものが苦手な沙龍を唸らせるほど美味なのである。
苦痛なのは、主に衣装である。
火雲宮の、皇族のプライベートエリアに招待されるのだから、礼装でなければ

ならない。
このときばかりは、自称『緑麗様の着付け係』である悠花が張り切って盛大に飾り付けるので、沙龍の衣装の総重量は軽く十キロを越す。
重さだけならまだ耐えられるのだが、締め付けがなんとも窮屈である。今日も、帯だけでも五重巻きくらいにはされているだろう。
（ゲフ……）
東屋から見渡す景色は、人工の美に溢れていた。
植樹された花木、澄んだ水の張られた池、その上を渡る石橋には紅い手すりが施されている。
王の憩いの場としては少し地味にも思えるが、恐らく秦帝の好みなのだろう。
ただ、沙龍は美しい庭園の風景など一切見ていない。
（今日は一段と腹まわりが苦しいな……）
天帝陛下の御前で衣装に関する文句は決して言わないこと――というのは、紗衣や悠花にやかましく言われているのだが、思わず表情にも愚痴にも出てしまいそうだ。

今日のお茶会の出席者は秦帝と沙龍の二人だけである。
魁星は東屋の端に控えていた。他の側近は居ない。
「一体なにごとだ、と思っているのだろう？　短期間に何度も呼びつけて、と」
十代後半のような容姿を持つ秦帝にずばりそう言われても、沙龍はポーカーフェイスを作ることができる。
「実は少し困ったことになった。先代の従兄弟殿ならどうしただろう、と最近ずっと考えている」
沙龍が帯の締め付けに愚痴を零す前に、秦帝から政務についての愚痴が出たので、その話題に乗ることにした。
どうせ、差しさわりのない話なのだ。
「同じようになさる必要はないのでは？」
「そうかもしれない。が、私は結果的に同じ道を選んでしまいそうだ」
不吉なことを言う。
玉帝と同じ道を選ぶということは、結局、自分を犠牲にすることではないか、と沙龍は思う。

それに、いま、そんな選択をしなければならない段階なのだろうか。
「野暮な話題であったな。今日はそんな話をしたくて呼んだわけではないのだ」
と、微笑む秦帝の思考回路は、沙龍にはまだ分からない。
学者肌とも聞いているし、日和見という噂もある。
ただ、この若き統治者は、玉帝よりも遥かに老成している、と誰もが思うだろう。
強烈なカリスマ性はない替わりに、柔和な性格に覆い隠されたなにかを期待したくなるのだ。
「この冠をかぶらなければならない者の常で、私にも後宮に携わる義務がある」
薄い磁器に丁寧に淹れられた高級茶が、ぐっと喉を通っていく。
初めての話題だ。
後宮ですと？　と、沙龍は口の中だけで反芻した。
「いま、後宮には、私が帝位に就いたときに、慣例として、諸侯達から贈られた姫君が三人、さらに妃嬪（ひひん）が九人、これらを世話する女官達が数百人居る」
「そ、そうですか。それはさぞかし食費もかさむ……いや、賑やかでよいことで

す」
秦帝がそれらの妃妾と実質上の関係を持っているのかどうかは不明だが、見かけだけは同じ年齢に見える健一などからすれば、きっと夢のような話だろう、と沙龍は思った。
「ただ、正直なところ、私も若輩故、彼女達のご機嫌をどこまで取って、どう接すればいいのかという判断は、なかなかつかないのだ」
「……」
要するに、高校生のような男の子が、いきなり持たされたハーレムに戸惑っているという話か、と沙龍は簡単にまとめた。
男女の付き合いについて、沙龍はかなり早熟だった。
初恋は十歳だったし、上海では力に物を言わせて年上の部下を言いなりにもした。
それらは、純粋な恋愛ではなかったかもしれない。
やはりあの頃の自分は普通ではない境遇のせいでどこかおかしかったのではないか、とも思う。

そんな沙龍から見れば、秦帝の初心な言動は非常に微笑ましい。
「それで、少し力を貸して欲しいのだ、緑麗」
と、秦帝が、あくびを噛み殺しながら直立不動で控えていた魁星に合図をすると、魁星は傍らの机に積み上げられていた木箱を沙龍の目の前に移動させた。
箱の大きさはまちまちであるが、だいたい三十センチ四方ほどで、厚みのあるものもあれば、薄いものもある。
「なんです……？」
「まだサンプルだが、新旧、可能な限りのものを用意してみた。そなたの目で、女性の好みそうなものを選んで欲しいのだ」
秦帝はそう言って、立派な飾り紐を解き、一つずつ箱を開けていく。
中身は洒落た香水から、古風な髪飾りなどで、秦帝が言ったように新旧の煌びやかな品々が所狭しと並べられた。
まるで企業の商品開発会議のようでもある。
なるほど、と秦帝の思惑を理解した沙龍だったが、この『大役』は荷が重い。
「あの、お言葉ですが、陛下。私は庶民出身でして、後宮におわす方々の嗜好を

理解できる自信は全くありませんが」
「古今東西、女性の好みというものはそれほど変わるまいよ。気楽に選んでくれればよいのだ」
秦帝はにこやかに言う。
沙龍が困ったように魁星をチラッと見ると、彼も口元だけで笑っていた。
この空気の示すところと言えば、プレゼント選びは、単に、沙龍を呼びつけた口実と考えるべきだろうか。
秦帝は確かに楽しそうである。
「これなどは、清朝で流行った『大拉翅(だいらうし)』をモチーフに細工師に作らせたのだが、少し大きすぎないだろうか？　このようなものを頭上に置くとムチウチになりそうな……」
大拉翅とはかんざしの一種だが、扇状になっており、そこに髪を巻きつける土台として使われる。かの西太后の写真で有名な、あの巨大な髪飾りである。
東方天界においての女性のファッションは様々で、清朝の煌びやかな衣装を好む者も居るし、漢代の華麗なファッションを好む者も多い。その他、洋装の女性

もよく見かける。
宮中でも、礼服官服以外はかなり自由な服装が許されていた。
沙龍もくだけた調子で話しはじめる。
「うーん……。アクセサリーもいいんですが、古今東西、女性の好むものはコレじゃないすか？　コレ」
親指と人差し指で丸を作ってみせると、秦帝と魁星が盛大に笑った。
しばし、そんな和やかな時間を過ごしたが、秦帝のスケジュールも押している。
お茶会は早々に解散となり、結局、どの品を誰に贈るのか、という部分については、
「そなたの意見を参考に、追々決めておこう」
ということになった。
最後に、秦帝が「これは普通の女性には重すぎるのではないか」と懸念していた大拉翅を、悪戯のように沙龍の頭に乗せた。
伝統的な大拉翅と違い、カチューシャのように簡単に装着できるようになって

いる。
小さな頭にすっぽりとかぶせられた髪飾りは、黒髪に似合うように作られたものだろうが、沙龍のベージュ色の髪にも意外と映えていた。
しかし、鉄板でも入っているのではないかという重さである。
着物だけでも相当の重量なのに、これでは満足に動けそうにない。
が、沙龍は意地もあったので、スクッと立ってみせた。
「姿勢がよくなりそうですね」
「サンプルなので、それは進呈しよう」
「え……？」
こんなものを貰っても、クローゼットの肥やしになるだけだと思うのだが、突き返すわけにもいかない。
「今日は楽しかった。また話相手になってくれ」
秦帝は終始にこやかだった。

魁星の見送りを早々に追い返した沙龍は、重たい髪飾りと重たい衣装をつけたまま、一人で石畳を歩いていた。
火雲宮の広すぎる敷地は、エリアによっては人っ子一人居ない。
静かだった。
高い塔は北西方面に見える一つだけで、後は、特徴的な屋根を持った平屋が地平線のように連なっている。
（お、重い……）
沙龍が顎を上げるようにしたとき、近くの屋根に白いものが見えた。
（……？）
青みがかった白。
それは碧霞元君のイメージでもある。
（なにしてんだ、あの二人は）
畏れ多くも、火雲宮の本殿近くの建物の上に悠然と立っているのは、碧霞元君とその霊獣のホークス君であった。
白い上衣に青い袴姿の碧霞元君は明確に沙龍を見ていた。

その視線に敵意はないが、さりとて友好的というわけでもない。
無視して通り過ぎようとしたとき、沙龍の視界を一面、真っ黒にするものがあった。白から黒へのいきなりの転換。
頭上の重たさもあって、黒い障害物を軽やかにはかわせなかった。
「……ふがっ!?」
ぶつかった拍子に、今度は後ろにのけぞる。
あわやそっくり返るところを、咄嗟に二の腕を掴んで引き寄せてくれたのは、黒い障害物そのものだった。
「誰かと思った」
黒服の軍人は、目を細めて驚いていた。
「景春さん……？」
沙龍は一瞬、懐かしい人に出逢ったかのような錯覚を覚えたが、その直後に脳裏に浮かんだのは、九雷の血塗れの姿だった。
そうだ。
こいつは、自分の最愛の恋人を斬った男ではないか。

なぜ、懐かしそうに呼びかけてしまったのだろう。
「……」
しかし、そんな感慨に構わず、景春はしげしげと沙龍を眺めて、苦笑していた。
こんな着飾った姿で、どこかの皇族の姫君のようだ。
普段の沙龍を知っている者なら、苦笑のひとつも出て当然である。
「あの……」
どういう態度を取ったらいいか分からない。
沙龍はあの件があって以来、景春には会っていなかったのだ。
「すまん、俺の不注意だった。怪我はないか？」
そう聞きながら、景春はまだ笑っている。
「大丈夫……」
そんなにオカシイかよ、と軽く睨む。
そして、思い出すように上空を見上げると、既に碧霞元君とホークス君の姿はなかった。

この奇妙な緊張感はなんだろう、と沙龍は思う。重い衣装、重い空気、重い再会――。

沙龍は、景春が短く「あ……」と言うまで、自分の犯している重大なミスに気付かなかった。

ハッとしたときには、景春が手を離して、また謝った。

「悪い」

沙龍が二の腕を掴まれるのが大嫌いだと知っているからこその態度である。

しかし、そんなことはどうでもいいのだ。

軽い混乱を覚えた。なぜ、仇敵のような男の手を即座に振り払わなかったのか。

「いや、大丈夫……」

自分でも意味不明な言葉を繰り返すだけだった。

「……」

その覇気のない様子に気付いた景春は半歩下がって背筋を伸ばす。

「沙龍」

「……なに」
「いつか、お前に会えたら言おうと思っていた」
「……」
「俺が、以前、しでかしたことについて、弁解はしない。お前が俺を嫌うのは当然だろうと思う。しかし、あんな真似はもう二度としないと誓える。それだけは信じてくれ」
予想通りの言葉に沙龍は嘆息した。
そんなことは分かっている。
景春に落ち度はない。あれは九雷の計略である。
なのに、改めて真摯に謝るこの軍人馬鹿は、闇の世界を生きてきた沙龍にとって、清冽すぎるのだ。
「それは景春さんと元帥の問題でしょ。私は、別に貴方を恨んだりしてないよ」
「そうか……。ならよかった」
「それよりも、景春さん。なにか急いでたんじゃないの？」
「あ、ああ、それは……」

と、言いかけて、景春は視線を何度か動かした。
沙龍が歩いてきたのは、交差路の北側である。その先には秦帝のプライベート・エリアしかない。
「……まさかとは思うが」
「な、なに？」
沙龍はきょとんとしているが、景春には思い当たることがあった。
大将の失踪で西方軍と南方軍の本部がごった返している真っ最中である。それを朝一で上奏したはずの九雷も午前中に姿を消してしまった。
景春は、軍部の一時的な責任者として、朝から火雲宮の敷地内を文字通り東奔西走していたのである。
せめて王霊君が帝都に居てくれればよかったのだが、そう都合よくはいかない。北方軍大将は常に北の任地に駐在しているのである。
「時間があれば、一緒に来てくれ。いや、時間がなくてもだ！」
今度は、沙龍ではなく、九雷に恨まれることになるかもしれない――と、景春は思ったが、それが秦帝の意向なら仕方がない。

西方軍大将代理を頼もうと思っていた西海龍王までもが行方不明なのである。
この事態に、碧霞元君が火雲宮にやって来たりしたら、大変なことになるではないか――。

10　大将代理の資格

沙龍は重たい髪飾りが外れないように背筋を伸ばし、小走りに景春に着いていった。

決して、無理矢理連れて行かれている、という図ではない。

「ちょっと待ってよ。陽輝がフラッとどこかに行っちゃうなんていつものことだし、敖丁の研究室引き篭もりだってそうでしょ？　なんで、そんな切羽詰まる必要があるの？」

「いつもとは違うから、こういう事態になってるんだ。察しろ！　いまは、西方軍を動かせるようにする方が先だ！」

察しろと言われても、沙龍に分かるはずはない。

軍を動かす？　一体、どこに敵が？　さらに、それは、景春ほどの軍大将が慌てなければならないほどの敵なのか？　見当がつかない。

敖明一人に四方軍を総動員させる必要はないはずだし、陽輝の捜索にしては大

袈裟すぎるではないか。
（は、腹がぐるじい……っ）
それでも、沙龍は歩調を緩めず、景春に食い下がった。
「なんで、西方軍だけ動かせないの？」
「そういう事情があるんだ。いま、あそこには『大将代理』が居ない」
「……？　それで、誰に代理を？」
「お前に決まってるだろう！」
「は、はい……？」
思わず立ち止まった。
そろそろこの重たい衣装で走るのが限界だったというのもあるが、目の前に見えてきた黒い楼門に、景春も歩調を緩めたからだ。
ここから先が軍事エリアである。
入り口には厳重な警備が敷かれていたが、景春と一緒だったので、咎められることはなかった。
「行くぞ」

「……」
相変わらずなんの説明もしない、無愛想極まりない男だ、と沙龍は思うのだが、ここまで着いてきてしまった以上、従うしかない。
立派な楼門をくぐると、目の前には戦車が三台くらい並んで行進できそうな大通りがのびており、その通りの右側には沙龍も一度行ったことのある東方軍の本部建物があった。反り返った青い屋根は伝統と格式を感じる。
景春は東方軍の本部へ向かうのかと思いきや、通りの左側、白っぽい鉄筋が剥き出しの建物の方に向かった。
なにやら、周囲が騒がしい。
「西方軍の本部だ。この先に恐らく敖明の息のかかった刑吏の連中が待ち構えている。残念ながら時間はない。部屋に辿り着くまでに腹を決めてもらう。いいな？」
「ご、五分くらい？」
「一分だ」
言い切る景春は、怖いほど鋭い目をしている。

が、これに気圧される沙龍ではない。
（一分で進退を決めろって……!?　相変わらず無茶を言う！）
建物の中は慌しい空気と緊張感に満ちていた。東方軍の本部とは全く様相が違う。内装は野戦病院といってもおかしくないほどで、切れた蛍光灯や、漆喰の剥がれた壁があちこちに見えた。
「連中は来たか？」
景春が声を張り上げると、濃紺の軍服が数人、頷いたり、返事をしたりした。
そのまま、大将の居るべき奥の部屋に向かう。ドアは開け放たれていた。
執務室には数人の男が居る。
「あ、景春大将――」
接客中だった祥倫（しょうりん）が、途方に暮れたような、ホッとしたような顔を向ける。
由基（ゆうき）は中腰で書類を読んでいた。
二人の西方軍大将副官の対面には、スーツ姿の男が二人居る。景春の言っていた『刑吏の連中』だろう。
「あとは俺が引き受ける。お前たちは引き続き、陽輝の捜索に当たってくれ」

景春の言い方は、部下に対するそれである。
天界四方軍はそれぞれ独立した部隊であり、東方軍大将たる景春が、西方軍の士官たちにこういう物言いで接することは普通はありえない。
刑吏府の二人も、だからなのか、不審な表情を見せた。
「はい、よろしくお願いします」
答えながら、祥倫はあまりにも場にそぐわない沙龍の姿に目を留めた。
景春が連れてきたということは、この難局に対しての打開策のひとつだろうが、果たしてなにが始まるのか、祥倫にはまるで分からない。
が、由基の方は敏く気付いていた。鈍感な同僚に、大丈夫だ、と頷いてみせる。
「西方軍大将についてはこちらでも鋭意捜索中です」
刑吏の役人が、面白くなさそうに口を挟んだ。
造反容疑のかけられた将官を追及するのは自分たちの役目だ、と言いたいのだろう。
「現在、西方軍大将の権限は凍結、代理も適任者なしということで、一時的に西

方軍は我々が預かるということでよろしいですか？」
その確認と、本部明け渡しのためにやって来たのである。
勿論、そんなことにでもなれば、西方軍の士官達は反発するだろうし、最悪の場合、官吏を力づくで追い返すことにもなりかねない。荒っぽい者たちが集まっているのである。そのために本部建物全体が殺気めいていた。
しかし、
「それが困るから『代理』を連れてきたんだ」
景春は冷静だった。
敖明の思う壺にはさせない。
大将だけでなく、西方軍という一個大隊を凍結されるのはなんとしても避けなければならない。
「東方軍大将たる貴方が兼任なさろうとでも？　それは規則で許されておりませんが？」
嘲笑気味の官吏に、景春は負けじと鼻を鳴らして言ってやった。
「俺は、こんな飲んだくれの連中が集まっている隊を率いるのはご免だ」

「では、どなたが？　畏れながら、平時における『大将代理』の資格は限られております」
「そうだ。規則では――」
と、景春は指を立てながら列挙した。
「四海龍王、または大将以上の将官経験者、もしくは現役の四方将神及びその長官、となっている。そうだな？」
「御意」
したり、と景春は頷き、
「沙龍、お前のそのへんてこな髪飾りを寄越せ」
景春に言われて、沙龍は素直に大拉翅を外した。
急に頭が軽くなる。
やっとこの重たさから解放された、と思ったが、本当の重圧はここからである。
奇妙な形の髪飾りを景春に渡すと、彼はしばらくひっくり返したりしながら眺めていたが、一旦、それを目の前の机に置いた。

そして、にわかに小型のサバイバルナイフを取り出すと、黒いベルベットのような布地を引き裂いたのだ。
「……!?」
沙龍も、祥倫と由基も、その乱暴な行為を咎めるようなことはしない。
彼がなんの理由もなくこんなことをする人物ではないと知っているからだ。
「やはりな――」
景春は奇妙なことに笑っていた。
華美な髪飾りの中に隠されていたのはＢ５サイズほどの額縁に見える。それほど仰々しいものではない。額縁自体は、中の紙片を保護するためだけのものだろう。
この額縁のせいでかなりの重量になっていたのだ。
「……？」
沙龍が近寄って見ると、いかめしい書体の文字が見えた。
上品な透かしの入った紙にそれらの文字は整然と並んでいる。
『右ノ者ヲ四神府長官ニ任命ス』

と――。
沙龍は絶句した。
右側には自分の名前、そして、左側には秦帝の花押と今日の日付が入っている。
「あー、とうとう……」
苦笑まじりに小さく漏らしたのは由基である。
「ちょっと……、待ってよ……。これ、辞令書？」
「それ以外のなんだっていうんだ。お前はこれを陛下から直々に賜ったんだろう？」
「って、詐欺じゃん!?　知ってたら受け取らなかったよ！」
「だから、こういう小細工をしたんだろうよ」
「……」
二の句が告げない。
秦帝は一体どういうつもりなのか。
沙龍の特権を無視して、強引に将神職に就ける気なのか。

しかし、
「お前はこれを拒否できる権利を持っている。『四大保障』は口約束じゃない。ちゃんと各府に通達されているんだ」
景春はこの事態を正確に理解している。
その上で、なるべく中立の立場を取ろうともしていた。決して「ああしろ、こうしろ」とは言っていない。
「つまり、気付かなかったことにしてもいいってこと？」
「そういうことだ」
スーツの男二人は、顔を見合わせている。
祥倫と由基は得心顔だ。
沙龍は、というと、開いた口が塞がらない。どこをどうしたらそうなるのか。
将神になって、さらに、西方軍の『大将代理』をやれ、だと――？
「あとは、お前の返答次第だ。どうする？　沙龍」
「……」
沙龍が将神職を拒否し続けてきたのには、非常に個人的な、信念とも言える理

由がある。
景春はそれを知っているはずだ。
にも関わらず、自分にその選択を迫る景春は、どういうつもりなのだろう。
「お前は、以前、奏欽殿を助けるためならどんな毒だろうが呑んでやる、と言ったな？　今回は、誰のためでもない。お前自身の危機を救うため、だ」
「私の『危機』……？」
沙龍は混乱している。
四方軍の一つが動けなくなって困るのは、九雷や景春、そして、ここに居る副官たちではないのか？
と、そのとき、景春が戸口の人影に気付いて反射的に姿勢を正した。
その長身の男は軍装が誰よりも似合っていた。少なくとも、沙龍はそう思っている。
そうだ。
天界軍の総責任者は九雷ではないか――、と、沙龍は単純なことに気付いた。
「元帥、お戻りで……」

戸口に近付く景春に、ハッとして沙龍は叫んだ。
「待って、景春さん、それ、偽者――!!」

11　セカンドアプローチ

その瞬間なにが起こったのか、沙龍にはよく分からなかった。
景春も同じである。しかし、この二人は身構えた分、体ごと吹き飛ばされずに済んだ。
祥倫と由基、それに刑吏府の二人は部屋の隅に激突して、気絶している。
執務室は超大型台風が吹き抜けた後のような惨状になっていた。
安物のソファがそっくり返り、机などはどこに行ったのか分からない。窓ガラスは全てなくなっているし、壁の鉄骨は一部が露出して折れ曲がっている。
「よく分かったな。さすが黄龍の保持者」
九雷と同じ声のトーンで、その男は言った。
独特の『間』を持った話し方である。
一体どこが違うというのだろう。仕草も、姿勢も、雰囲気も、全て、本人としか思えないのに。

沙龍は、もう一度、改めてその偽者の全身を見ようとしたが、腰の抜けた状態で、しかも、いまは碧霞元君の青い袴が視界の左半分を邪魔している。
隣でやはり右半分の視界を邪魔されているであろう景春も、呆然としていた。
なぜ偽者だと分かったのか、沙龍には分からない。
ただ違和感を感じた、としか言えないのだ。
（黄龍の保持者だから分かったんじゃない。最愛の恋人だから分かったんだよ！）
と、言ってもいいのだが口が動かない。体全体が凍ってしまったかのようだ。
空気中を、塵が静かに舞っているのが見える。
あのとき、景春が半歩動いた瞬間、風圧のような電圧のような、なんとも表現のしがたい恐ろしい奔流が起きた。
その直後、部屋が全壊する前に、突如として沙龍と景春の前に立ちはだかった碧霞元君は、扇子の一振りでその力を相殺した。
「早々と出たね、亡霊」
碧霞元君はいつもの無表情である。

不敵な笑みもなければ、戦意のひと欠けらも見当たらない。
そのせいか、碧霞元君がどういうポジションでここに居るのか、沙龍にはまるで分からなかった。
言ってみれば奇妙な光景である。
部屋の惨状にしても、間違いなく九雷の姿をした男がやったはずだが、彼の方にも実は殺意めいたものが一切ない。
「……」
沙龍は、改めてこの両者を観察してみた。
九雷の偽者を大きな瞳で睨む碧霞元君は物怖じしない子供のようにも見える。
この強大な存在と力を前にして、普通は、壁まで弾き飛ばされるか、辛うじて踏みとどまったとしてもバランスを崩すか、どちらかである。修練を積んだ景春でさえなにもできなかったのだ。
では、碧霞元君が景春以上の過酷な修行を積んできたのか、と言えば、それは違う。
碧霞元君が持っているのは天賦の力と、それに対する自信だけである。

彼女は、あの奔流を文字通り消してしまった。
力と力がぶつかり合うとき、自然界の法則では、その二つの力は消えはしない。
火を消す水の力であっても、それは、蒸気として周囲に拡散される。
碧霞元君にはなにか反則的な能力があるのかもしれない。敖丁が東極山で嵐を消滅させたのと同じような――。
「亡霊？　……そうか。確かに、亡霊みたいなものだな。だが、心配するな。俺は誰かの命を取りにきたわけではない」
「じゃあ、なにしに来たの」
碧霞元君は、両手に扇子を持ったままである。警戒態勢は解いていない。
「さあ……。様子を見にきただけ、と言っておこう」
「……？」
「しかし、この俺に、一番最初に立ちふさがるのがお前だとは思わなかったぞ、碧霞元君」
「そのわざとらしい借り物の喋り方はやめてくれない？　貴方は本来、そういう

存在じゃないはずだよ」
『内と外』があまりに違いすぎる。
これは、普通の存在ではない。
つまり、肉体と魂魄が一致していないのだ。
「フム……。四行マイスターには苦痛か」
「なぜ私のことを知ってるの？　私は、貴方が死んでから、はるか後に産まれたんだよ？　まさか『四海の至宝』としてチヤホヤされていたときの記憶もあるというの？」
「さあ。あるような、ないような……」
口の端だけ上げるこの嘲笑に似た笑い方は、九雷そのものである。
この不調和が碧霞元君の平衡感覚を奪うのだ。眩暈がする。
（盤古……？）
沙龍と景春は、やっとその名前に思い当たった。
『天地開闢』を成した始祖の一人。
それが、この男なのか。

なぜ九雷の姿をしているのかは分からない。
「一応、三回くらいは言うつもりだけど、その喋り方をやめて。これで二回目ね。自分でやってて気持ち悪くないの？　私はもうかなり気持ち悪くて吐きそう。今朝はハムエッグと味噌汁の朝食だったから、相当スゴイものが出てきちゃうけど、いいの？」
「……」
目を見開いた男は、しばらくなにかを考えているようだった。
ごく素直な反応に見える。
固唾を呑むくらいしかできることのない沙龍と景春は、碧霞元君に全てを任せるしかない。
「しかし、本来の喋り方など、もう忘れてしまった……いや、待てよ？」
九雷の姿をした男が、ふと、九雷らしからぬ仕草をする。
分かりやすいくらいに眉間に皺を寄せ、わざとらしいくらいに額に指を当て、口も思いっきりへの字にしたまま、唸るようにぶつぶつ言い出したのだ。
「あ、そういえば、確か、二十億年ぐらい前に、龍王と長々話し込んだのが最期

だったっけ？　あれ？　違ったかな？　伏羲とかも居たような……？　そうだ、思い出した！　いや、あのときさー、僕ねぇ、反対したのよ」

いきなり人格が入れ替わったかのような喋り方だ。

背後の沙龍と景春は、今度は別の意味で絶句している。

この変わり身はなんだろう。

碧霞元君の平衡感覚は治ったようだが、今度は沙龍が激しい拒否感を募らせた。

（なんか……、すんごいイヤ……。元帥の姿で、声で、この喋り方!?）

百年の恋も一気に冷めるというものだ。

「反対したって、なにを？」

碧霞元君はどこまでも冷静である。

この無表情が少し頼もしい。

「人種が違うと共存できないって、住み分けしないと争いが起きるって最初の龍王が言うもんだからさ、そんなことないよ、きっとみんな仲良くできるよ、って言ったんだけど、それは綺麗事だって言われちゃってー。そんなつもりで天地を

分けたわけじゃないのにね」
もし九雷本人がこの状況を見たら、あまりの格好の悪さと恥ずかしさで一週間は寝込むのではないかと思われる。
これでは、軽いだけの中年サラリーマンである。
「そうそう。それで思い出したけど、ここに来たのは『黄龍の保持者』を見に来たのね」
「……甲斐馨を？　なぜ？」
碧霞元君が半分振り返って沙龍を見たが、注意は目の前の男から決して離していない。
扇子はずっと開いたまま手にしている。
なにかあれば即対応できる、という姿勢だ。
「好奇心っていうか、責任感っていうか。この子は成功例でしょ？　仲良き事は美しき哉。天に星、地に花、人に愛――ってね」
「……なにそれ。さっきの攻撃的な氣を放った人の言葉とは思えないね」
「あー、あれは、ちょっとコントロールできなくって。保持者を見つけた！　っ

てコーフンしたらああなっちゃった。ごめんね。なにせ久しぶりの実体だから、息を吸ったり吐いたりするのってどうやるんだったっけ？　ってレベルなのよー。他意はないからさ。そんな感じで、ＯＫ？」

もう、これ以上、こんな九雷の姿は見たくない、と沙龍は思った。

自分が話題になっていることは知ったことではない。

「景春さん……」

呻くように言った沙龍は、心なしかフルフルと震えている。

寒いからではないし、怯えているわけでもない。

口も動くし、やっと体が動けるようになったのだが、もはやそんなことはどうでもよかった。

「……？」

「それ、貸して……」

沙龍が言っているのは、景春が常に持っている大刀のことだ。いまは傍らに転がっている。

王霊君が持っている巨大特注軍刀よりは二回りほど小さいが、それでも素人が

使えるようなものではない。
さらに、自分の手足に等しい愛刀を、他人に触らせることに抵抗はあるはずだが、沙龍の鬼気迫る様子に、景春は言う通りにした。
「手順を踏まないと鞘は外せないぞ」
この大刀は、日本のサムライのように帯刀したまま抜くようには出来ていない。
景春が常に左手で持ち歩いているのは、右手で抜くときに、鞘を左手でも同時に引くためである。でなければ抜けない長さなのだ。
沙龍も何度かその抜刀術に近い技を見たことがあるのだが、景春の言う『手順』は、親指をずらしてなにかをする、ということくらいしか分かっていない。
「うん、いいの。鞘のままで――！」
ガシッと掴んでから、鞘ごと盤古の後頭部に振り下ろすまでが〇・三秒。
さすがだ、と、景春は思った。
あの重たい刀を、無駄な動きもなく、軽々と振り回せる女性は、沙龍以外には居ないだろう。

「寝てろ！　この偽者がああああッ！」
ゴッ……
重く鈍い音がした。
打ち所が悪ければ即死である。
が、一応手加減はしたつもりだ。
「あ、それ、九雷元帥の体……」
と、碧霞元君が言うまで、沙龍はその可能性を考えていなかった。
「え……？」
時、既に遅し。
気絶して横たわる長身の体。
「え……？」
碧霞元君と景春の気の毒そうな視線を受けて、沙龍は青くなっていた。
あたふたと右往左往するだけの沙龍は放っておいて、上官の体を介抱したのは

景春だし、その体に『相剋フィールド』を施したのは碧霞元君である。
目が覚めれば、またあの軽い中年サラリーマンのような盤古になるだけかもしれないので、そのための処置だが、果たして偉大なる始祖に『相剋フィールド』が通用するのかどうかは分からない。
「これは本当に元帥の体なのか？」
片膝をついた景春は、傍らの碧霞元君を見上げるように聞いた。
「そうだよ。やっぱり、同じ血を持った人でないと入り込めないみたいだね」
「盤古の血、か……」
碧霞元君は、改めて周囲を見渡した。
半分崩れた窓は既に窓というよりは廃墟のドアのようになっている。そこに、ひょっこり姿を現したホークス君はその背に意外なものを乗せていた。小龍である。
「お嬢、連れてきやしたぜ」
「ありがとう。間に合わなかったけどね」
嫌味で言っているわけではないのだが、ホークス君は恐縮していた。

「小龍……？」
熊のようにのし歩いていただけの沙龍は、ホークス君の背の上にチョコンと乗っている小龍を見つけると、窓辺に近寄った。
「キュワ〜？」
無理矢理連れてこられた、というわけではないだろう。逃げようと思えば、いくらでも飛んで逃げられたはずである。
小龍は心細げな鳴き声をあげて沙龍の胸に飛んでくると、小さな龍は主人の顔を見上げ、さらに、横たわっている九雷を見て、何度かそれを繰り返した。
「私もなにがなんだか分からないんだよ」
と、小龍に言って、チラッと碧霞元君を見る。知っていることは全部説明してくれ、という視線だ。
しかし、碧霞元君は、ホークス君に小龍を連れてこさせた理由も、なぜ九雷の肉体に盤古が宿っているのかも、なにひとつ説明せずに、自分がここに居る目的だけを告げた。
「さて、甲斐馨。これを聞くのは、二回目になると思うけど、生まれ変わってよ

かった？」
「……」
苛立ちの沈黙である。
碧霞元君のこの問いに対して、沙龍は最初、無視したのである。
なのに、しつこく聞いてくるということは、よっぽどのつわものといえる。
「そんなこと考えたことはないし、これからも考えるつもりはないよ」
「そう。じゃ、聞き方を変えようか。運命を恨んだことはある？」
「運命……？」
「そう。神獣の保持者として生まれてしまったこと。それを呪ったり、放棄したくなったことは？」
「……」
同じ目線にある碧霞元君の大きな瞳を、じっと見つめた。
これは狂人の目ではない。瑠璃色の瞳には、なにか超然とした自信とエネルギーがある。
十四、五歳の少女にしか見えない姿はやはりまやかしか、と沙龍は思った。

「確かに『黄龍の保持者』であることはハードだと思うよ。でも、私にとってそれは、手が二本あって、足が二本あるのと同じくらいのことだから、恨むどころか、なくなると困る」
いまする話なのか？　という苛立ちをにじませながらも、なんとかそれだけ言った。
「……」
瑠璃色の瞳は動かない。
が、小さく開いた口からは溜息に似たものが漏れた。
景春は、二人の応酬をただ見守っている。
「ひとつ、貴女の前世の話をしようか」
碧霞元君は少しためらったのだが、言葉にしてしまった以上、覚悟を決めた。
「緑麗の話なら、あまり聞く気はないけど」
「ううん。いまから三代くらい前の、悲劇のお姫様の話――」
「……？」
「名前はルーシア・フォン・クリストフ。中世東欧の小さな国に生まれて、十八

歳で若死にしたお姫様。もしかしたら、貴女も覚えているかもしれない」
「……」
確かに、その名は聞いたことがある。
が、ルーシア・フォン・クリストフとして生きていた頃の記憶があるわけではない。
沙龍にその名を最初に告げたのは、東京の名も無い占い師だった。その後、木佐の父親からも聞いた気がする。
それからはずっと忘れていたのだが、二年前に西方世界と一悶着あったときに、ルシファーから改めて聞かされた。
「彼女には幼い頃から予知能力があった。少し先の未来が見えるという。例えば、天候、戦争の勝敗、人の別離……。そういったものが、ふとした拍子に見えてしまう」
碧霞元君は語り部のように話し出した。
「両親は、娘の妙な能力にいち早く気付いて、なるべく人目に触れさせずに育てた。もとより、この子には『二十歳まで生きられない』という二重の制約があっ

てね。
一つは、玉帝の掛けた『呪』によるもの。
もう一つは、それにかこつけて、賢しい悪魔が彼女の特殊な能力を横取りしようとして交わした『契約』のせい」
「私の知ってる話と同じ……」
沙龍は、それをルシファー本人から聞いたし、その契約書を見せてもらったこともある。
しかし、なぜ碧霞元君がそんなことを知っているのだろう。
「群雄割拠の時代だからね。ルーシア・フォン・クリストフの能力は、時の為政者たちには非常に便利だったはずなんだけど、両親は娘を政治の道具にしたくなかったから、城の奥でひっそり育てたんだよ。
しかし、どっちみち、彼女には遅かれ早かれ死ぬ運命しかなかった。その最期も、ご丁寧に『悲劇的な死に方』とセッティングされていた。
『悲劇的な死に方』って、どういうのだと思う？　玉帝は具体的なシナリオを決めていたわけじゃない。緑麗に掛けられたその『呪』は、生まれ変わるごとに

内容を考えて、実行するお役人がちゃんと居たんだよ。
ルーシア・フォン・クリストフのケースでは、彼女の心のよりどころでもあった婚約者を使うことにした。実行役のお役人が、陳腐な悲恋物語が好きだったんじゃないかな。
彼女は、恋人の裏切りによって、その恋人の手にかけられて死んでしまったの。
小さな世界で育った少女にとっては、その裏切りが衝撃すぎて、しばらく、自分がなぜ死んだのか理解できないで冥府を彷徨っていた。
私が見つけたときは、魂魄状態なのにそのまま消えてなくなりそうなほど弱っていて、本当にこれが、あの緑麗の魂魄なのかって、思ったよ」
「……」
沙龍にとっては、遠い他人事である。
覚えてもいない前世の話など、御伽噺を聞く感覚だ。
「そういったひどい裏切りを経験した魂魄は、現世にとどまってしまうケースもあるんだけど、ルーシア・フォン・クリストフはいわゆる地縛霊にはならずに済

んだ。ただ、生まれ変わっても『彼』を愛せるかどうかは分からないと言っていた」
「……？　その恋人は、その人生限りの人じゃないの？」
「九雷元帥だよ」
「え……？」
「実行役だったお役人をそそのかし、自分がまんまとルーシア・フォン・クリストフの婚約者になりすまし、挙句の果てには彼女を裏切って殺したのは九雷元帥本人だよ」
「ど、どういうこと……？」
沙龍の心拍数が急激に跳ね上がった。この締め付けられる感じはかつて経験したことはない。
しかし、自分はひょっとして予想していたのではないだろうか。こんな衝撃的な話をいつか誰かから聞かされるかもしれない、ということを。
九雷という男は目的のためには手段を選ばないし、その目的が常に純粋であることも知っている。

だとすれば、過去にそんなシナリオがあったかもしれない、と予想することはできたはずだ。
心筋梗塞ってこんな感じだろうか――、と精一杯の思いで冗談を唱えてみても、効果はなかった。
「九雷元帥がどういうつもりで実行役を自ら買って出たのか、私は分からないけど、貴女には分かるんじゃない？」
「そんなの……、分かんないよ」
「そう？　ルーシア・フォン・クリストフのときだけ、彼が自ら人界に降りて、その人生に干渉したのは、なにか理由があったはずだよ」
「……」
ショックを受けている沙龍に景春がなにかを言いかけたが、結局、口を噤んだ。
碧霞元君がスッと視線を動かしたからかもしれない。
「まぁ、その理由はどうでもいいんだけど」
「……」

「それでも、貴女はまだあの人を信じて愛せる？　生まれ変わってよかった、と、いま、言える？」
「……」
言えるはずがない。
碧霞元君は、沙龍に『否』と言わせるために、ルーシア・フォン・クリストフの話をしたのだ。
「クゥ～？」
肩に乗っていた小龍が心配するように沙龍の頬をペタペタとなでた。
沙龍はそれを宥めようとしたのだが、力が入って、結果、振り払ってしまった小。
龍の小さな体は、ポイッと飛んでいき、景春の視界を右から左に突っ切るようにして、横たわる九雷の体の上に落っこちた。
「クワッ」
頭を二、三度振って、今度は九雷の顔を覗き込む小龍だったが、その瞳は閉じている。

小龍は、九雷を起こそうとして、色々やってみた。
尻尾で鼻のあたりをくすぐってみたり、ネクタイを引っ張ってみたり、と、奮闘する様は「主人が大変なんですよ、早く起きてください」と言っているようだ。
「君のそれは、忠誠なの？　畏怖なの？」
碧霞元君が言った言葉の意味は、沙龍にも景春にも分からなかった。
しかし、グッと頭を上げた小龍は、それが自分に向けられた言葉だと分かっているようだ。
「……」
小さな丸い目が、碧霞元君を恐る恐る見上げる。その瞳こそ、畏怖に見えた。
「かつて混沌と呼ばれた存在――。君は盤古の血を畏れて恭順しているだけ？」
「混、沌……？」
沙龍にはもうなにがなんだか分からなくなっていた。

「『天地開闢』は、地球が誕生した四十六億年前に実際に起こった出来事だ。その時点で最初の『地球産生命』はまだ歴史に登場していないんだよ」
木佐小次郎はきびきびとした足取りで、半歩後ろの赤帝君に対し、片手を自由に動かしてみせる。美しい所作だ。
「地殻が形成されて、その数億年後に、やっとバクテリアが誕生するんだ。僕の知っている先史ではね」
こういった学者のような、もしくは、抜け目のないビジネスマンのような手振り身振りはどこで覚えたのだろう。それは木佐本人もよく分かっていない。
人前に立つことは嫌いだし、人と議論することもどちらかと言えば避けているのに、いざこういう場面になると、木佐小次郎は見た目の華もあって、非常に外交向きである。
「分かるかい？　つまり――」

「つまり、始祖たちは、地球産の生命ではない、と言いたいのか」
赤帝君が木佐の言葉を受け取って言った。
緋色の袖がせわしくなく揺れている。
白帝君は二人の後ろからゆっくりついてきていた。朱雀門前の売店で買ったピロシキがまだ熱くて、それに気を取られている。
「その通り。盤古真人は最初から完全な『生命体』だった。では、なぜそんな存在が、最初の生命すら誕生していない惑星に居たんだ？　どこか外部から来たと考える方が自然だろう？」
木佐が話しているのは『冥王代』と云われている時代のことだ。
この時代に『天地開闢』が成された、と云われている。
それが盤古という神による所業なのか、それとも自然の力によるものかは、ここで論じるべきではないと木佐は思っている。
木佐は、黒帝玄武佑君としては、前者を前提にしているが、木佐小次郎として人界に戻れば、後者の立場をとるだろう。そのフレキシブルさが、木佐小次郎の強みでもあるのだ。

「その外来者達が『混沌』を制して『天地開闢』を成した。問題なのはこの『混沌』の方だ」
「どう問題だと？」
赤帝君も白帝君も、盤古と混沌の話は子供の頃から知っているし、それ故、『歴史』に疑問を持つことはない。
しかし、木佐はずっと人界で人間として生きてきたのである。赤帝君たちにはない視点を持っている。
「始祖たちの残した文献と口伝によれば、『混沌』は外来者ではない。最初からこの惑星に居た存在だ。しかし、完全な生命体ではない。地球産の生命体はさっきも言ったように、この時点ではまだ登場していないからね」
三人の目の前に楼門が見えてきた。
制式の自動小銃を持った衛兵が数名立っている。
物々しい警備だが、ここは顔パスで通してもらえるはずである。
元々、四方将神には役職がら様々な特権が与えられているし、四神府もこの楼門の外にあるとはいえ『天界軍預かり』になっている。

今日は三人とも四神府の制服を着ているので、万が一にも呼び止められるようなことはないだろう。この赤墨の制服を着ることができる者は天界広しといえどたった五人しか居ない。四方将神と将神だけである。現在は、将神は空位で、青帝青龍は居ないことになっているので、実質はこの三人――木佐、赤帝君、白帝君――だけだった。

楼門の先に見える大通りの右側には、鮮やかな紺色の屋根を持つ、伝統的な平屋の建物が並んでいた。その一帯が全て東方軍の敷地になる。左側には西方軍の鉄筋の近代的な建物が並んでいた。

大通りを進んだ先の突き当たりには北方軍の本部建物があるが、ここは、ややこじんまりしている。

さらに、南方軍の本部は脇に追いやられるように西北のエリアにあって、その一帯はおおよそ軍事施設の外観をしていない。

「生命体でなければなんだというんだ？」

「龍だよ、赤帝君」

まっすぐに左側の鉄筋の建物に向かう木佐小次郎は、そこでいまなにが起きて

いるのかをだいたい理解している。
「……？」
「まぁ、僕の推測だけどね。この話の続きはまた今度にしよう。いまは目の前のトラブルを解決する方が先だ」
正面入口の前に三段ほどの幅の広い階段がある。
そこに一歩足をかけたとき、同じく小走りに駆けて来た人影が、木佐の右側にあった。
「天真大夫？」
声を掛けたのは赤帝君だった。
天真は、目立つ制服を着た四方将神達にも気付いていない様子だ。かなり慌てている。
「あ、ああ、お揃いで……」
視線だけを動かして、天真は建物に入っていった。往診道具はなにも持っていないが、医者が青い顔をして急いでいる、ということはただならぬ事態である。
二人は天真を追いかけるように歩調をあげた。

白帝君だけはやはり少し遅れてついていった。ピロシキはまだ湯気を出している。

「急遽、知り合いに呼び出されましてね」

廊下の奥の執務室に辿り着くまでに、天真は簡単に説明した。

知り合いというのは碧霞元君のことだろう、と木佐は思った。

「事情はよく分からないんですが、最悪の事態が起こってしまったようで……。盤古真人が、伝説通りのヤンチャ坊主でないことを祈るしかないですね」

東方天界で育った者なら誰でも知っている『天地開闢』の話の中では、盤古は圧倒的な力で混沌を下し、両手で天を持ち上げ、両足で大地を踏みしめたという。

その際に盤古が暴れた跡が海溝となり、山脈になったというのだから、彼は相当の巨人であったか、伸縮自在の姿を持っていたということになる。

「僕たちは九雷元帥の依頼を受けて来ました。目的は同じでしょう」

「え？　九雷の？　しかし――」

碧霞元君は、現在、その九雷が盤古の依り代となっている、と言っていた。

そうなる直前に木佐にＳＯＳを出したのだろうか。
天真があれこれ考える前に、彼らは現場に到着した。部屋の惨状に目を見張る。
どうしたらこんな風に、壁がそっくりなくなるような事態になるのだろう、と木佐はまず思った。
以前、東京で暮らしていた頃、沙龍がカレーを作ろうとしただけで、台所が半分なくなったことがあった。性質はまるっきり違うだろうが、そのカレー事件に似た展開があったのではないか、と勘ぐりたくなる。
「あ、天真くん」
ひっくり返ったソファに寄りかかるようにして立っていた碧霞元君が、大きな丸い目を見開いた。
「まさか来てくれるとは思わなかったよ、ありがとう」
「また、心にもないことを……」
零しつつ、天真は自分の仕事をすぐ理解したので、部屋の中央に横たわる九雷のそばに膝をついた。

そこには、珍しい顔もあった。魁星である。
（なぜ近衛の隊長が……？）
という、天真の表情を読んだのだろう。
魁星は皇族に対する礼を取って、謙るように説明した。
「僕のクライアントは緑麗ちゃんです」
「……？」
と顔を上げた天真に、沙龍が頷いて見せる。
魁星さんなら、盤古真人の意識をこの体の中に封じて、元帥を眠らせたままにすることができるんじゃない？　――というのが、沙龍が魁星を呼びつけた理由であり、事実、その通りになっていた。
天真は眠っている九雷は命に別状がないことが分かったので、部屋の隅で気絶している四人の男を診ることにした。血を流している者が一人居る。内臓をやられていなければいいのだが、と天真は思った。
「あらま、どしたの、これ」
白帝君がもぐもぐと口を動かしながらやっと到着した。

広い執務室だった部屋には、数人の男女が居るが、立っている者と寝ている者の割合は半々くらいである。
なにが起こったのか、この部屋の惨状を見れば大体分かるが、沙龍がまとっている緊張感と怒気の理由は後から来た者には分かるはずもない。
原因は碧霞元君である。
九雷の株を落とすような昔話を聞かせ、沙龍の動揺を誘った碧霞元君は、さらに物騒なことを言ったのだ。
「盤古を倒すチャンスはいましかないよ」――と。
彼の意識が再び目覚めてしまったら、今度こそ、伝説通りの巨人になってしまうかもしれない。
たとえ盤古が善神だろうと、偉大なる始祖だろうと、『天地を開く力』など脅威でしかないのだ。
「そんな厄介なヤツを生かしておく？」
碧霞元君はそうも言った。
普段の沙龍なら「そんなの私の知ったこっちゃない」と言い捨てて、水雲宮に

帰っただろう。しかし、いま目の前にある事態はそんなに簡単なものではない。
二人の少女を交互に見ていた景春は、沙龍がここまで凹まされ、押されているのを初めて見た気がする。
沙龍は碧霞元君に反論できず、ずっと黙ったままだ。
表層では怒った顔を見せているが、それは沙龍の精神がそうさせているだけで、もし普通の女の子であれば、素直に落ち込んでいる場面だろう。
「なんでこういう展開になってんのか、私にはちっとも分からないよ」
沙龍が口を開いた。
「陽輝はどこに行ったの？　職務放棄して一体なにしてんの？」
この怒りを向けるべき人物の名前を思い出した。
そもそも陽輝がちゃんと職務を遂行していれば、自分が将神に任命される必要も、西方軍大将代理になる必要もなかったはずだ。
「クゥー……」
小龍がふわふわと飛んできて、沙龍をなだめるように頭上を旋回するが、いまは逆効果かもしれない。

沙龍は鬱陶しそうに首を振って、
「お前は水雲宮に戻っていたほうがいいよ。ここに居たらわけのわからない存在にされちゃう」
そう言ったのは、先程の碧霞元君の意味不明な言葉を受けている。
『混沌』――と、碧霞元君は言っていた。
沙龍は勿論そんな話は信じていない。
こんな小さな幼龍が、何十億年も前に盤古と雌雄を決した存在だというのか。
事実だとしても、ホラ話だとしても、いまはそんなことに関わっている暇はなかった。
しかし、
「馨、その小さな龍はそばに置いておいた方がいいよ」
木佐が妙なことを言い出す。
「キサさんまで、どうしたの……？」
沙龍の瞳が鈍く底光りをしている。
木佐が『上海モード』と呼んでいる姿である。

董天は躊躇するこのモードに、しかし木佐は怯むことはない。元々、沙龍を畏れてはいないのだ。
「いま考えなきゃいけないことは、陽輝大将を探し出して殴ることじゃないだろ？　盤古真人をどうにかすることだ。つまり、具体的には、速やかにお帰り頂くしかないわけだけど、そのためにはその小さな龍が必要なんだよ」
「なんで……？」
「『混沌』はこの惑星の核だからさ」
「……？」
沙龍は分からなかった。
が、赤帝君は理解した。さっき、木佐が言っていた話の続きである。
「生命体じゃない、というのはそういう意味か」
「どういう呼び方をするのかは、立つ位置や時代によっても変わる。この小さな龍は、全ての龍族の先祖であり、人によってはこの惑星の意識そのものにも思えるだろう。科学者なら、エネルギー体と呼ぶかもしれない」
「エネルギー？　つまり……、黄龍と同じような存在……？」

「そうだね。規模はだいぶ違うようだけど。緑麗さんに懐いていたのは、そういう理由だと思うよ」
沙龍は飲み込めていない。
碧霞元君が補足するように説明してくれた。
「この子は、大昔に生存競争に敗れて、この天地を明け渡したんだよ。だから、いま、『天』には、勝者である盤古の子孫達――つまり、私達――と、敗者である混沌の血を受け継ぐ龍族が居て、『地』には、自然発生した生命を起源とする人間が居るわけ」
「住み分けがどうのって話を……」
「うん。そんなこと言ってたね」
さきほど、九雷の口で、盤古が語っていた話である。
人種が違うと共存できないと言ったのは一番最初の龍王だという。
その『最初の龍王』の子供達四人が東西南北に分かれて、それぞれ『初代東海龍王』以下になったのだ。そこには長い長い歴史がある。
「でも……、この子がどんな役目を負っていようと、私のすべきことに変わりは

ないはず……」
沙龍の渦を巻いたような感情が、この場をひどく不安定にしている。
様子を見かねた天真がやって来て、ひっくり返っていた椅子の向きを直すと、そこに沙龍を座らせた。
「休憩しましょう？　貴女はだいぶ疲れてますよ？」
「ん、そだな。阿姐（アーチェ）、これ食うか？」
白帝君がピロシキの入った袋を沙龍に渡した。まだ三個くらい残っていて、袋も暖かいし、香ばしい匂いがする。
沙龍のお腹が「ぐう」と鳴った気がした。
お腹は食後以外は大体いつも空いている。食べたそばからカロリーが消費されてしまうのだ。沙龍の腹持ちは世界一悪いかもしれない。
「……」
大人しくなった沙龍を見て、景春は微笑んだ。なるほど、簡単で確実な手だ、と思う。
天真が流れを変えてくれたおかげで、景春も、この場の責任者として指示を出

す余裕もでてきた。
「天真大夫、魁星隊長。申し訳ないが、元帥の体を官邸に戻して、しばらく様子を見てもらえるだろうか。いま、彼の体に厄介な魂魄が入り込んでいることは、しばらく伏せておこうと思う」
「そうですね……」
答えたのは天真である。
魁星は頷いただけで、沙龍の方を見た。あくまでも、自分の依頼主は沙龍ということだろう。
その視線を受けて、沙龍もまた、魁星に「頼む」というニュアンスで頷いてみせた。
「ところで、官邸なんですか？　水雲宮ではなく？」
天真は確認するように聞いた。
たまに官邸に戻ることもあるとはいえ、九雷は基本的には水雲宮で暮らしているのだ。
だから『家』の方でなくていいのか、という問いである。

「さきほど、盤古は、黄龍の保持者の様子を見に来た、と言っていた。危害を加えるつもりはない、とも。それを信じていいかどうかは分からないが……。水雲宮に戻すのは危険な気がする。沙龍、お前はどう思う？」

珍しく、景春が沙龍の意見を聞いた。

「景春さんの指示に従うよ」

「……？」

木佐は、沙龍のこの反応が意外だった。

てっきり『官邸行き』は反対するかと思ったのに。

「クゥ～……」

小龍が沙龍を見上げて鳴く。

碧霞元君は、いつの間にかいなくなっていた。

同じ頃、距離はほとんど離れていない南方軍の敷地でも、重症のけが人が数名出ていた。

敖丁は瀕死である。
それを発見した朱子は泣きながら救急車を呼ぼうとしたのだが、敖丁本人に拒否された。かろうじて意識はあるようだ。
「この事故は公にしたくないんで、頼むよ」
なにかただならぬことが起こったのは理解した。
隣の研究室に詰めていた軍医を呼んで、応急処置を頼み、朱子は後始末に奔走した。こういったことを内々に処理するのは慣れているのだ。

13　四十八時間

西方軍大将の椅子にふんぞり返っている沙龍は、朝刊を読んでいた。
三十分ほどの仮眠から起きたばかりで、目の下の隈は三重になっている。
「祥倫、コーヒー」
そう言うと、〇・七秒で淹れたてのコーヒーが出てくる。
「ハッ、どうぞ」
インスタントではない。レギュラーコーヒーの芳醇な香りが立ち昇っている。
この瞬間技は見事であった。
普段、陽輝を追い回している姿しか見たことはなかったが、もしかしたら彼もスゴ腕の軍人なのかもしれない、と沙龍は思う。
いや、軍人にしておくには惜しい。ＩＴ企業の社長秘書でもやった方がよっぽどその腕を生かせそうだ。
「あんだけの騒ぎだったのに、どこにも記事になってないんだねぇ……」

社会面を斜め読みしながら、熱いコーヒーを啜る。少し目が覚めた。
西方軍の本部にあって沙龍は私服姿であるが、数日前までここに座っていた人物とて、普段はまともに軍服を着てないのだから、別に構わないだろう。
Tシャツにアーミーズボンという格好は、女性士官から借りたものであるが、それでもサイズがだいぶ大きかった。
赤い腕章がなければ『西方軍大将代理』には決して見えないだろうし、腕章があったところで沙龍の容姿ではせいぜい『一日駅長』くらいにしか見えない。
「軍施設内で起こった局所的な異常気象なんて、いちいち記事にはなりませんよ」
由基はいつもの自分の机でキーボードを叩いていたが、徹夜明けなので、その動作はやや緩慢である。
もう一人の副官、祥倫ともども、包帯こそ巻いていないが、昨日の全身打撲で体は軋んでいるはずである。骨折に至らなかったのはさすがというべきか、当然というべきか。
「そういうことになっているのか。まぁ、公にはできないよね。総司令官の体が

スーパー始祖に乗っ取られてます、なんてさ……」
いま、沙龍がこの部屋で一番いい椅子にふんぞり返っているのは、誰かに強制されたからではない。
自分の意思で、四十八時間、大将代理をやってやる、と啖呵を切ったのだ。
そうして、徹夜でなにをやっていたかというと、ごく初歩的なレクチャーを受けていたに過ぎない。
各部隊の配置状況、それぞれの隊への命令の出し方、通信機器の使い方、非常時の行動パターン――、などなど。
覚えなければならないことは山ほどある。が、全てをカバーする時間はないので、優先順位の高そうなものを祥倫が片っ端から抽出し、由基が説明するというやり方で一晩を過ごした。
三人とも徹夜である。否、この建物に居る全てのスタッフが全員徹夜だった。
執務室のなくなってしまった壁は、数名の士官たちが間に合わせに塞いでくれた。雨風はしのげる状態だ。
昨日、木佐は、職場が近いからまた様子を見に来る、と言って退散し、天真と

魁星は意識不明の九雷を官邸まで送り届けたはずである。
沙龍がここで徹夜したのは、九雷の側に居たくなかったからでもあった。
殴って気絶させたことへの後ろめたさではない。
碧霞元君から聞いた話が、相当引っ掛かっているのだ。
『ルーシア・フォン・クリストフの婚約者になりすまし、挙句の果てには彼女を裏切って殺したのは――、九雷元帥本人だよ』
それが嘘ではないという直感はあった。
真偽を疑うつもりはない。
問題なのは、九雷がそれをずっと黙っていたということ、そして、恐らく、誰にも告げず、独断でやったということだ。
つまり、沙龍が納得できるくらい合理的な――恋人を裏切って殺すことに合理的な理由があることがおかしいが――理由は決して出てこないはずである。
それを考えるのが嫌なのだ。
それくらいなら、将神でも、大将代理でもなんでもやってやる、と思った。
「陽輝より酷いぞ」

苦笑しながら執務室に入ってきたのは、景春だった。
沙龍は新聞から目を離さず、机の上に投げ出している足もそのままにして言った。
「おはようございます、同僚の景春大将。したくもない仕事を徹夜でやらされて、疲れて不機嫌でお腹もすいてますが、なにかご用でしょうか」
その言葉に嘘はない。沙龍の表情は明らかに疲労の色が見える。
景春が無言で机の上に置いた紙袋からいい匂いがしたので、沙龍はやっと新聞から目を離した。
濃紺の軍服を着ている景春は、紙袋を視線で示し、どうぞ、という顔をしている。
沙龍はなにも考えずに袋を開けた。
「いただきます」
紙袋の中身は予想通り、ソーセージマフィンである。通りのカフェで売っているものだ。オプションでシーザーサラダも入っていた。
ガツガツと朝食を頬張る沙龍に、景春は笑みを零す。

しかし、その笑みは祥倫から渡された紙束を前にすぐ消えた。
書類の一枚目は、九雷の容態を知らせてきた天真の報告書である。依然、意識不明ということだが、これは魁星の技によるものなので、心配は要らないようだ。
だが、もし再び目覚めてしまった場合、『どちら』の意識になるのか、ということは天真にも魁星にも分からないようだった。
「いくつか確認しておきたいことがあるんだけど。景春さん」
まだマフィンを頬張ったまま沙龍が言った。
「なんだ？」
「大将代理が必要なほど切羽詰まってるのは、昨日言ってたように、厄介な親子喧嘩のせいだってことでいいの？」
「そうだ。しかも二組な。その喧嘩を止めるために、四方軍全軍が出動を余儀なくされる」
「ズバリ、一番要注意なのは誰なの？」
「碧霞元君だろう」

景春の短い答えは予想通りであるが、ここでは意外だという顔をしておく。
「あのちっちゃい子？」
「ちっちゃいって……、同じサイズでよく言うな」
景春は笑っている。
からかっていると言ってもよさそうだ。
沙龍は当然ムッとしたが、表情に出すだけにした。
「でも、昨日、碧霞元君は私たちを助けてくれたよね……？」
「お前に死なれたら困るからだろう」
「……」
本当にそうだろうか、と沙龍は思う。
碧霞元君がそこまで自分を「生かそうとしている」実感が沙龍にはない。
それに、いくら彼女が五行術のエキスパートだとしても、物理的な攻撃力は無いに等しいのだ。
実践においては沙龍や景春の方がはるかに慣れているはずで、それは碧霞元君も分かっているだろう。

「いまいち読めないんだよなぁ……」
沙龍の素直な呟きである。
「お前、バカだったのか」
「高校の漢文のテストで満点以外とったことのない私に向かってバカだと？」
「あのなぁ……、それはイギリス人がフランスに行って、英語のテストで百点取るようなもんだろうが……」
行き交うピンポン玉を追う猫の視線のように、沙龍と景春の子供のような言い合いを見守っている祥倫と由基は、だいぶ呆れていたものの、この感じはなにかに似ている、と思い始めている。
他ならぬ自分たちの上官である陽輝と、南方軍大将敖丁の毒舌合戦である。
あれもいい加減はた迷惑な喧嘩だが、二人にとっては日常になっているので、なければないで寂しい。
「そういえば、南方軍はどうなってるんです……？」
由基が不意にそんな疑問を口にした。
この二十四時間の慌しさで忘れていたが、いまは陽輝と敖丁の二人ともが行方

不明なのである。
こちらには沙龍が居るが、南方軍の方は誰が代理を務めているのだろう。それを聞くと、景春が仏頂面のまま答えた。
「聞いて驚け、敖明だ」
「え……」
確かに驚いた。
なぜそんな離れ技ができるのだろう。
確かに、敖明には、昨日、景春が言っていた「四海龍王、または大将以上の将官経験者」という大将代理の資格はあり過ぎるほどある。
しかし、南方軍というものが、現在、敖丁の軍隊である限り、少なくとも戦闘集団としての南方軍は、敖丁と敵対している敖明には動かせないのではないか。
ラボの研究員達はまた別である。彼らは軍属ではあるが、戦闘要員ではない。
「だいたい『盤古真人』とやらはなんなの？　なんのためにそんなご大層な人を、一体、誰が復活させちゃったの？」
沙龍のとげとげしい疑問には景春が答えた。

「なんのためか、は分からん。情報が錯綜しているんでな。しかし、俺たちの仕事は真相を解明することじゃない。目の前の脅威を取り除くことだ。それは分かるな？」
「まぁ、昨日の今日だからね」
と、沙龍は巨大なガムテープでつなげられた壁を見る。
天界一の剣技を持つ景春と、無敵の黄龍を召喚できる沙龍を一瞬で無力化した盤古真人の力は、脅威とかそういうレベルではない。徹底的に反則な力だ。
地球を飲み込む太陽ほどの暴力に思える。
「ただ、誰が、という疑問については、俺はてっきり敖明だと思っていた。ついさっきまではな。いや……、正確に言えば、東極山でアレを奪われるまでは、だ」
敖明はシロである。
今朝も、敖明は堂々と南方軍大将代理として出仕していた。
「じゃあ、誰なの？」
「聞いて驚け、敖丁だ」

別に驚かないけど、という顔で、沙龍は紙コップに残っていたコーヒーを飲み干した。
副官二人は、驚いたのか驚いていないのか、黙々と仕事をしている。
「陽輝は……？」
ややあって、沙龍は聞いた。
「なぜか敖丁に協力している。事情は分からん」
「つまり、私は陽輝と敖丁をひっ捕らえる係なの？」
「そうだ」
「四十八時間以内に？」
大将代理権限があるのがその四十八時間である。
『将官代理』とはあくまでも非常時を想定しての代理なので、もともと、元帥位か天帝が次の大将を任命するまでの時間稼ぎという意味しかない。
が、景春はその四十八時間で事態を収拾するつもりなのだ。
九雷の意識が不明である以上、早くどうにかしなければならないという焦りはある。

敖明がどう動くか分からないし、一番要注意な碧霞元君が決起すれば、景春一人ではどうにもならないからだ。
「そうだ。四十八時間を越えると……」
秦帝は細工までして沙龍を官職に就かせようとしたくらいだから、むしろ『四十八時間越え』は歓迎だろう。
そのまま沙龍を新たに西方軍大将に任命する気かもしれない。
「晴れて西方軍大将、沙龍ちゃんのできあがり、か。まさか自分が軍属になるとは思ってもみなかったけど。今後ともよろしくね、同僚の景春大将」
ただの自棄気味の軽口である。
沙龍はサラリーを貰うつもりはないのだ。
景春は、沙龍の冗談など聞こえなかったように、
「もし俺が元帥なら、あの辞令はお前から奪ってでも陛下に返して、強引に今回のことはなかったことにするだろうがな」
「まぁ……、そうだろうね」
沙龍の軍属を一番反対するのは九雷だろう。それは、間違いない。

「『盤古真人』がどうにかなったとして、の話だが」
「まぁ……、そうだろうね」
頬杖をついて投げやりに答える沙龍はそろそろ景春に去って欲しい。
この男と一緒に居ると、ロクなことがないのだ。
「しかしな、沙龍。お前は考えたことはないのか？　お前が望むのは、過保護な恋人に護られた世界か？　俺は、違うような気がする」
「……」
言葉を失って、景春を見つめた。
なぜ、いま、そんなことを言うのだろう。
不可解すぎるその言動は、しかし、鋭い指摘でもあった。

14　副官たち

祥倫は、陽輝から預かっている辞表のことは黙っていようと決めている。

いま、この白い封書を「実は……」と、机の上に出してしまったら、陽輝は永遠にここには戻ってこれなくなる気がするからだ。

そんな事態は、祥倫も由基も望んでいない。沙龍が守っている場所は、自分たちも全力で守るつもりでいる。

昨日、あわや西方軍全軍が凍結というところで、景春と沙龍が動いてくれたのは天の助けにも思えた。景春にとっては仕事であり、沙龍にとっては成り行きなのだろうが、それでも、祥倫は涙が出るほど嬉しかった。

陽輝は、

「俺が居ない間、なにかあったら、お前ら二人の好きにしろ」

とだけ言っていた。

そのための辞表である。

つまり、実質的な『西方軍大将代理』は祥倫と由基であり、沙龍は法をかいくぐるためのお飾りに過ぎないのだ。
祥倫は周囲からは見えないのをいいことに、パソコンで別の作業をしている。
その画面には、仕事とは全く関係のない、ゲームのウィンドウが開いていた。
が、祥倫はゲームをしているわけではなく――実際にはそうとしか見えないが――、そのバーチャル空間ともいうべき世界にログインしている人物と『会話』しているのだ。
『詳しい経緯は省きますが、緑麗様が大将代理をしてくださっています。どうか四十八時間以内の帰還を願います』
小さなチャットウィンドウに文章を打ち込むと、ほぼ待機時間なしで返答があった。
『はぁ？　なんかの間違いじゃないのか？』
口語体がそのまま文章になっている。
相手はなんらかの変換アプリを使っているようだ。
『緑麗ってか、沙龍だろ？　あいつが大将代理？　なんの冗談だよ』

『ご本人もチョー不本意のご様子です。ですから、なるべく四十八時間以内にご帰還下さい。でないと緑麗様にぐーで殴られますよ』
その冗談のような忠告に対して沈黙があった。
画面上の全ての動きが止まっている。
向かいのパソコンで、このログを横目で確認しているであろう由基が口元だけで笑っていた。
『ぐー、か……。まぁ、沙龍を懐柔する方法は色々考えておいてくれ』
またか、と祥倫は思う。
細々した庶務が全て自分の仕事であるのは承知しているが『我侭お嬢を宥める方法』まで任されたのではたまったものではない。
『……御意』
『まぁ、四十八時間以内にはなんとかするわ。と、言いたいところなんだが、俺もちょっといま動ける状態じゃないんでな。いい機会だから、お前らでなんとかしてみてくれ。沙龍ならきっと――』
そこでぷっつりと通信が切れてしまったようで、以降はウンともスンとも言わ

なくなってしまった。
「……」
また指示があるまで様子を見るしかないのだが、陽輝が「動けない」と言っていたのが気になった。
景春の去った執務室で、沙龍はそのまま新聞を読んでいたが、視線はずっと虚ろに止まっている。
由基はパソコンの作業をしながらそれが気になっていた。
「……あの、緑麗大将代理」
「ん？」
「お気になさらずに」
さきほどの、景春の指摘のことを言っている。
二人の会話はかなりプライベートな部分にも入り込んでいたようなので、それに対して一介の将校が口を挟むのもどうかと思うが、言わずにはいられなかった。
「……」

沙龍は特になにも言わなかった。
景春の言葉に予想外の動揺をしてしまったのは事実なのである。
九雷の掌上の自分というものを、いままで見て見ぬ振りをしてきたのだ。
自分はそういう生き方をしてこなかったはずなのに、いつの間にか、守られるだけの存在になっていて、全てが九雷の思惑通りに進んでいる。
この状況はおかしいのか。正すべきなのか。それとも、甘受すべきなのか――。いや、そんな風に思い悩むことこそ、景春の思うツボではないか。
沙龍の思考は寝不足のせいで、ぐるぐる回っている。
「祥倫、コーヒー」
「ハッ、ただいま」
なんにせよ、ひとまずは目の前の仕事を片付けなければなるまい。
沙龍は書類に目を通す仕事に戻った。
陽輝の副官二人には明確な役割があって、祥倫は奔放な大将の尻ぬぐい、由基のほうは周囲に「小型陽輝」と認識されているくらい実質的な腕の部分で大将に近いものがある。沙龍にもそれはすぐに分かった。

交渉の場に同席してもらうなら祥倫、修羅場に連れていくなら由基、と思っておけばいい。ただ、もし配役が逆になったとしても全くの役立たずにはならないだろう。

祥倫とて戦場では銃を取るのだし、由基も腹芸ができないわけではない。

「そういえば、王霊君はなにしてんの？」

沙龍がどちらともなく聞いた。答えたのは祥倫である。

「北方軍大将は北の本拠地です。あそこは実働部隊ですからね。帝都では北方軍は動かせません」

「そうなのか……。じゃあなにか起こるとしたら、東西で協力して南を叩けってことになるね」

「そうですね。いまはまだ『ひっそり警戒』の段階ですが」

「しかし……、南方軍は勝算、あるのか？」

ないだろう？　と沙龍は言っている。精鋭部隊の東方軍と、荒くれ者ぞろいの西方軍である。そのふたつを本気で敵にまわす気だとしたら、もう自暴自棄としか思えない。

「南はラボがありますからね。なにか秘策があるのかもしれません」
「南ね……。いい加減うっとうしいな……」
沙龍は敖丁も嫌いだが、敖明のことは当然『敵』と見ている。
先代南海龍王というハンパな肩書の敖明に、なんの口実もなく喧嘩をふっかけるわけにはいかなかったのでいままでは様子を見ていたのだが……。
「ん？　ちょっと待てよ？　いまは同格か……」
図らずとも大将代理という肩書は同じだ。四十八時間の同僚ではあるが。
「よし、先手必勝。直談判にいくか」
沙龍がなにやら不穏なことを言い出した。
「は、はい……!?」
祥倫は青い顔をしたが、由基は「お？　出入りですかい？」という顔をして自分の武装を確認しだした。
副官といえば、東方軍にも二人、対照的なスタッフが居る。

やや口の軽い冬践（とうせん）と、銅像のように表情が動かない夏招（かしょう）である。彼らもまたこの非常事態に右往左往していた。

いまは東方軍大将である景春が、本来、九雷のやるべき仕事をしているので、冬践と夏招が東方軍の執務室でいつもの三倍くらいの仕事をこなしている最中だ。

そこに、なぜか奇妙な一行があらわれた。Ｔシャツ姿の沙龍と、西方軍の副官二人、である。

「やっほー、お久しぶり。東方軍のお二人さん」

冬践と夏招は以前、沙龍と行動を共にしたことがあるので、いくらか親しみもあるのだが、それでも沙龍の存在はここ天界ではＶＩＰであることに変わりはない。

「緑麗様!?　いえ、緑麗大将代理、どうなさったんです？」

「いや～、図らずともこんな事態になっちゃって、アレなんだけども。丁度いいから厄介なジジイに釘を刺しておこうと思って。君たちも着いて来てもらえるとありがたい」

冬践は「はぁ？」という顔で、沙龍の後ろに居る二人に説明を求める視線を投げたが、二人ともかすかに首を横に振るだけだった。
「景春さんに許可は取った。行くぞ」
そのやり取りの中、夏招はさきほどの由基と同じく、自分の装備している銃の弾倉を確認していた。
夏招は冬践よりも正確にいまの事態を把握している。東極山から戻ってきた景春の様子を見て、夏招もまたなにかを察したのだ。
普通なら裏切り行為を働いた敖丁に対して、なんらかの行動を起こすはずの景春がなにもしない。それにはなにか理由があるのだろう、と――。
そして、沙龍の無謀に見える言動もよく知っている夏招である。
「緑麗様の背後はお任せください」
普段、滅多に無駄口をきかない夏招がそう言った。

15　元帥官邸

宮城エリアに次ぐ帝都の一等地とも言うべき場所には常緑の森が広がっており、この一帯は『玉清境』と呼ばれている。その深い緑の中にはゴシック調の瀟洒な建物群が点在しており、火雲宮の中でもトップオブトップ、ＶＩＰ中のＶＩＰたちが住んでいた。

天真もかつてはこの一角に自分の城を持っていた。風景はあまり当時と変わっていない。

いま、天真と魁星の目の前に見えてきた、瑠璃色の屋根と黄金の正吻（※屋根の装飾）を持つ建物群は、成人した九雷が長らく住居としていた。『雷城』と呼ばれている。そこに住む者の名と技にちなんでつけられた通称だが、この美しい城は今では元帥官邸として認識されていた。

意識不明の九雷が運び込まれたその官邸では、天真とは顔見知りの機械仕掛けのような執事がすぐに出てきて、事なきを得た。

徹頭徹尾、そつの無い仕事ぶりで、ずっとこの屋敷の管理をしている老齢の執事である。主人の異変に動じることもなく、「インフルエンザで倒れた」という天真のあからさまな嘘を疑うこともしない。黙々と寝室の準備をするだけだった。

九雷はいまでもたまにはこちらで寝泊りしているので、普段使っている寝室には読みかけの本などもあった。サイドテーブルに何冊か無造作に置かれている。

天真はそのうちの一冊を手に取ってみた。学術書のように見える。つまらない、と思った。これが恋愛小説やハウツー本の類だったらあとでからかってやれるのに。

そういえば、昔は本を読んでいる姿しか見たことがなかった。

初めて九雷に会ったときも、彼は日当たりのよい中庭の一角で行儀よく本を読んでいた。

ふと、記憶が蘇る。

あの明るい日差しは初夏だっただろうか。縦に細長い敷地の中には建物と中庭がバランスよく配置されていた。

幼き日の天真が訪ねたのは、城下町にある四合院建築の中でも最上の類に入るものである。

そこに仮住まいしていたのが、九雷少年だった。

保護者は入れ代わり立ち代わりした。彼らはだいたい皇族の傍系を自称しており、九雷を哀れんだり、厄介者扱いしたりしたが、金は惜しまなかった。この役を任された以上、粗相や手抜かりがあってはならないと思っていたのだろう。彼らが概ね「良き保護者」であったのは、世間体を気にしてのことである。

十二歳ほどの年齢の天真が中庭に現れたとき、

『殿下――』

太子（東宮）の印である冠に気付いた少年は、読んでいた本を慌てて閉じると、片膝を折り、拱手して、皇族に対する最敬礼を取った。その動きには一切の無駄がない。

少年の漆黒の髪は綺麗に撫で付けられ、そのまま官帽でもかぶれば童殿上もできそうな気品があった。どこか寂しそうな双眸には、背伸びした知性が見てとれる。

生まれてからずっとこの歳まで幽閉同然の身だったというが、落ちぶれた印象はない。少なくとも、衣食住には困らない暮らしだったのだろう、と天真は思った。

彼の身の上を側近から聞かされていた天真は、複雑な思いでこの天才少年を見つめた。

『なにを読んでいたんですか？』

天真もまだこのときはあどけない少年である。

無邪気で明るい、張りのある声は、周囲を優しく従える。

『家庭教師から薦められた学術書です。殿下はお小さい頃に既にお読みになったかと』

九雷少年の言い方は、やや卑屈にも聞こえた。やんごとなき東宮殿下が罪人の子を見に来たのか、と思ったのだろう。

なるほど、確かに天真はこれを読んだことがあるし、内容もほぼ丸暗記している。

こじんまりとした紫檀の机には、他にも学術書が数冊積まれていた。

天真は九雷の機微を理解して、
『お勉強の邪魔をしてしまったようです。いずれまたお会いしましょう』
と、屋敷の奥へ消えた。
言葉通り、その後も、天真と九雷は何度か顔を合わせた。その四合院や、宮中で。二人は歳の近い学友となった。
互いのことは血の繋がらない親戚だと認識していたが、それは二人とも決して口にはしなかった。
九雷が亡き盤帝の血を引く皇族であることは、周囲の思惑と、本人の希望もあって、未来永劫封印されることになったからだ。
盤帝のシンパ達はこぞって反対したが、彼らが、やがて頭角を現した玉帝に追い詰められることになるのは少し先の話だ。
とにもかくにも、玉帝の政治は鮮やかだった。
政敵を蹴落とすことにかけては、天才的な勘を持っていたとしか思えない。
（九雷は結局、アレを真似しちゃったんでしょうかねぇ……）
物思いに耽り始めた天真の傍らでは、魁星が独り言に近い呟きを漏らしてい

る。
「なんで九雷はあっさり自分の体を乗っ取らせちゃったんでしょう……？　敖丁がコソコソ盤古の再生実験していたのは気付いていただろうに」
いくつかの前提を飛び越えたような疑問だった。
それは恐らく秦帝の疑問なのだろう、と天真は思った。
「ねぇ、そう思いませんか？　殿下」
「私はもう『殿下』じゃありませんよ」
苦笑しながら、虫を払うように手を振った。
久しぶりに『殿下』などと呼ばれては、くすぐったくてしょうがない。
「これは失礼。つい、昔の癖で」
魁星は大げさに謝罪のポーズを取った。
胸に片手を当て、片足を引く。
それこそが過剰な礼であり、いま、天真が暗に諭したことがちっとも分かっていない態度だ。
しかし、魁星にしてみれば、これは無意識である。普段、近衛府の隊長として

火雲宮に詰めているので、儀礼は染み付いているのだろう。
「確かに、知っていてわざと、ってのは、九雷のやりそうなことではあるんですけどねぇ……」
今度は、天真が独りごちた。
詳しいことはなにも知らされていない天真は、どう動いていいのか分からない、というのが正直な感想だろう。
「碧霞元君は、本音では、九雷ごと盤古真人を葬りたいんでしょうかねぇ？」
魁星がまたズバリと聞いた。
それは、あの場に居た者なら皆そう思っただろう。
碧霞元君の殺意は、四方将神は分からぬはずはないし、天真や魁星も感じ取ったはずである。
「もしかしたら、逆なのかもしれません」
天真はさらに憂鬱な展開を予想しているようだ。
「え……？」
「〝九雷ごと〟じゃなくて、〝盤古真人ごと〟」

「うわぁ、それ、ハードですねぇ……」
「ですよ」
もし、九雷と碧霞元君が本当に対立関係にあるのだとしたら、天真自身もハードな選択をしなければならなくなる。
幼馴染みの友か、心の恋人か、どちらかを選べ、という、究極の選択だ。
「殿下……いえ、天真大夫はそうなったとしたら、どうするんです？」
好奇心丸出しで聞いてくる魁星は、本当に、下世話な興味しかなさそうである。天真の身の振りようによっては、こちらもどうこうとか、そういう計算はない。
そんな魁星のミーハーを嗜めることもなく、天真は真面目に答えた。
「きれいごとを言えば、親しい者同士で争ってほしくはありませんが……。シアランが本気なら、彼女はもう止まりませんし、止められません。私は中立の立場で、見守るしかないですね」
「中立、ですか」
「それもきれいごとですが、ね」

「しかし、彼女の本当の敵は九雷ではないですよね？　泰山府君でしょう？」
「ですよ」
「だったら、盤古真人は、味方につけてナンボ、だと思うんだけどなぁ……。仮にもあの最高神を敵に回そうというなら、強力な味方はいくらいてもいいわけだし……」
魁星は顎をさすりながらそんなことを言っていた。
それもまた、半分は秦帝の考えなのだろう。
「それは、九雷が依り代になっている以上、心情として嫌なんでしょうね」
「なぜです？　あの二人って、過去になにか因縁ありましたっけ？」
「特にないと思いますよ。シアランが九雷を嫌ってるのは、要するに〝いけすかねー奴〟だからです。ただ、それだけ」
「はぁ。四行マイスターは難儀ですねぇ」
碧霞元君の奇矯は、結局、魁星のその一言に集約される。
尋常ならざる力を持って生まれた者の宿命と言ってもいいかもしれない。
九雷は青白い顔をしたまま眠り続けている。

点滴を吊るした状態で、医者が二十四時間張り付くという万全な態勢であるが、天真はもとより「獏使い」である魁星の表情も険しい。
つまり、あまりよい状態ではないのだ。
対象者を夢の世界に閉じ込めることができるという魁星の能力は、当然、対象者のポテンシャルに大きく左右される。
いま、魁星は、九雷の体内に盤古真人の魂魄を封じ込めて、表層に出てこれないようにしているわけだが、魁星がそうしている、というより、盤古真人が九雷の夢世界を面白がって見物している、という状態らしい。
その気になれば、盤古真人はすぐにまたこの身体を支配して、自由に外を歩くことだろう。
『西方軍大将代理』の権限が切れる四十八時間以内になんとかする、と景春は言っていたが、既に一夜明けて、実質はあと三十六時間ほどだろうか。
その間、盤古真人という偉大なる魂魄を九雷の夢世界の中に引き止めておける自信は正直言ってなかった。
「イチかバチか、やってみるしかないですね。ここで気を揉んでいるよりはマシ

でしょうから」
魁星は、九雷の夢世界に自ら乗り込んでみる、と言う。
以前、沙龍に『夢封じ』を仕掛けたときは、黄龍のパワーに負けて否応なく自分の意識も引きずり込まれたのだ。今回は、まだ九雷の夢世界を外から支配できているだけ、魁星に分がある。
自分は、盤古真人をあの異空間で引きとめておけばいい。口八丁で丸め込むのは得意分野だ。
「もし僕がタイムリミットまでにリアル世界に戻ってこれなかったら……」
魁星が言った。
「どうなるんです？」
「表面上はなにも変わらないと思います。盤古真人は依然、九雷の身体を乗っ取って好き放題できちゃいますし、九雷はずっとこの身体の中で眠り続けるだけ。『侵入者』である僕の意識は制限時間を超えると自然に排出されちゃいますから。ウイルスみたいなもんでね。ただ、もしかしたら、ウイルスである故に体内で駆除される危険もあるので……。そのときはすみませんが、天真大夫、あと

のことをお願いしていいですか？」
「つまり、『魂（こん）』が消えて、『魄（はく）』だけになってしまうと？」
「はい」
「そうなると、植物人間のようなものですね……」
「ええ、そうです」
「で、その場合、あなたの延命処置はいらない、と？」
「そういうことです」
「分かりました。あとのことは責任を持ってお引き受けしますから、あなたは心おきなく仕事をしてきてください」
意外にもというか、予想通りというか、天真にはキリッと言い渡されてしまった。
「少しは心配したり引きとめたりして欲しかったりして……」
しかし、言うほど凹んでいるわけでもない。
危険は覚悟の大仕事である。
ただ、そんな風に命を賭して働くような情熱がこの男のどこにあったのだろ

う、と天真は少々不思議な気持ちでいる。
昔からいい加減な男で、親の言いなりで士官学校に通っていたときも適当に卒業できればいいやというのが態度にも表れていた。
九雷に色々とちょっかいを出しては一蹴されるという図は当時のお約束でもあり、少なくとも魁星自身はそれを楽しんでやっていたようだ。
不倫沙汰を起こして帝都を追放されたのも、もしかしたら窮屈なお役所仕事を嫌ってわざと追放されたのかもしれない。
そんな魁星が数年前に帝都に戻ってきて、近衛府に再就職してからは、特にスキャンダルも起こさずに真面目に働いているらしい、という噂は、当時を知る者にしてみればにわかには信じがたいのだった。
もしそれが秦帝の影響だとしたら、あの歳若い従兄弟はたいしたものだ、と天真は思う。
魁星が横たわる九雷の額に手を乗せた。ひんやりと冷たい。
「じゃ、いってきますね」
そう言うやいなや、魁星の身体はカクンと力が抜けて沈み込んだ。

（はやっ……！）
見守っていた天真は、このタイムラグの無さに魁星の技の極みがあるのだと知った。
ベッド脇につっ伏した魁星の身体には一応毛布をかけてやったが、それだけである。
特にすることもなくなったので、天真は携帯端末でメールを打ち始めた。
送信相手は九玄である。
心の恋人が居ようと居まいと、現在の意中の相手にはご機嫌伺いのメールを送る。たまには花束も送っているし、直接持っていくこともある。
あまり頻繁にアプローチをしても嫌がられるだけなので、タイミングを計るのは難しいのだが、いまのところ、嫌われてはいないという自信はあった。
といっても、特別に好かれているわけでもない。
九玄の好みは『色気のあるインテリ』らしいので、その点については大きく外れているとは思わないのだが、恋愛など、常道から外れた場合の方が燃え上がるのではないだろうか、と天真はこの歳になって思うようになった。

それは、沙龍の例でもよく分かる話である。
九雷と出会う前の沙龍は、木佐曰く『昼間っから繁華街をウロウロしてるような』『不良を卒業したような豪快なタイプ』が好きだったらしい。
この界隈で一番それらしい人物といえば、陽輝である。
しかし、実際には、決して昼間から繁華街をウロつきそうにない九雷に惹かれたのだし、陽輝とは色気のない関係のままだ。
好みなど決してアテにはなるまい。
「これでよし、と……」
ありとあらゆる美辞麗句をこれでもかと盛り込んだメールを、いつものように多少ドキドキしながら送信すると、いつものように一分もせずに返信があった。
この素早い返信も、当初は「脈がある」と盛大に勘違いしていたものだが、なぜ一、二文字だけの返信を「脈がある」などと思ってしまったのか。恋の盲目は恐ろしい。
『不要』
今週末、手土産をお届けに伺いたいのですがお時間ありますか？　という問い

への答えである。
「……」
こんなことでへこたれていては、愛を語る資格はない。
文面を変えよう、と天真は思った。
盤古真人のことなど、知ったことではない。

夕方になって木佐が現れたときは、少々驚いた。
四方将神ならば『玉清境』にも入れようが、木佐がそこまで九雷のことを心配しているようには見えなかったからだ。
しかし、暇を持て余していたので、話し相手が来たのは単純に嬉しい。
天真はお茶の用意を始めた。
「九雷元帥は？」
「いまのところ大丈夫ですよ。といっても、魁星頼みなんですが」
と、豪華な牀（しょう）の脇に転がっている仮死状態のような魁星を指す。

「九雷の夢の中で、盤古真人と直接対決してるみたいです」
「そうですか。僕はよく知らないんですけど、この方は、確か馨に嫌われてなかったですか？」
「ええ、前に色々あって……。でも、ご心配なく。魁星は九雷のこと、好きなはずですから」
「はぁ……。この人も罪な人ですね。ほうぼうを魅了して、ほうぼうに恨まれて」
九雷のことを言っているのだ。
「そうですねぇ」
天真は心底同意するように笑って言った。
木佐はしばらく天真の雑談に付き合っていたが、帰りがけにこんなことを言い出した。
「実は、四神府宛てに九雷元帥から緊急のメッセージが入ったのは、事件が起きる直前のことだったんです。ほとんど文章になっていなかったので相当急いでいたんでしょう。しかし、逆を言えば、その数秒は時間があったってことですよ

ね。で、咄嗟に、司令本部ではなく、僕らに送ってきたってことは、送信相手を間違えたのでないなら、なにか意味があるんじゃないかと思って――」

黒い装束に身を包んだ木佐に、かつての真武君の面影はまるでない。

しかし、天真はやはり天界の住人なので、魂のレベルでその人となりを見ている。

そんな天真からすれば、やはり真武君は真武君なのだ。どこまでも自分の仕事をしようとするところはなにも変わっていない。

「残念ながら、私にはその意味するところは分かりませんが……」

「そうですか」

最後に「九雷元帥を頼みます」と言って木佐は雷城をあとにした。

16　魁斗星君

そこは意外にも普通の世界だった。なんの刺激もない退屈な世界、といってもいい。

水色の空の下に、黄色い野生花が群生している。それは、はるか彼方の地平線までずっと続いていた。

足元の黄色い絨毯の正体は、主に金盞花（きんせんか）である。ところどころ、タンポポや、他の雑草花も混じっているようだった。

空の青と、地の黄――『補色』である。互いの色を引き立てる関係だ。

この景色を魁星はどこかで見た気がしていたが、それを思い出す前に、黄一色の花畑の中に立つ、背の高い人影が振り返った。

「盤古真人……」

九雷と全く同じ姿だが、魁星には分かる。

ふと、この夢を見ているはずの九雷本人はどこに居るのだろう、と思った。

こういう場面で、まず最初に遭遇するのは、ドリームマスターであるはずなのに。
「やぁ、魁斗星君（かいとせいくん）」
九雷の姿と声をした盤古真人は、少しかしこまった呼び名を使った。
公の場で、目上の者が目下の者を呼ぶのに一番ふさわしい呼称だ。
「なかなか一人にはさせてもらえないもんだね。次から次へと誰かがやって来る」
「すみません。皆、貴方の力を畏れているんですよ」
「『力』はちゃっかり敖丁君に封じられて大したことはできないっていうのに。まぁ、僕を復活させたのが敖明の方じゃなくてよかったと言うべきなのかな？」
その言い方からして、南方軍大将は色々と便利な技を持っているようだ。
能力値にリミッターをかけるとか。
「そう、ですね」
魁星は用心深くそのあたりを聞き出そうと思ったが、力みすぎるといいことはない。

ここは、流れに任せるのが一番だろう。
「さて、しかし、どうしたものかね。ここは居心地はいいが、あまり長居もできないし」
これは、誰かの喋り方に似ている、と魁星は思った。
西の龍王だ。
しかし、なぜだろう。
沙龍に聞いた話では、昨日の盤古真人は「元帥の姿なのに、魁星さんみたいに軽い喋り方だった」という。
とはいえ、本当の盤古真人など誰も見たことはないのだ。
どれが真の姿なのか誰も分かりはしない。
「この夢世界に、誰か、私以外の者が来ましたか」
さっき、盤古真人が「次から次へと」と言っていた言葉を確かめるべく、魁星が訊ねた。
「うん。ちょっと思わぬ人が、ね」
フフッと笑った盤古真人は、敖閏の仕草も真似ていた。

彼は、どこかのデータバンクにアクセスでもしているのだろうか。
そういうものがあったとして、の話だが、例えば、どこかにそういう情報があって、それは、Aという人物の姿形だけではなく、話し方や立ち居振る舞いなど、表層で認識されるべきものが全てが記録されているとしたら、そして、その情報を盤古真人がなんらかの方法で得ているのだとしたら、説明はできる。
「……」
魁星は、いまの盤古真人の返答の仕方を考えてみた。
もし、敖閏がああいう答え方をしたとしたら、その訪問者は女性だろう。男だったらもっとつまらなそうに答えるはずだ。
ならば、少しカマをかけてみることにしよう。
「それが誰だか当てたら、私のちょっとしたお願いを聞いていただけますか？」
「だめだよ、魁斗星君。君の口車に乗ると痛い目にあう」
「酷いなぁ……。それ、誰が言ってるんです？　私ほど善良な市民は居ないと思うんですけど」
「善良――かどうかはともかくとして、君は秦帝の名代だからね。僕はいま、統

治者と話しているつもりでいるよ」
「それなら、陛下のお考えはお分かりでしょう。生まれたての貴方に、消えてくれ、というのも酷な話ですが、この夢世界で貴方に駆け引きを持ちかけるほど、私も器用じゃありませんので」
「まぁ、歓迎されていないことくらいは分かるけどね。君にたった一つの使命があるように、僕にもたった一つの使命があってね。それを成すべく、いま、僕はここに居る。それを邪魔するというなら、残念ながら、大したこともできない、この『力』を使うしかないね」
バカ正直に仕掛けたのは失敗だったか、と思ったが、どうせ最初から勝ち目はないのだ。小細工はするだけ無駄である。
「しかし、そうだな……」
九雷の姿のまま、盤古真人は優雅な手振りで言葉を発している。
九雷となにが違うのかといえば、その仕草云々よりも、決定的なのは瞳の輝き方だろう。
濃い藍色をした九雷の瞳は、普段は冴えた、鋭い光を湛えている。陰陽で言う

なら、決して陽ではない。
しかし、いま、盤古真人が語る瞳は、まさに陽中の陽ともいうべき光を放っているのだ。
これが、九雷をよく知っている人には、違和感の原因となっている。
「君には借りがあるからね、魁斗星君。君の言う〝ちょっとしたお願い〟が君個人のことなら、叶えてあげなくもないよ」
「借り……ですか？　おかしいな。私は今回初めて貴方に会ったんですが……」
「直接はね。でも、君は君なりの方法で、長い間、人界と天界という二つの世界を見守ってきてくれた。それが、二つの世界を分けてしまった僕たちにとっては、救いであり、借りになるんだよ」
なんの冗談か、と思った。
昔もいまも、魁星にそんなつもりはない。
「その昔、帝都を追放されたことを仰っているのだとしたら、あれはちょっと自暴自棄だっただけですし、その後も、人界で遊んでいただけなのですがね」
親の言いなりにイヤイヤ士官学校に入学し、どうにかこうにか卒業し、どうに

かこうにか近衛府に就職した魁星は、やがて不倫沙汰を起こして帝都を追放される。
人生に対して自棄気味だったというのは自覚している。
いまでもそれはあまり変わってはいないかもしれない。
しかし、短い寿命を持つ人々の間で生きてみて、なにかが変わったのは確かだ。
さらに、そのまま天界に戻るつもりなどなかったところを、秦帝に直々に呼び戻されてから、またなにかが変わったのも事実である。
「確かに、君はいつもその時々に得られる快楽によってしか動いていない。でも、実はそれが生き物の一番自然な姿なんだよ」
「はぁ……」
この盤古真人は果たして敵なのだろうか、と魁星は思った。
秦帝は「東方天界に害をなす以上、敵と思え」と言っていたが、昨日の今日で判断はまだできない。
「だとすれば、ラッキーとしか言いようがないですが。それで願いを叶えてもら

えるのなら、万々歳です」
「秦帝の願いはダメだよ。あくまでも、君個人の願いだからね」
「ええ、分かってます。私の〝ちょっとした願い〟は、貴方がお得意だったという『易』の極意を特別にご教授いただけたら、というものです」
「易だって？　それなら、大体、伏羲（ふっき）が伝えたと思うけど？　『連山』（※占いの書）を読めば君ならすぐ理解できると思うよ」
「それが、現存している書はところどころ解読不明ですし、肝心の『天地開闢の章』などは完全に抜けています。そう、まるで、誰かが意図的にそうしたかのように」
「なるほど……。時の為政者にとって、その部分は不都合な歴史だったということかな」
盤古真人はそうすっとぼけているが、全ての歴史を知る彼がそれを知らないはずはない。
秦帝はその不都合な歴史を知るために、または知らしめるために、敖丁に盤古再生を命じたのだ。本来、敖明の計画だったものを横取りする形で。

つまり、敖明は打倒黄龍のため、秦帝はそれを阻止し、消された歴史を知るために同じものを復活させようとして、事故が起きた――というのが今回の真相である。

「つまり？　君は『易』の極意なんかではなく、消された歴史を知りたいの？」

「同義語ですよ、盤古真人。貴方が伏羲氏にいみじくもその全容を伝えた『易』は、未来を見通す技でありながら、その実、過去を語っている。天地開闢の事実がなければ、占いとして成り立たない。違いますか？」

「フム……、違わないが、消された歴史を君に教えることに躊躇はあるね」

「なぜです？」

「好奇心という点では、君も敖丁君もいい勝負のようだ。しかし、例えば、あなたの命はあと三分です、とでも告げられたら、誰だって動揺するだろう？　これが『あと二十四時間です』なら、なんとか理性を保つこともできるかもしれないけど、つまり、そういうことでね。それを知った者たちがなにをしでかすか分からないくらいの危うさがあるんだよ。知ってしまうと、どんなに冷静な者でも、平常心ではいられないと思うよ」

「……」
魁星の好奇心に嘘はないが、結局、これは時間稼ぎにすぎない。
タイムリミットまで盤古真人をここに留めておけばいいのだ。
あとは、秦帝や軍部がうまくやってくれる。
「教えては頂けないのですね。この夢世界で知った事実は、現実世界に戻れば覚えていられない、と言っても？」
「……そうなの？」
「だからこその、獏ですよ。彼らは、悪夢も瑞夢（ずいむ）も全て喰らう。夢で知りえた情報など、所詮、儚きものです」
そう語る魁星は、盤古真人の、敖閏を真似た優雅さに負けない雰囲気を持っていた。
エレガントな所作である。
貴族には貴族用の所作で、武人には武人としての礼儀で対する魁星の器用さは、生来のものである。
この処世術があったからこそ、いままで面白おかしく平穏に生きてこれたの

だ。
同じく人界周遊をしていた景春などとは、正反対の人生だっただろう。
「それに、私もこう見えて職務に殉じる憧れなんかもありましてね。その『消された歴史』とやらを知った後に、おかしくなって自動小銃を乱射するようであれば、殺してもらっても構いません」
「……物騒な話だねぇ」
フフッと盤古真人は笑った。
まるでそうならないのを知っているかのような口ぶりだ。
「敖丁君ですら、なんとなく見当がついている、くらいの話だよ？」
「推測で充分ですよ」
「そう。なら、話してあげよう。さっき緑麗チャンにも同じことを話したけど」
やはり、さきほど来ていたのは緑麗か、と魁星は思った。
恐らく、沙龍の意識が落ちたときに動いたのだろう。
色んな夢世界を渡り歩く魁星は、「魂の管理者」と自称した緑麗がまだ完全には消えていないことを知っている。

彼女にもまだ果たさなければならない使命が残っているのだろう。
「そう難しく考えなくてもいいよ、魁斗星君」
盤古真人は微笑んだ。
その態度には敵意も殺意もない。
これは全てを知る者の余裕だろうか。
それとも一部の力を封じられてしまった全能者の悲哀か。
黄色い花畑の中に、いつの間にか、幼稚園にあるような小さなかわいらしい木の椅子が出現している。それも二脚。
「どうぞ」
椅子をすすめられ、魁星は従った。
大の男二人が、春の景色の中で子供用の椅子に座っている。なんとも奇妙な風景だ。
「さっき、僕にはたった一つの使命がある、と言ったよね。それは、僕のエゴなんだけど――」
「エゴ……？」

「もともと、ここは龍の惑星になるハズだった。そういうおおまかな運命みたいなものがそれぞれの星にはあってね。誰が管理しているわけでもないんだけど、星の誕生と、その後の発展と、そして最期はだいたい決まっている。すごくゆるい感じでね。

そして、地球は龍たちのパラダイスになる予定だった。空を飛ぶことのできる者、地を支配する大型の者、海に住まう者――、先史的には『恐竜』と呼ばれるそれらの存在が、この星の主役と決まっていた。

しかし、彼らは比較的短期間で全滅してしまった。

僕らがこの星に干渉しなければ、彼らはもう少し違った形で生まれ、そしていまも地上を支配し続けていたはずなのに」

「始祖たちのせいなんですか？」

そう聞くと、盤古は悲しそうに頷いた。

彼の脳裏には、恐竜たちが出現するはるか前の、真っ赤に焼けた大地と、ところどころ黒いマグマの風景がある。

原始の地球の姿だ。

そこには、生きているものなど誰も居なかった。
唯一、生きているものがあったとすれば、それは海も空もない、灼熱の塊の中で、眠るように佇んでいた、この星の『息吹』である。
静かに、ただひたすらじっと、孤独と熱に耐え、やがて、この大地が冷える頃に目覚め、全ての龍たちの祖となったはずの存在である。
この存在を『混沌(こんとん)』と呼んだのは盤古自身である。
「勿論、やっつけるつもりなんかなかったよ。あまりにも『彼』が苦しそうだったので助けられないかと思ってね。それで手を出してしまったんだ」
天地を開くという離れ技を混沌は望んではいなかった。
なぜなら、彼はやがてそれが自然に成されることを知っていたからだ。
「つまり、僕はこの星の歴史を数億年分早めてしまったんだ。あの天地開闢は余計な善意だったのさ」
「それで、色々歯車が狂った、と？」
「おそらくね。僕には同志が数人居た。この星に干渉することに対して、賛成する者も、反対する者も居た。伏羲はどちらかと言うと中立だったけど、一番、事

後の責任を感じたらしい。つい最近までこの世界にとどまり、なんとか歴史の修復を試みようとしていた」

つい最近、といっても、彼らの場合それは数千年単位である。

無限の時を生きている彼らには、千年など瞬きをする間に過ぎ去ってしまう。

「伏羲氏……つまり、庖犧（ほうぎ）氏のことですね」

名前が変わっているのは、単に長い年月を経たせいである。

同じ名前を名乗ることに飽きたり、結婚したり、住む場所を変えたり――、そんなことを繰り返しているうちに名前は変わっていくものだ。

そこにあまり意味はない。が、庖犧が九雷の家庭教師をしていたことには多少の意味がある。

盤古はこの星の行く末を自分の血脈に託すことにし、伏羲は自分の手で修正をしようとした。

その始祖の思惑が重なって、九雷という男ができあがったわけである。

「九雷に限らず、君たちはとてもうまくやっていると思うよ。世界をいくつかに分け、上手に住み分けをしていると思う。でもね、魁斗星君。それは僕達、始祖

の望んだ姿ではないんだ」
「なんとなく分かってきましたが……、もしや盤古真人、あなたの使命とは……」
「早急に答えは出さない方がいいよ。まぁ、のんびり行こう、魁斗星君。君の時間稼ぎくらいには付き合うさ」
「……」
魁星は嘆息した。
やはり、全てお見通しではないか。
久しぶりにこんなに絶望的なまでに途方に暮れてしまった。

17　直接対決

思いつきではあったが、準備はそこそこした。

まずは暇そうにしていた汎々（ファンファン）を四神府から呼びつけ、なにやら言い含めて一行に加えた。

さらに、

「芝居っ気のあるヤツ数人みつくろって。機材もテキトーにそれっぽいのを装備。広報の腕章とかあるでしょ？」

そんな指示を出し、いざ、十人ほどのスタッフで南方軍大将の執務室に乗り込んだ。

「本当に大丈夫ですか？　いきなり拘束されたりしたらいくら我々でも……」

道中、冬践は心配そうに言ったが、

「真昼間に、ぞろぞろスタッフを引き連れていくのに、手出しなんかできるもんか」

沙龍は撥ねつけた。
しかし、
「まぁ、それでも『もし』向こうさんが敵意をむき出しにしてきたら、『仕方なく』応戦しないとな」
そんなことを言った。
敖明は友達候補ではない。
敵である。
なので、態度は決まっていた。
「お初にお目にかかる。南方軍大将代理の敖明殿。私は緑麗。このたびの事件でお忙しいところを、陣中見舞いに来た」
そう言って、沙龍はドカッと来客用ソファに腰を下ろし、背の低いテーブルの上に脚をのっけた。
これはヤクザのやり方だが、喧嘩は最初が肝心である。
「ああ、なんか、写真撮ったり、カメラ回したりしているのが居るのは気にすんな。むさくるしかった上官が、いきなり代替わりしたんで、広報の連中がはしゃ

いじゃってね。なんでも機関紙に特集記事を出すそうだ。まぁ、奴らのことは空気だと思ってくれればいい」
「……」
初めて会う敖明は、端整な顔をした老齢の男だった。若い頃はさぞかしモテたことだろう。しかし、沙龍はこの顔には妙に生理的嫌悪を覚えた。
敖明は沙龍の傍若無人な態度にあからさまに顔をしかめ、全身で軽蔑をあらわにした。
「わざわざのご挨拶痛み入ります。が、互いにタスクは山積みでしょう。ここで油を売っていても仕事は片付きません」
さすがに挑発に乗ることも、激高することもない。
「まぁ、そう仰るな、ご老体。長年の意中の人が来てやったんだ。話すことがあるだろう」
沙龍は海千山千の年寄りを相手にするのは慣れているので、敖明のこの反応は予想通りだった。
「はて。なんのことか」

「既に物忘れのお年頃か。なら、昔話でもしようか。そのうち思い出すだろう」
沙龍は気持ち悪いくらいにニコニコと笑っている。
最初に名乗って訪問理由を告げ、敖明がそれに応えた以上、彼に「つまみ出せ」はできない。それをやった時点で敖明の負けだ。
そもそも、ここに敖明の命令をただちに聞く忠実な士官や兵はどれほど居るのか。よくて数人だろう、と沙龍サイドは判断した。
（こいつが朱子だな）
沙龍は敖明の背後に控える無表情の副官をチラッと見た。やや小柄な男だ。
一瞬、視線が合うが、お互い無視する。
沙龍の受けた報告では、この男は敖丁の腹心である。いきなり裏技を使って南方軍大将代理になった敖明に尽くすはずはなかった。
しかし、もう一人、この珍妙な一行を最初に出迎えた副官のほうはあきらかに龍族出身で、敖明の息のかかった士官に見えた。艶やかな黒髪に、青い瞳の、こちらもモテそうだが性格の悪そうな男である。エリート臭がプンプンする。
「そうそう。玄都では『覇王』が盗まれて、太上老君がお怒りだとか。刑吏の者

たちもこのクソ忙しいときに、酒ドロボーの捜索なんて、お気の毒に」
昔話、といっておきながら時事問題から始める。
「しかし、太上老君はどうやってあの幻の銘酒を手に入れたんでしょうな？　現物はもう残っていないという話だったが――」
「……」
沙龍が『覇王』の存在を知っているのは、緑麗が知っていたからである。
つまり、銘酒とよばれるものには目のなかった緑麗が、太上老君の目を盗んで『覇王』を飲んだシーンを白昼夢で見たのだ。緑麗にとってはよほどの事件だったのだろう。魂に刻まれるほどに衝撃的な味だったのかもしれない。
その『覇王』になにかとんでもない付加価値があるらしいというのは沙龍の推測にすぎない。
が、敖明は表情を硬くして、沙龍の推測を肯定していた。
「ずいぶんと、お変わりになられたようですな」
敖明はソファに座る沙龍の前で立ったまま。見下ろすような視線である。
「昔はそのようなまわりくどい話し方はなさらなかった。あなたはなにをおっ

しゃりたいのか」
「あんたの知る『緑麗』は腹芸のできない酔っ払いだったか？　だとしたら、その目はずいぶん節穴だな」
この偉そうな物言いは演技ではなく、素なのでは、と祥倫は思った。しかし、その不遜さを、年上だが同格の敖明は窘めることはできないし、怒ることもできない。
心理的にも物量的にも沙龍のほうが優位に立っているのは誰の目にも明らかだった。
「なんとも残念だが、あんたが整形した人形は、いまじゃこんな偉そうなクソガキだ。まぁ、とりあえず話の続きを聞けよ。なんで紛失したと思われた『覇王』があったのか。それは〝覇王があっては困る誰か〟が〝紛失したことにした〟からだろう？　そして、実際に太上老君のもとにあったのは〝紛失したら困る誰か〟が〝こっそり残しておいたから〟じゃないのか？」
「……」
沙龍は覇王の具体的な効力を知らないし、なぜ一部の者が銘酒がなくなったく

らいで騒いでいるのかも分からない。ただ、かまをかけているだけである。
「そういう場合、たいてい、叩けばホコリが出てくるもんだが、どこかのご老人は掃除が大好きらしく、チリひとつ残さないらしい。毎日床を舐めてるんじゃないかって言われてる」
「……」
ここまで言っても敖明はわずかに眉間を動かしただけだった。
(さすがに、老獪だな……)
沙龍は次の一手を考えたが、その前に敖明の側近がわずかに動いたのが見えた。
しかし、由基と夏招のほうが早かった。
側近の抜いたハンドガンは、由基の撃ったマグナムに弾かれて飛んでいったし、彼の鼻づらには夏招の向けた銃口がある。
沙龍は動かなかった。こういうのは得意な者たちに任せていたからである。
「おいおい、あとさき考えろよ〜。最悪、銃殺刑だぞ」
沙龍は一ミリも動かずに言った。

「この……成り上がりが！」
撃たれた手を押さえた側近が吠えるが、敖明が片手をあげて制した。
「一番あとさき考えてないのは緑麗様だと思うんですけどねー」
いま、見事な早撃ちで仕留めた由基が軽口を叩く。
さっきまで肩にカメラをかついでいた『偽広報』のスタッフたちも、いまは全員が敖明とその側近を銃で拘束している。
先に仕掛けたのは向こうなのだから、この図は正しかった。
沙龍の勝ちだ。
しかし、
「血気はやった部下の凶行はお詫びします。銃殺刑でもなんでも沙汰は受けさせましょう」
事務手続きをするように敖明が言う。
「ですので、私にまで銃を向けるのはやめていただけますかな」
沙龍はこの部屋を訪れて初めて嫌悪感をあらわにした。
「なるほど、そうやって部下を切り捨ててきたわけか。あいにく、私は西方軍大

将代理ではなく、将神としてここに来たんでね。これは軍内部の内輪もめじゃない。四神府から正式に告訴させてもらう。言い訳は軍法会議とやらでするんだな」

「……!!」

目を見開いた敖明の間近で手錠を取り出したのは朱子だった。

確かに沙龍は「西方軍大将代理」とは名乗っていないし、軍服も着ていない。西方軍大将代理はついでにやらされている、という体で腕章だけしているのだ。

これで、あくまでも本業は将神、と言い張る。汎々はそのためのスタッフであった。

自分にしては温情をかけたかもしれない、と沙龍は思っていた。

それはフラっと水雲宮に遊びにきた偃月も同じことを言うだろう。

「昔の哥々なら問答無用でブチ殺したんじゃないのかー？」

とでも。
しかし、今日の偃月に嫌味を言いたいのは沙龍のほうである。
「まったく、身重の妻を放っておいてなにフラフラ遊んでんの！」
ついこの前も同じことを言った気がする。まったく男どもときたら、どいつもこいつも、と愚痴りたい気分であった。
「そうは言っても、しばらく外泊してくれって言ったのは吉羅（きら）のほうだし」
「そうなの？　なんで？」
「なんか気が散るんじゃないか？　マタニティーブルー？　みたいな？」
偃月は軽い旅装である。いつものことだが、この旅烏は誰に似たのだろう。
「あれ？　九雷元帥は？　そういえば小龍も居ないな」
なにも知らない偃月が水雲宮の最上階を見渡している。
普段ならここにはもっと色んな気配があるのだが、今日は沙龍と、テラスに寝そべっている黒焔虎しかない。
「……」
沙龍は無意識にため息をついていた。

「なんか、忙しいのか？」
「いま、珍しく仕事しててね。それが佳境なもんで職場に寝泊りっていう状況なわけ。ここには風呂に入りに戻っただけなんだよ」
「そうなのか。じゃあ、また出直すかなー」
沙龍が西方軍大将代理になって二十四時間で敖明は拘束できた。軍本部でどれくらいの期間拘束できるのかは知らないが、少なくとも将神に銃を向けた以上、あるいは部下に向けさせた容疑がある以上、取り調べはきっちりやってもらう。
これで、景春の言う「ふたつの親子喧嘩の可能性」のひとつは消えたわけであるが、その景春が一番厄介だと言った碧霞元君はあれから姿を見せない。
そして、沙龍は小龍もあれ以来姿を見せていないことに気付いた。九雷の居る雷城にも行っていないらしい。
そういえば、敖閏もしばらく前から行方が知れないのだった。
「……ちょっと待って、ユエ」
帰りかけている偃月を引き留めた。
「ん？」

「元帥はちょっと困った状況なんだけど、当面は無事なんだ。でも、小龍が行方不明で……」
そう言ったとき、何度か聞いたことのある羽音が水雲宮のバルコニーに降り立った。
白い上衣に青い袴をはいた碧霞元君が、ホークス君とともに現れたのだ。
そして、
「小龍はどこ？」
厳しい顔で言う。
「いま、行方不明」
「やっぱり。いじけてこもっちゃったね」
「……？」
「小龍が居ないと盤古には勝てないよ」
そう言われて、沙龍は素直に顔をしかめた。
「あなたはいま昏睡中の元帥ごと盤古を葬りたいのではなかったの？　シアラン」

「そのほうが簡単だよ、と言っただけで、それをすることで事態が悪化するならその方法は選ぶべきではないね」
ごもっともなのだが、この言い方は妙に神経を逆なでする。
「小龍はどこに行ってしまったの？　あなたには分かるんでしょう？」
沙龍は苛立ちを抑えて聞いた。
「たぶん、この星の一番奥深いところ」
「って……、つまり」
それは内核と呼ばれる場所ではないか。およそ生命活動などできない場所のはずだ。
「あなたは小龍が『混沌』という存在だと言っていたね。それは本当？」
「うん」
「小龍なら盤古に対抗できるの？　昔、負けたのに？」
「うん。いまの盤古は不完全だからね」
「不完全……？」
「もし、当時のままの盤古が復活したのだとしたら、私たちはいま生きていない

よ」
「どういうこと？」
「たぶん、至宝のひとつがニセモノだったんじゃないかって敖丁は言ってる」
沙龍には分からない話だが、盤古の魂魄を再生する過程においてミスがあったようだ。いや、作為的にそうなされたというべきか。
「元帥は……助かる？」
「あなたが助けたいのなら」
「……」
いずれにせよ、盤古はどうにかしなければならないのだ。
ならば、答えは決まっている。
「どうやったら小龍を呼び戻せる？」
「たぶん、それなりの背景と空間がないと無理だね」
「それなりの、背景……」
沙龍はそれを歴史的な、という意味だと受け取った。
もしくは縁のような。

古来の龍たちにとって、縁のある場所。
龍を呼ぶ場所――。
「……」
「心当たりがあるなら、私も一緒に行くよ。あの子を追い詰めてしまったのは私だから」
碧霞元君のその言葉には誠意があった。
「……」
沙龍の表情は読めないが、これは既に決心した顔だな、と思ったので、
「哥々、心当たりがあるのか？」
偃月はそう聞いた。
「ある。ユエも一緒に来てくれ。会わせたい人がいる」
「いきなりだな。まぁ、時間はあるけど……、いったいどこなんだ？」
「目的地は北緯三十四度、東経十三度」
「……？」
ずいぶん東だな、と偃月は思った。

「岡山県倉敷市、龍王山――」

（第二部につづく）